御沙汰有之ハ樣ニ可仕ハ。依之相伺ハ。以上。

二月〇享保十八年(紀元二三九三年)。

大岡越前守〇忠相。

稲生下野守〇正武。

右書付丑(〇享保十八年紀元二三九三年)二月八日松平左近將監殿(〇乘邑)へ上ル。

此書面之儀、先見合可申ハ。此上ニも願出ハハヽ、其節相伺、書面之内何れニも可申付旨、被仰渡、奉畏ハ。

丑〇享保十八年(紀元二三九三年)。二月八日

大岡越前守〇忠相。

稲生下野守〇正武。

町人共へ申渡ハ書付案

大岡越前守〇忠相。

稲生下野守〇正武。

米高直付而、町々より大勢奉行所へ訴訟ニ出ハ、米御買上有之ハ故、高直ニ相成ハ旨申由相聞ハ。御買上有之時分ハ高直ニハ無之ハ。西國邊虫附ニ而急死ニ可及者數萬人有之。爲夫食、所々より御米被差遣ハ故、自然と御當地米拂底ニ付而、高直ニ相成ハ。勿論御藏々ニ御米無之ハ。此上諸國より御米段々相廻

り、川浚御普請も被仰付ハ得ハ、取續可申ハ。西國邊之者迄餓死を御救被下ハ儀ニハ得ハ、御當地〇江戸。町人餓死ニ及ハ樣ニハ被成間敷ハ。此度願之儀可申出筋ニ無之ハ。京大坂等も有之ハ得ハ、江戸計之御沙汰ハ難成事ニハ。重而願出間敷ハ。

二月〇享保十八年(紀元二三九三年)。

——虫付損毛留書〇編年史料收。

〔參考〕補饑新書云フ、

享保年間(〇紀元二三七六年—二三九五年)凶荒の時、都下の米商、各米を儲へ、〆賣して、庶人難儀に及ぶ。乃官より度々圍米致すまじきよし急度命令あれども、是は諸侯より預り米なり、或は春入なりとて、後には米商のみならず、富有のものは各買儲へて利を射ること日々多し。遂に逮捕して二三人を得たり。一と通り吟味ありて、罪に行はるべきを、高瀨學山町奉行大岡忠相に告て、其内の一人を選びて其事を糺さしむるに、諸同類各々身したくする間もなく、これによりて同類盡く發覺して皆捕へらる。これ同を以て同を伐つの術なり。肉食の人心得へき事なり。太宰彌右衛門(〇純)は、儒を以て一代を風靡し、諸侯大夫よりして士庶人に至るまて尊崇する者多し。享保壬子(〇十七年紀元二三九二年)の凶荒の年には、諸侯の招にて處々邸舍に至て經を講し、後には菓子茶酒膳等出ても、決して吃することなく、食事時分なれは、飯を食するにも汁香物をは食ふ、餘の平壺なと一切に箸を着ることなし。其時人々、何ゆへ諸侯よりの賜なるを食し賜はさると問へは、國有飢

人、人主不レ餐、國有二凍人一、人主不レ衣と申傳ふ。人主すら是の如し、まして我輩甘味を食ふへからずと答へしとなり。今時の人よくこれを思ふへし。現在米價の騰貴にて食の乏しき時なるに、樣々の美食を欲する事、誠に天道に對し恐多し。

此外萬年記「享保十八年三〇紀元二三九三年。正月廿四日、就二米穀高直一現米二千石賜二商家一、分二救貧窮者一。慶寬私記及柳營年表秘錄「同〇享保十八年、紀元二三九三年正月。晦日、舊冬ヨリ町方飢人多く、御米被レ下、男貳合女一合。去年〇享保十七年紀元二三九二年。ゟ西國中國四國飢人九十六万九千九百人と云々。武江年表「同〇享保。十八年癸丑〇紀元二三九三年〇中略。去年享保十七年紀元二三九二年。ゟ引續米價貴し。〇中略。飢饉に付、御救を給はる。」ト見ユル類、皆省略ス。若夫此ノ飢饉ノ原因タル西南諸國ノ凶荒ハ、日本災異志ニ「是歲〇享保十七年紀元二三九二年。諸國ノ凶荒ハ、日本災異志ニ「是歲〇享保十七年紀元二三九二年。夏、伊勢近江以西ノ諸國霖雨連旬既ニシテ大ニ熟シ、蝗蟲繁生シテ穀稼ヲ害ス。駿河伊豆陸奥出羽諸國モ亦蝗アリ、其蟲形貌蚋子ノ如ク、或ハ小、或ハ大、(修史館調書)(柳營年表秘鑑)爲ニ西國ノ諸民飢餓ニ及フモノ多シ。是ニ於テ幕府ヨリ關東米ヲ出シテ之ヲ諸侯ニ貸シ、以テ飢民ヲ救ハシム。(續日本王代一覽)町家へ救米ノ割合ハ男一人ニ付米二合、女一人ニ付一合。(泰平年表)」ト有リ。三貨圖彙ニハ「今年、〇享保十七年紀元二三九二年。七月初ヨリ西國中國四國九州筋田畠虫付不熟凶作ニヨリ、當九月〇享保十七年紀元二三九二年。以後ハ一時ニ米價貴クナリ、米一石代新銀ニテ百

三十目ヨリ百五十目位。〇中略。右ノ通西國筋ハ、田畠不熟ニテ、米穀數ナク、又士民共ニ飢渴ニ及ヒ、道路ニ倒ルヽ者數ヲシラス。西國四國九州大小ノ諸侯、米穀拂底ニテ、士民ノ撫育モ出來難ク、公務ヲ欠テ迷惑ニ及ブ。コレニ依テ公儀ヨリ拜借金ヲ仰付ラレ、猶又大坂〇攝津國。始メ公領ノ市民餓死スル者ハ現米ヲ以テコレヲ救ハル。又市中ノ富民ヨリ米錢雜物ヲ出シ飢民ヲ救フ。然ルニ去亥年〇享保十六年紀元二三九一年。市中ノ買持米コレ有ニ付、大抵八九月〇享保十七年紀元二三九二年。ノ頃迄ハ窮民モ可ナリノ取續セシ處、追々米穀拂底ニテ、十月〇享保十七年紀元二三九二年。後ニ至リテハ、飢死スル者多シ。茲ニ因テ公儀ヨリモ東國北國ノ領主地頭ヘ下知セラレ、數萬ノ米穀ヲ大坂〇攝津國。又ハ西國筋ヘ積出サル。尤東北ノ國々、昨〇享保十六年紀元二三九一年。今年〇享保十七年紀元二三九二年。作方豐熟ニテ、當九十月〇享保十七年紀元二三九二年。迄ノ登リ米高左ノ通。コレニ依テ、米價漸ク下落ス。北國登リ米凡二百三十萬石。東國登リ米凡八十七萬八千石。右登リ高大數トイヘトモ、西國四國九州筋ヘ積下シ、此年〇享保十七年紀元二三九二年。冬、大坂堂島〇攝津國。有米勘定高十八萬千七百石トイヘリ。但シ舊記ニ、此年〇享保十七年紀元二三九二年大坂有米高廿五万二百俵ト有。此米三ツ俵ニシテ八万石餘ノ米ナリ。享保子年〇十七年紀元二三九二年。西國ノ飢饉ハ、後世人口ニ殘ル程ノ凶作ナリ。」ト見ユ。

附記

寛保三年東國不作

慶寛私記又云フ。「同（○享保十七年（紀元二三九二年）九月。）西國・中國・四國稻虫付ハ大名十七人幷萬石以下損毛拜借金出ル。」ト、以テ其一斑ヲ推ス可シ。近世荒饑略考ニ至テハ是歲（○享保十七年（紀元二三九二年）。）關東亦不作ト爲シ、云フ「享保十七壬子年（○紀元二三九二年。）關東五穀不熟、依レ之窮民御救」ト。果シテ然ルヤ否ヤヲ知ラズ。

〔參考〕三貨圖彙云フ、「祖父ノ云フ、享保（○十七年紀元二三九二年）ノ飢饉ト云ハ、全ク前年打續キ豐熟ユヘ、（○貴脫歟）キ米穀ヲ土芥ノ如賤シヨリ、九州中國初メ、西國ノ諸侯難澁ニ及フトイヘリ。如何トナレハ享保十年（○紀元二三八五年）ノ頃ヨリ五六年ニ至リ、年々諸國豐作ニテ、米價下落シ、一石四十目ヨリ二十八九匁ナリ。コレニ依テ諸侯方金銀通用不手繰ニナリ、公私ノ辨用ナリ難ク、據ナク民ヲ聚飲シ、國內底ヲ叩テ年々米穀ヲ拂出セシニヨリ、纔一ケ年ノ飢饉ニテモ備貯コレナキ故、士民ノ撫育モナリカタク、逼至ト難澁セラレシナリ。然レハ凶作ノミニモアラス、國々金銀不手繰ノ上ノ不熟故、至テ難澁ニ有シト云リ。扨享保子年（○十七年紀元二三九二年）以後ハ、前文ニイヘル如ク飢饉ニ懲リ、頻ニ諸國開田勸農ノ術行ハレ、唐芋等ヲ初メ、少シモ食料ノ扶ケトナルヘキモノヲ植テ米麥ヲ喰ヒ延セリ。」

〔附記〕三貨圖彙ニ、

寛保三癸亥年（○紀元二四〇三年。）戌年（○寛保二年（紀元二四〇二年）。）東國不熟ニテ、今年（○寛保三年（紀元二四〇三年）。）有米少シ。

寶曆五年飢饉

寶曆五年飢饉事蹟

桃園天皇寶曆五年乙亥（○紀元二四一五年。）年穀登ラズ、冬（○寶曆五年（紀元二四一五年）。）ヨリ六年丙子（○寶曆○紀元二四一六年。）春ニ亘リ米穀騰揚ス。町民相約シテ粥ヲ喫シ、歲暮ノ贈答ヲ廢ス。（○廻狀留。憲法編年錄。町年寄手控。民間備考錄。近世荒饑略考。）

寶曆五年飢饉　寶曆五年（○紀元二四一五年。）ノ飢饉ハ奧羽殊ニ甚シク、江戶亦米價騰貴シ、窮民ヲ出シタル者ノ如シ。

十二月（○寶曆五年（紀元二四一五年）。）五日

別紙

堀田相摸守殿（○正亮。）御渡候御書付之寫

御奏者番衆
寺社奉行衆　ゟ

大目付ゟ

當年（○寶曆五年（紀元二四一五年）。）國々米不作之趣ニ付、直段高直ニ相成候、來春ニ茂至り候ハヽ、米直段彌相嵩、下々可レ及二難儀一候間、先達而置籾被二仰付一ハ萬石以上面々、酉（○寶曆三年（紀元二四一三年）。）戌（○寶曆四年（紀元二四一四年）。）兩年置籾之由、一ケ年分之籾米、此節相拂ハ樣可レ被二申付一候。委細之儀者御勘定奉行可レ被二承合一候。

十二月〇寶暦五年(紀元二四一五年)。

右之通可レ被二相達一候。

二月十二日　〇寶暦六年(紀元二四一六年)。

子〇寶暦六年(紀元二四一六年)。ノ二月九日堀田相摸守殿〇正亮。御渡

御奏者番衆

寺社奉行衆

大目付ゟ

去年〇寶暦五年(紀元二四一五年)。國々米不作之趣付、直段高直ニ相成レ、當春ニも至レハヾ、米直段彌相嵩、下々可レ及二難儀一レ間、先達而置籾被二仰付一レ萬石已上之面々、酉〇寶暦六年(紀元二四一六年)。ノ年之置籾之内一ヶ年分之籾米、一年相拂レ樣相達レ候。然ル處當春〇寶暦六年(紀元二四一六年)。ニ至るも直段彌高直ニ付、去年〇寶暦五年(紀元二四一五年)。相拂レ殘一ヶ年分茂園置レ候ニも不レ及レ間、相拂レ樣可レ被二申付一レ。委細之儀ハ、御勘定奉行可レ被レ蒙レ命レ。

二月〇寶暦六年(紀元二四一六年)。

右之通可レ被二相達一レ。

廻狀留〇憲法編年錄略。

亥〇寶暦五年(紀元二四一五年)。十一月廿一日

米高直ニ付粥給レ儀、年番名主申合之上、左之通組合名主ゟ通達。

米殊之外高直ニ付、世上之爲ニも有レ之間、町々身上善惡無二差別一、粥給可レ然旨、先例も有レ之ニ付、年番申合レ間、致二通達一レ。

十一月廿一日〇寶暦五年(紀元二四一五年)。

年番

寶暦六年〇紀元二四一六年。二月二日奈良屋ゟ去亥年〇寶暦五年(紀元二四一五年)。年番名主被レ呼、舊冬米高直ニ付、粥給レ義、幷暮之餅取遣無用可レ致旨、年番名主申合相達レ儀、書付差出レ樣、被二申渡一レ。

二月四日〇寶暦六年(紀元二四一六年)。

右ニ付、年番名主寄合、右之通書付相認、同所ゟ差出。

米高直ニ付、町方ニ而舊冬〇寶暦五年(紀元二四一五年)。粥給レ義、又ハ暮之餅取遣無用ニいたしレ申合之義、御尋ニ付、左ニ申上レ。

舊冬〇寶暦五年(紀元二四一五年)。ゟ殊之外米高直ニ罷成レ二付、爲二相續一粥給可レ然旨、尤御觸ニ而も曾而無レ之レ、暮方之爲申合レ義ニレ間、心得違無レ之樣ニ与、名主共一同申合、去十一月〇寶暦五年(紀元二四一五年)。中町々ゟ申聞レ。

暮之餅取遣相止可レ然哉之義ハ、組々名主共一同之申合ニ而も無二御座一レ、壹番組二番組ニ而も、先年も米高之節申合レ儀ニ付、殊ニ舊冬〇寶暦五年(紀元二四一五年)。町々之内ニ而も暮之餅取遣等相止レ義ニ致置旨、名主方ゟ申出レ町々も有レ之レ

ニ付、右之趣一番組二番組之内ニ而も申合ハ、御觸ニ而も無之旨、心得違不仕ハ様、尤十二月〇寶暦五年(紀元二四一五年)。中、右組合町々申聞ハ。其外之組々ニ而も、名主共心ニ而右之趣を町内ニ申聞ハ所も御座ハ哉、又も名主方ニ右之趣を町内ニ申達呉ハ様ニ与申ハ間名主方ニ申聞ハ所も御座ハ様及承ハ。右之外名主共不申聞町々之内ニ而も、町人共申合、暮之餅取遣相止ハ町々多御座候旨、是又及承申候。

右之趣御尋ニ付申上ハ。以上。

子〇寶暦六年(紀元二四一六年)。二月

(下ケ札本文ニ申上候一番組二番組ニ申者、日本橋(〇市内)ヲ北今川橋(〇市内神田區)邊迄、本町(〇市内日本橋區)邊ヲ兩國(〇市内日本橋區邊ニ御座候。

——町年寄手控〇編年史料收。

亥年番　名主共

寶暦六丙子年〇紀元二四一六年。五穀不熟、窮民御救。

——近世荒饑略考

民間備荒錄ニ、「寶暦五年乙亥〇紀元二四一五年。五月中旬より寒冷行れ、八月(〇寶暦五年(紀元二四一五年)。のするまで雨ふりつゞき、其間五日七日雨歇といへとも、寒氣は初冬の頃のごとく、三伏の暑日も布子を襲し、水田に入て芸る者は、手足ひへ龜手ぬる程の寒氣なりければ、稻は植たるまゝにて長せず。漸く穗は出たれども、みのらずして枯ぬる故、奥羽おほいに飢饉し、諸民の歎いふばかりなし」ト見エ、惇信院殿御實紀ニ凶荒ニ依リ、出羽ノ諸侯酒井忠寄〇左衛門尉。酒井忠休〇石見守。戸澤正諶〇上總介。等金ヲ幕府ニ借ルコト見ユレハ、此災ハ奥羽ノ飢饉甚シカリシ者ナル可シ。

〔附記〕武江年表ニ、

四月〇寶暦七年(紀元二四一七年)。より五月〇寶暦七年(紀元二四一七年)。迄霖雨、關東洪水、奥州飢饉にて江戸の米價も次第に登揚せり。

光格天皇天明四年甲辰〇紀元二四四四年。是ヨリ先二年壬寅〇天明〇紀元二四四二年。三年癸卯〇天明〇紀元二四四三年。諸國凶歉、天災相踵ギ、江戸ニ於テモ、物價騰貴シ、市民ノ困窮スル者多シ。是ニ至テ幕府米穀ヲ發シテ市民ヲ賑救ス。〇天明錄。安永撰要類集。三貨圖彙。天明七丁未年飢饉事蹟。

天明四年飢饉　附記　寶暦七年米價登揚

天明四年飢饉事蹟、天明二年〇紀元二四四二年。三年〇天明〇紀元二四四三年。諸國凶荒ノ結果、江戸ニ及ヒタル者ノ如ク、相傳ヘテ云フ、

石見守殿〇酒井忠休。御目付ハ

諸國共近來米穀高直ニ有之候上、別去年〇天明三年(紀元二四四三年)。已來、直段引上ケ、輕

覇都時代ノ飢饉

きものとも及難儀候趣其筋渡世ニ不レ致候者ニ而も不相當之石數買持候
義致間敷候。其外町々在々之者とも、銘々當年〇天明四年(紀元二四四四年)。新穀出來迄可
取續手當之外、余慶之米穀不圍置、其土地ハ不及申、他國ゟも賣出候樣いた
し、幷諸國之廻米道賣道買等決而致間敷、若他之難義をも不顧、余慶之米穀
圍置候歟、又者道賣道買等いたしハ者有之おゐてハ、吟味之上御仕置可申
付候。且又願之義等其筋ゟ不申立、此度之申渡ニ乘じ、大勢徒黨集、在町之人
家を打壞、其外理不盡成儀等いたすこおゐては、是又吟味之上、御仕置可申
付候間、所役人五人組之者とも申合、心を附右體の者於有之ハ、早速其筋ゟ
可申出、若等閑成義有之者、一同可爲曲事候。

右之通、諸國御料ゟ其所之奉行御代官、御預り所私領ゟ領主地頭ゟ、町々在
々浦々迄不洩樣、急度可申渡候。

右之趣可被相觸候。

四月廿三日〇天明四年(紀元二四四四年)。

天明四辰年〇紀元二四四四年。九月三日

——天明錄

〔上方米引受候積約束致候ものは可申出儀ニ付町觸

〔辰〇天明四年紀元二四四四年)九月三日相觸申候。

上方米引受ハ米問屋之外、町々米買賣人共又ゟ素人共ゟ當時上方米引受候
積り荷主共ゟ約束致置候者有之候ハヽ、何國何方誰ゟ申者ゟ米何程引請ハ
約束致置候ゟ申儀書付認當人幷五人組名主加印致、來ル七日〇天明四年(紀元二四四四年)
九月。迄、奈良屋市右衛門方ゟ可差出候右約束米無之分ハ、名主支配限、其斷書可
差出候。名主無之町々ゟ、其行事五人組ゟ、其斷書可差出候。

右之通從町御奉行所被仰渡候間、町中不殘早々相觸候。以上。

九月〇天明四年(紀元二四四四年)。

天明四辰年〇紀元二四四四年。九月十日

〔米下直ニ相成候ニ付、前々之定ニ立戻、問屋之外脇々ニ而上方米引受申間敷儀、
町觸。

〔辰〇天明四年紀元二四四四年)九月十日相觸申候。

米直段格別高直ニ相成、町方及困窮候ニ付、當正月〇天明四年(紀元二四四四年)。相觸、下直
ニ成候迄、米問屋共仕入米之外、上方筋地廻り共、入津之米穀者、問屋仲買ニ不
限、素人ニ而も、賣買勝手次第爲致、暫問屋之定相崩、手廣賣買申付候。然處、此節
米相場下直ニ成ハニ付、上方筋地廻り共ニ、當正月〇天明四年(紀元二四四四年)。町觸以前之

姿ニ立戻、前々之通り、上方米之儀者、米問屋兵庫屋彌兵衛兵庫屋武兵衛西宮甚左衛門川村八兵衛白子屋清左衛門高間傳兵衛右六人之外、脇々ニ而引受取捌申間敷候。勿論商米を武家之用米ニ取捌、買賣人素人共ニ賣散候儀致間敷候。右ニ付當時脇々ニ上方米所持之分有之候ハヽ、早々今日ゟ日數廿日限ニ取捌可申候。右日限以後取捌候ハヽ、急度可申付候。此旨町中可觸知もの也。

辰〇天明四年(紀元二四四四年)。九月十日

天明四辰年〇紀元二四四四年。九月廿日田沼主殿頭殿〇意次。ゟ口上ニ而申上候處、可然旨被仰聞候ニ付、水野出羽守殿〇忠友。酒井石見守殿〇忠ゆ御直ニ上ル。同〇天明四年(紀元二四四四年)。九月廿日大前孫兵衛を以御下ケ、承付上候樣被仰聞、翌晦日〇天明四年(紀元二四四四年)。九月大前孫兵衛を以返上、主殿頭殿〇田沼ゐゝ御直ニ上、御禮をも申上ゐ。尤朱書ニ而出羽守殿〇忠友。差上ゐ書付寫認肩ゐ張上ル。

御救買請米代殘金之儀ニ付奉伺ゐ書付

書面伺之通、餘金米渡方諸入用被相渡、相殘候分、骨折候者共ゐ被下置候旨、被仰渡、奉畏候。　辰〇天明四年紀元二四四四年九月廿九日

曲淵甲斐守〇景漸。

先達而御當地輕き町人共ゐ、御救之爲買請米被仰出、大坂〇攝津國。表ゟ相廻りゐ米三萬石之内延着之分、先達而申上ゐ通、御藏納ニ仕、町方ゐ相渡ゐ分貳萬八千六拾八石餘、運賃共壹石ニ付銀七十九匁三分九厘四毛餘之積を以、此代金三萬七千百四十兩二分銀六匁四分三厘六毛、此節迄追々御藏納仕ゐ。然處欠米并買請ゐ者病死欠落等償方并渡方之節入用も相懸ゐニ付、壹石ニ付三分餘相增七十九匁七分宛之積を以、買請申付ゐ間、右余慶之代金百四十三兩八匁九分餘、并出米代金貳兩壹分銀九匁二分餘有之、右之内ニ而四ヶ所土藏番人賃錢并御藏納金銀包方其外人足諸入用ニ相渡、相殘ゐ分、金百四兩一分有之ゐ間、是又御藏納可仕儀ニ御座ゐ處、右米請取渡之節、掛り與力同心町年寄并其外之者共、日々早朝ゟ夜中迄相掛り、暑中殊之外骨折ゐ儀ニ御座ゐ間、可相成儀ニ御座ゐハヽ、右之者共ゐ被下置ゐ樣仕度奉存ゐ。依之奉伺ゐ。以上。

曲淵甲斐守〇景漸。

天明四辰年〇天明四年(紀元二四四四年)。十月朔日田沼主殿頭殿〇意次。水野出羽守殿〇忠友。酒井石見守殿〇忠ゐ別紙添、大前孫兵衛を以上ル。

御救買請米代餘金割渡ゐ儀申上ゐ書付

御　届　　曲淵甲斐守〇景漸。

先達而輕き町人共に御救買受米被仰付ハ代金餘金之分、米渡方之諸入用ニ相拂、殘金其節骨折ハ者共に被下置ハニ付、別紙〇略。之通割合差遣ハ樣可仕ハ。依之申上置ハ。以上。

辰〇天明四年(紀元二四四四年)。十月　　曲淵甲斐守〇景漸。

——安永撰要類集

一、去ル六月〇天明二年(紀元二四四二年)。以來殊之外米高直ニて、市中小賣百文ニ付八合九合位ニ有之、隨て人氣甚惡しく、世間餘ハと騷々鋪ニ付、此頃曲淵甲斐守〇景漸。牧野大隅守〇成賢。兩町奉行より町中惣て粥給相凌候樣ニと、嚴敷被相觸候事なり。〇中略。

一、當年〇天明三年(紀元二四四三年)。五月頃より米高直ニて、金壹兩ニ付六斗三升位ニ相成り、市中とかく噪敷處に、七月〇天明三年(紀元二四四三年)。に至りいよ〳〵引上ケ、兩ニ五斗二升、百文ニ付七合ニ相成候ニ付、町方騷動大かたならす。其後九月〇天明三年(紀元二四四三年)。に相成り、殊之外高直にて、兩に四斗二升、百文に付六合又ハ五合五勺ニ至り、諸人の難澁言語に述かたし。右の景氣故盜人おひたゝ敷、晝夜之差別なし。〇中略。

一、此節〇天明四年(紀元二四四四年)正月中。飢民毎ニ多く相成候ニ付、小網町〇市内。廻船問屋共申合セ、小屋取立施行相始め、毎日朝六ツ時より四ツ時まて之由、時刻に後れ候者ハハ、鳥目十六文つゝくれ遣し候。

一、二月〇天明四年(紀元二四四四年)。米うり百文ニ五合、兩に四斗二升位也。近頃饑饉流民多ニ付、公儀ニて無宿小屋六万坪へ取立ニ相成、無宿之者も皆々其處へ被遣、一人ニ付日々三合つゝの積りニ被下置候。又江戸中輕き者共、御救願町奉行所へ申出候へ共、御取上無之趣、然るに諸民之難澁するを憚かられ候故ニや、曲淵殿〇景漸。は朝夕二食ニ儉約被致候由なり。其後三月〇天明四年(紀元二四四四年)。ニ相成候てより、諸方人減し被行、是迄の奉公人いつれも暇相出し候ニ付、俄ニ無宿之者多く相成り、段々ト六万坪へ被遣候へ共、跡より追々と殖參り、小屋も充滿する程之由。是全ク米非常ノ高直故なり。

——天明紀聞

一、辰〇天明四年(紀元二四四四年)。正月中ゟ三月中迄ニ、江戸行倒レ有之、御目付衆に相届、撿使被指越分、左之通。

一、行倒人七十五人。内、十四人存命ニ而町奉行衆へ相渡ス。

一、捨子三十二人。

右之通ニ御座ハ。〇下略。

——守靜堂雜錄

一、昨年〇天明三年(紀元二四四三年)。ゟ餓死人多、關東筋在方、江戸町中、及困窮、哀成事共、巷說區々也。京〇山城國。大坂〇攝津國。ニ而も、町人共與力なと分限ニ應し、施行米抔致候由。此節京都〇山城國。に於て壹万俵、大坂〇攝津國。貳万俵、江戸三万俵、御救のため御拂米被仰付。

——森山孝盛日記

一、天明三癸卯〇紀元二四四三年。春中ヨリ雨降續き大水にて、麥作甚あしく候處、此年〇天明三年(紀元二四四三年)。の六月十日頃より、いつくともなく江戸中一統ニ地響震動晝夜絕間なく候故、諸人あやしみ候處、六月十二日〇天明三年(紀元二四四三年)。巳の中刻頃より空一面に曇り候て、闇夜の如くになり、燒灰に砂交りて降る事誠に霧雨の如くなり、翌十三日〇天明三年(紀元二四四三年)六月。申の下刻の頃漸々降止候故、不思議の事ニ存、皆人あやしみける。是ハ上州淺間山燒候て砂を吹出し候よし。關東奧州筋都て近在一統ニ石之燒灰砂降候ニ付、秋作よろしからす、米穀直段高直ニ相成候處、天明四甲辰〇紀元二四四四年。又麥作惡敷、五月末より六月にいたり、江戸中にて舂米相場小賣百文に六合五勺、或ハ七合位に賣買致し、町方一統に困窮

いたし候ニ付、七月十二日〇天明四年(紀元二四四四年)。關東御代官伊奈半左衛門殿〇忠尊。より江戸町中端々迄人別狀を以御救米被下置候。尤右之米御渡しの場所者、江戸橋・日本橋〇市内。之間、土手藏前之河岸にて下され候間、町役人之者共罷越候て、乱に無之樣に可請取旨を仰渡され、則江戸町中端々の者迄車之上町名印候幟を建、一町毎に町役人之者並月行事罷出、御米頂戴致し罷歸、人別狀通り割渡ハ而、一統頂戴いたし候。

——天明丁未年江戸飢饉騷動之事

天明三癸卯年〇紀元二四四三年。關東五穀不熟、江戸及奧州飢饑。此節五千俵田沼山城守〇意知。に被下之。信州淺間山燒崩、溺死多し。窮民滿道路。依之被命於領主、以鐵砲追之、或ハ打殺之。

——近世荒饑略考

今茲〇天明三年(紀元二四四三年)。春ハ雨少ク、四月〇天明三年(紀元二四四三年)。ヨリ霖雨トナリ、八月〇天明三年(紀元二四四三年)。ノ比ニ至迄歇時ナク、殊ニ冷氣ニシテ、暑中ニ袷衣綿衣ノ類ヲ服スル者アリシ程ノ不氣候ナリ。加之信州淺間山燒出シ、利根川洪水、關八州灰アリ、奧羽饑荒、米穀ハ勿論、野菜ノ類迄絕テ實ラス、貧民餓死ニ及フ者、處々ニ相聞エタリ。〇中略。襲位〇松平定信ヲ指ス。ノ日、家老ヲ召シ、凶年ハ珍シカラサルヿニテ、年久ク禍ノナカリシハ幸ト云ヘシ、驚ヘキニ非ス、凶年ニハ凶年ノ備ヲナスコ

ソ急務ナレ、イデ此時ニ乘シテ質素儉約ノ道ヲ敎ヘテ、國家磐石ノ固メト成ベシト示シ玉ヒ、翌々十八日（天明三年（紀元二四四三年）十月。）邸中ノ士悉ク召出シ質素儉約ノ事ハ、我身ヲ以テ目的トスヘシ、若モ食言アラハ、人モ皆我ニ背クヘシト命シ玉フ。因テ嚴ニ膳羞ヲ減シ、朝夕一汁カ一菜ト定メ、衣服ハ是迄身ニ馴サルノ木綿ヲ服シ、寢具モ欝金染ノ木綿裏ト改メ玉フ。駕籠ノ蒲團ハ紬ニテ製セヨト命シ玉ヒシヲ、有司ヨリ當時用ヒ玉ヘル天鵞絨新製ナレバ、是ヲ退テ別ニ製セント言上シケレバ、公（松平定信。）宣フハ、物ノ改ムヘキ時ハ、左ニテハナキモノナリ。唯新ニセヨト命シ、身ヲ以テ下ニ先ダチ率ヒ玉フ。

——樂翁公傳記——

三貨圖彙ニハ、天明二壬寅年（紀元二四四二年。）ノ條ニ、當五月（天明二年（紀元二四四二年）。）ヨリ土用中ニ至ル迄、雨天續キ、江戸ハ七月（天明二年（紀元二四四二年）。）ニ入、地震屢々コレ有リ、五畿内ハ大風雨ニテ、東西國々不熟ナリ。米穀六分ノ作ニテ拂底ニ付、當五月（天明二年（紀元二四四二年）。）ニ至リ肥後米代七十五匁一分。筑頃ヨリ追々高直ニ相ナリ、極月（天明二年（紀元二四四二年）。）ニ至リ肥後米代七十五匁一分。筑前米代七十三匁一分。金代五十九匁前後ヨリ六十目餘。錢代九匁五分前後。」ト見エ。天明三癸卯年（紀元二四四三年。）ノ條ニ、「昨寅年（天明二年（紀元二四四二年）。）諸國不作ニテ、米價高直ニ

成。コレニ依テ、春以來市民（大坂。）困究ニ及ヒ候ニ付、米穀始メ綿紬等ニ至ル迄。過分ニ買置申間敷旨、度々制令コレアリ。且市中ノ者ヨリモ、米錢ヲ貧民ヘ施行ス。然レ𪜈米價益々貴ク、殊ニ當年（天明三年（紀元二四四三年）。）頃冬ノ如ク寒冷行ハレ、麥不作ニテ、別テ關東筋ハ、六月中旬（天明三年（紀元二四四三年）。）ヨリ七月朔日（天明三年（紀元二四四三年）。）ニ到ル迄、信州淺間山燒出、近國ノ田畑夥シク損毛シ、其八九月（天明三年（紀元二四四三年）。）ニ到リ、寒冷強ク、關東北國筋ハ勿論、諸國𪜈五穀不熟ニテ、米價高直ニ成、江戸表ハ、金一兩ニ米四斗六七升、新米五斗前後。冬（天明三年（紀元二四四三年）。）ニ至リ、愈米拂底ニテ、極月（天明三年（紀元二四四三年）。）ニ至リ、精麥一石ニ付、銀ニテハ九十目餘。コレニ依テ市民米穀買シメ置候義嚴シク制令アリ、大坂（攝津國。）米商人ノ中ニ廿人計リ御咎ヲ蒙ル者コレアリ。」ト有リ。參照シテ其梗概ヲ知ル可シ。

七年丁未（天明七年（紀元二四四七年。）。）五月、天明二年壬寅（天明二年（紀元二四四二年。）。）以來ノ凶荒ヲ受ケ、加フルニ六年丙午（天明六年（紀元二四四六年。）。）七月ノ關東大洪水有リ、江戸ノ飢饉其極ニ達シ、窮民蜂起シテ、米商ノ肆店ヲ毀破ス。所謂天明

ノ打毀ナル者是也。廿日壬寅（○天明七年（紀元二四四七年）五月○壬寅、三正綜覽。）ヨリ廿三日乙巳（○天明七年（紀元二四四七年）五月○乙巳、三正綜覽。）ニ至ル三日間、暴動最モ甚シ。市内ノ米商大ナル者大抵破却ノ厄ニ遭ハサル莫ク、其餘ノ富商モ危害ヲ被ル有リ。幕府金穀ヲ出シテ飢民ヲ給恤ス。（○柳營日次記。憲教類典。森山孝盛日記。一話一言。蜘蛛の糸巻。兎園小說。後見草。三王外記。牧氏金鑑。天明七丁未年江戸飢饉騷動之事。舊幕府理財會要。補饑新書。）

天明七年大飢饉　天明七年（○紀元二四四七年。）ノ飢饉ガ、天明二年（○紀元二四四二年。）以來ノ凶荒ヲ承ケタルコトハ、上文記スル所ノ如シ。而シテ之カ直接原因ト爲リタル天明六年（○紀元二四四六年。）ノ不作及物價騰貴狀況ハ、天明七丁未年江戸飢饉騷動之事ニ、

天明五乙巳年（○紀元二四四五年。）ハ、諸色ともに少々直段引下けれ處、天明六丙午年（○紀元二四四六年。）正月元日丙午の日にて、午の刻に九分の日蝕にて、諸人不思議の事に思ひし所、正月廿二日（○天明六年（紀元二四四六年。）。）湯島（○市内。）より出火致し、本郷（○市内。）邊下谷（○市内。）邊、都て外神田（○市内。）邊不殘燒失、殊の外大火故、材木松板之類直段格別高直に相成、右に准し米穀直段も引上候處、此年（○天明六年（紀元二四四六年。）。）七月關東筋大水にて、諸作甚不作にて、近在の困窮によつて、御代官伊奈半左衛門殿（○忠尊。）より

兩國橋廣小路（○市内。）へ施行の御小屋掛り、近在の百姓男女へ御救の施行焚出し下され候。尤日數十四五日之間近在の百姓共老若の人數夥しき事にて有之候、飯をたき候場所は、堺町（○天明六年（紀元二四四六年。）。）の葺屋町（○市内。）の芝居へ被仰付候。公儀役人衆附之居、此所にてたき出し、兩國橋廣小路（○市内。）御小屋にて被下置候。右體之事に候間、此ほし（○天明六年（紀元二四四六年。）。）の暮に御藏米御張紙三斗五升入百俵ニ付金百七十五兩の御張紙、右之通故町方春米玄米ともに直段高直にて一統難儀に及ひ候處、天明七丁未年（○紀元二四四七年。）の春御藏米御張紙三斗五升入百俵に付百八拾兩、夏の御張紙三斗五升入百俵に付百二兩、右の相場に相成候故、町かた一統困難致、其上此年（○天明七年（紀元二四四七年。）。）四月上旬より燈油一向無之、大難儀此上もなきことにて候。此砌町方にて諸色小賣相場の直段荒增書記す。

一、金壹兩に付、上白米壹斗八升、中白米貳斗、下白米貳斗貳升位、小賣百文に付、上白三合、中白三合五夕、下白四合の小賣相場にて候。

一、壹兩に付、錢五貫七百文。

一、百文に付、春麥上五合、中六合。

一、百文に付、大豆上八合、中九合、下壹升。

霸都時代ノ飢饉

一、百文に付引割上六合、中六合五夕、下七合。
一、金壹兩に付、穀麥上五斗、中五斗二升位。
一、同小賣百文に付、上八合五夕、中九合。
一、百文に付饂飩粉上八合、中壹升、下壹升壹合。
一、百文に付、味噌上二百五拾匁、中三百目、下三百五拾目、下ノ下四百目。
一、並の酒壹升に付、五百文。
一、燈油壹合に付、六拾錢位に賣申候故、一統困窮致し、〇下略。
ト云ヒ、三貨圖彙ニハ「當春〇天明六年(紀元二四四六年)ヨリ關東筋、古今未曾有ノ大洪水ニテ〇中略。武總兩用中寒冷行ハレ、至テ不氣候ニテ、地震等屢々多ク、五畿內西國筋九州邊洪水ア
國初メ、都テ八州ノ田畑悉ク水亡シ、農民大ヒニ痛ム。御代官ヨリ御用船ヲ以テ
窮民ヲ救ヒ、米飯ヲ施行セラル。今年〇天明六年(紀元二四四六年)。右ノ通諸國凶作ノ上、〇中略。大
造ノ御用金等ニテ、至テ諸國騷動ス。」天明七丁未年〇紀元二四四七年。正月中旬、肥後米百
十五匁、筑前米百六匁、昨午年〇天明六年(紀元二四四六年)。諸國モ米穀不熟ニテ、舊冬以來、春ニ
至リ、段々高直ニ相ナリ、江戸表ハ至テ米拂底ニ付、於大坂〇攝津國。米一萬石御買上

仰出サル〇中略。當五月〇天明七年(紀元二四四七年)。肥後米代百七十四匁ヨリ六七匁、筑前米代
百六十二匁ヨリ百七十三四匁、同〇天明七年(紀元二四四七年)六月肥後米代百八十一匁ヨリ
六七匁、筑前米代百六十七匁ヨリ百七十三四匁〇中略。右ノ外諸藏米凡百五十目
以上ニテ、米穀數無ク、相庭モ言合セノミナリ。コレニ因テ市中飢民多ク困窮ニ
及ヒ、大坂〇攝津國。表ハ、五月十二日〇天明七年(紀元二四四七年)。ヨリ搗米屋ヘ押附買ノ狼藉者コ
レ有リ、追々相集リ、米屋ハ勿論富家ノ者ノ居宅ヘ押ヨセ、家建家財等迄打壞チ、
其騷動大方ナラズ。江戸表モ米穀拂底ニ付、五月十六日〇天明七年(紀元二四四七年)。大坂〇攝津國。
ニ於テ御買米仰付ラレ、追々運送コレ有ヘキノ處、大坂〇攝津國。五月〇天明七年(紀元二四四七年)。
ノ有米、肥後二百俵筑前二千俵、此外西國米一切コレ無ク、北國米當時賣拂ノ時
節故、是ヲ市中ノ飯糧トスルノミニテ、今年〇天明七年(紀元二四四七年)。ノ取續モ覺束ナシ。コ
レニ因テ據ナク御買米等相止メラレ、江戸表モ大坂〇攝津國。ト同樣ニテ、五月十八
日〇天明七年(紀元二四四七年)五月。ニ至ル迄搗米屋ハ勿論、貧富ヲ論
セズ、家々ヲ壞チ、晝夜ノ騷動前代未聞ノコトモナリ。依テ五月廿三日〇天明七年(紀元二四四七年)。ノ頃、四日市〇市內。ニ於テ、御藏米大豆等ヲ以テ、町々ノ飢民ヲ救ハル。此節ハ
金一兩ニ付米一斗五升ヨリ一斗二升位、大坂〇攝津國。ニテ內證賣ノ米一石ニ付二

百三十目ニテ、暫相退轉ニ及ブ。如何程高直ニ成リテモ米賣ルモノ更ニコレナク、當年（天明七年（紀元二四四七年））。行々飯糧モ覺束ナシ。」ト見ユ。

〔參考〕牧民金鑑ニ、

天明六午年（〇紀元二四四六年）九月

右之者共儀、山藪ニ生草藘之苦味ヲ拔、粉ニ製候方ハ、食物幷糊等致シ、割麥之如ク製候方ハ、米麥等ヲ交、夫食ニ相成、尤毒無ㇾ之品々之旨申立候間、吟味之上、在方助ニも可ㇾ成事ニ付、願通山草藘之儀、外國々へも相對ヲ以出店差出賣弘、右製方習度望候ものハ、最寄之出店へ申聞次第、聊之禮ニ不ㇾ及敎遣候筈ニ候。右製習受、在方にて製いたし、夫食糊等ニ用候ハ勿論之儀ニ候得共、商賣ニ致度存候ものハ、最寄之與市出店へ差出、外賣ハ不ㇾ致候樣可ㇾ致候。

右之趣、御料ハ御代官、奉行支配之處ハ其奉行、私領ハ領主地頭ゟ、寺社領共、城下幷在町共、不ㇾ洩樣可ㇾ被ニ相觸一候もの也。

淺草心月院門前

家主　與市

此ノ飢饉ニ於ケル江戸市中ノ窮狀ヲ擧クレハ、實ニ左ノ如シ。

去る天明三癸卯年（〇紀元二四四三年。）より打續五ヶ年之凶作、江戸町々にてハ、伊奈半左衛門殿（〇忠尊。）より被ㇾ成ニ御渡一候穀麥を水につけ、日本橋大通り（〇市内。）ハ勿論、大傳馬町、本石町（〇市内。）の通り迄も往還に臼を直し、右之穀麥を搗申候。誠に江戸町々在邊の如くにて有ㇾ之候。此とし（〇天明七年（紀元二四四七年）。）の春頃よりして、所々方々にて妻子を置去に致、欠落等致候もの其數いくらと云ふ事をしらず。近在近國奥州邊にては食事に盡て餓死いたせしもの夥しく有ㇾ之、誠にめもあてられぬ次第、あわれと云ふもおろか也。尤此とし（〇天明七年（紀元二四四七年）。）三月十二日町奉行所よりも、江戸中町々端々に至る迄、一統に朝夕とも粥をたへ候やうにとの御觸有ㇾ之、春中より江戸町々場末迄之大根、薩摩いも、割麥、小豆、大角豆等をませ候て、一圓にかてめしあるひハ粥をたへ候。此年とふなすかぼちやをゆで砂糖きなこをつけて賣候、いすこく餅として大きなるいまさかよねまんぢうを拵候て、壹つ八文つゝに賣、殊の外時花（はやり）候ゆへ、町々端々方々にてこしらへ賣申候。此砌ハ肴計至て下直にて、殊に鰹夥しくとれ、かさこ、小鯛抔すさましくとれ下直にて有ㇾ之候。江戸町中殊に江戸橋、日本橋之上抔にてなまりふしに鹽をそへて、壹本四文よりうり申候。前代未聞珍らしき事にて有ㇾ之候。後の世の人にしらしめんがため荒增記置候。

——天明七丁未年江戸飢饉騷動之事

此時分町家よてい、白粥あづきかゆ・麥挽はりを以て最上とし、豆めし・そら豆めし・芋めしを上食とし、ひばめし、きらず飯或ハうどんの粉のつみいれ等をその次となす。甚しきに至りてハ、得しらぬ野菜をおほく鍋に入れ、鹽にて少し味をつけ、其中へひえの粉様の物をふりちらして食とす、又わらをすさの如くに切りて、ほうろくへかけてよきほどにこがし、それを挽舂にてよくひき、だんごとなしてくらへり。

予○宇多が麟齋。あたりの土手原にある、可なりに食となるべき草ハ、みなとりつくせしなり。——消夏自適○兎園小說收。

若夫此ノ飢饉ニ於ケル窮民ノ暴動ハ、左ノ諸書傳フル所ヲ參看シテ、其梗概ヲ推ス可シ。

廿一日○天明七年(紀元二四四七年)五月。夜ゟ米屋騷動

夜に入八時比、元馬場丁殊之外騷敷物音聞へハ間、起出見ハ處、出火ニ而ハ無之物音計ゆへ、人遣し見申ハ處、大勢徒黨致し、米屋を打潰しハ様子之由申聞ハ。翌朝段々承ハ處、赤坂○市内。一郷ニ米屋二十軒悉く打潰しハ由、依之何となく口出見ハ處、赤坂御門○市内。○市迄之間道筋、米屋共散々之體ニ相見へ申ハ。衣類諸道具等泥に踏込、米大豆等者、途中へ打散し、少しも取不申、火之元等念入、隣家なとへハ豫而不申ハ由。畢竟米小屋不□□□ハ故意恨を含ハ事之由。四ツ谷○市内。深川○市内。とても右之通騷動始り、今晩赤坂○市内。を初とす。

同役本目權兵衛玉落之處、少し直段下り、百五十八兩之仕切之由。此節浦賀○相摸國。ゟ品川○武藏國荏原郡。ニ入津之米貳拾萬俵、山之手も二三百駄積出しハ由。厚薄之雜說區々也。

翌廿二日○天明七年(紀元二四四八年)五月。ゟ糀町四ツ谷笄橋本芝二本榎新橋下町本所邊○市内。何所と云嫌なく、白晝ニ米屋を打潰す。其餘りニ紙屋なとも取潰ハも有之、大丸も此時被打潰ハ。其外白銀目黒江戸一面也。町々不殘戸を〆、家財を片付、逃支度致居ハ由。山村信濃守○旺。我不致を幸に、被歸ハ由。米屋ニ不限、諸商人買置なと致し、物品高直ニ欲深く致ハ故、それらハ皆打潰候由。赤坂○市内。ニて酒屋一軒、右人數を見かけ、不取敢酒一樽出し爲呑ハ而無難ニ仕廻ハ由。人數五十人計、爲之者きほひ體ハ無之、奉公人或浪人又者一通り之者計也。淺草○市内。藏宿も多く被打潰ハ由。近邊往來之人無之、諸商人不來、尤形も異形ニ者無之ハ、中ニ十七八之前髮之殊之外

するとく、大力にて能働く由。

五月廿三日（天明七年（紀元二四四四年））。騒動彌不レ靜、町々一丁々虎落を結、木戸を拵、武家共往來無レ之。

護持院ニ主殿頭（田沼意次）。園米三千俵預居く間、打潰可レ申處、漸咤言ニ而引退く由。此節ハ品能町人者、徒黨之者へ食事又者酒なと振廻、菓子屋者くわしをたへさせ、左ハへ者無難ニ罷過く。

於殿中、町奉行御作事奉行御勘定奉行（初者御勝手不レ拘一統ニ四人出ル。）寺社奉行都合十人被レ召出、御老中方御評議有レ之く由。俄ニ御先手見廻り被レ仰付、六組と被レ仰渡く處、加役堀帶刀迚被レ仰付くへハ、今少し大勢之方可レ然旨申上、十組被レ仰付、今日（天明七年（紀元二四四七年）五月廿三日。）ゟ相廻、若手に餘りくハハ、切捨ニ可レ仕旨被レ仰渡、只今迄、南町奉行加役兩人四組くへ共、中〳〵手に合不レ申く由、今日（天明七年（紀元二四四七年）五月廿三日。）御退出八半時ニ及く云々。

近邊之樣子、鐘を扣拍子木を打、太鼓も打候く而防く體也。江戸中右之通、西之久保邊（芝區。）ニ而者怪我も有レ之く由。淺草（市内。）藏宿大方打潰しく得共、米ハ手を不レ附、御藏本へ渡り候米也とて不レ搆。惣而米屋を潰し米を以井戸を埋メく由。紀伊國坂（赤坂區。）下ニ紙屋有レ之、内福ニて金も有レ之、常ニ紙を高直ニ賣、此節も米三十俵計圍置く處、吉川監物屋敷へ賄賂を以運在候處、自身番ニ而押留、此節町中及飢餓く中ニ圍米致しく不屆く由申、屋敷米之由申く得共、譬武家之米ニても通すましとて、自身番ニ積置、町中寄合可レ打潰旨談く處、名主役人達而取扱、右米を町中ゟ救ニ出しく筈ニ相極、漸鎭ル。

四谷（市内。）ゟ筆來く而咄くも、三日之間不レ寢用心致しく由。飯料ニこまりくハと合く也。

此節世上騒動、米穀高直ニ付、二俵退置、近邊飢餓之者へも内々施し可レ申旨、茂右衛門へ申渡、日々二合三合つゝ無心ニ來く者多く雇入く源次ゟも二升出ス。尤表向施米ト申而も沙汰とも成、虚實も難計く付、内々實ニ困窮其上能々存く者ゟ計遣しく樣ニ取計く。右二俵迄ハ不レ入相濟候。（屋敷出入之町人十人、和吉・さし物屋・ぬし屋半兵衛之類。）米屋被レ潰、米賣買滯く上、高直故辻番なと、かけとくりへ黑米を少し入來く而、搗居く体也。急成樣子ニて見附〳〵ニて棒突六人つゝ、小頭差添、夜は高灯燈ニ而致二張番一、世上ニて是式

之儀ニ、天下之御門番高張ニて警固被致ハニは及申間敷旨、雜說有之。

同〇天明七年(紀元二四四七年)五月。廿四日江戸市中ゟ御金二万兩幷御救米被下ハ由、四日市ニて日々計り出しハ旨。

翌廿五日〇天明七年(紀元二四四七年)五月。尾州御屋敷ゟ、兩町奉行被召呼、此度之儀不取計之段御尋有之ハ由。兩町奉行ゟ被免ハ沙汰也。兩三人も突留麻布邊〇市内、ニ而も、竹鑓を拵防ハ由。尤町奉行ゟ被免ハ沙汰也。兩三人も突留ハ由。兼々町中申合、半鐘ニてしらせ合ハニ付、火事と心得間敷旨通達致置ハ由。然共今日〇天明七年(紀元二四四七年)五月廿五日。頃ハ往來少々賑かニ相成、糀町〇市内。天神參詣も餘程有之ハ由。

御救米を町々ニても請取來候樣子也。淺草〇市内。御藏渡り、右之騷ニ付滯居ハ處、昨日〇天明七年(紀元二四四七年)五月廿四日。ゟ始り、百廿五兩之直段也。しかれとも一車々ニ皆當人ゟ宰領を附ハハねハ藏宿ゟ不差越。

同〇天明七年(紀元二四四七年)五月。廿九日町家追而靜穩。

虎落等皆引拂、四五十人も徒黨ハ者共被召捕ハ由、米直段も、此節町相場百七八十兩。

——森山孝盛日記

天明七年五月、米直段張紙百俵に付五十二兩、町相場初は百貳拾兩位、中頃百五十六兩、五月十七八日〇天明七年(紀元二四四七年)。頃百八拾二兩にいたる。小賣百文ニ付四合より三合五勺二合五勺にいたる。所々茶飯菜飯等やすみて商賣せず。

一、廿日〇天明七年(紀元二四四七年)五月。夕、赤坂〇市内。米屋を打破る。

一、廿一日〇天明七年(紀元二四四七年)五月。晝過より所々さわぎたち、いせ町河岸、鎌倉河岸、日本橋白木屋。舟町邊小網町、大傳馬町大丸にて酒二樽ふるまふとい。南傳馬町万屋作兵衛など。鳥越橋より南之分は不殘こはす。同日〇天明七年(紀元二四四七年)五月二十一日。芝口をこはす、同晝過より麴町不殘、四谷より新宿に至り、三手に分れ、夜中より曉に至りて、一手は淀橋迄大和屋など打こはす。一手は追分より新町迄、一手は谷町より板橋迄至るといふ。同夜中牛込御門外、寺町、水道町、御納戸町、愛敬稻荷邊米屋不殘、原町邊迄。

一、廿二日〇天明七年(紀元二四四七年)五月。本所六間堀よりはしめて竪川通不殘、三ッ目に和泉屋といへる木綿屋にては、手ぬぐひふどしを遣しあつかひにて濟、是は夜たかの牛どもなり。

一、同日〇天明七年(紀元二四四七年)五月廿二日。朝より本郷邊筋違外内田屋など、夫より内神田に至るといふ。

津輕屋といへる家にては、津輕の足輕百五十人、久世の足輕百人にて防、其上町與力同心を賴置候故、必死に働候故、百三十人程生捕候、即死二人といふ。

一、同日（天明七年（紀元二四七年）五月廿二日。）前夜より淺草門跡より廣德寺前、晝時下谷、黑門前金澤丹後など打こはす。金澤にて饅頭をなげしといふ。錦袋圓まて。

一、同日（天明七年（紀元二四六年）五月廿二日。）朝より千住、蓑輪、金杉邊不殘打こはす。新吉原大門までいたるなど雜說まち〳〵也。

千住にいせ屋長兵衛といへるものあり、去午年（天明六年（紀元二四四六年）。）大水の節、日本堤の上に米を出し、臼をならべてつかセ、數多の人を救ふ、今年惡黨とも、此家は去年人を多く救ひしものなれば、こぼつ事をやめよとて、こぼたすといふ。

一、同日（天明七年（紀元二四七年）五月廿二日。）深川邊もこぼちしと沙汰あり。是はほとてふりのたぐひなり。

一、同日（天明七年（紀元二四七年）五月廿二日。）夕方本庄中ノ鄕邊大にさわく。是は土地の者なるよし。

一、同日（天明七年（紀元二四七年）五月廿二日。）晝時兩國四方の店ならびに松本といへる大なる藥舖など。

一、すべて此度の惡黨二十四組五千人ほどありといふ。晝來るは前髮のもの多しともいふ。

一、夜は下町邊皆々木戶をうち立番、場末にいたるまで軒下に提灯を出し置べきよし、御觸有之。

一、廿三日（天明七年（紀元二四四七年）五月。）芝三島邊、品川邊といふ。夜中牛込若松町邊米屋三軒打こはす。大久保の方より來るといふ。

一、同日（天明七年（紀元二四七年）五月廿三日。）夕方町々木戶無之分は竹矢來を造る。

一、廿四日、廿五日（天明七年（紀元二四四七年）五月。）頃より所々靜なるやうす也。

一、廿七日（天明七年（紀元二四四七年）五月。）朝きくに、此頃目黑祐天寺を打こはし、盜賊人といふ沙汰なり。

一、此度の災をまぬかれたるは、元飯田町のみなり。是は屋敷中に交り居り候上、屋敷々々の手廻り等此邊にみちみちたり、且金丸何某と云へる柔術指南のもの中坂に住宅す、役人四人つゝ晝夜詰居候間、一軒も打こはさずといふ。

一、廿二日（天明七年（紀元二四四七年）五月。）打こわし候分。

茅町、菱屋政二郎。松坂屋市右衛門。坂倉屋清兵衛。兒玉屋長八。下野屋重右衛門。伊勢

屋善三郎。大口屋長兵衛。瓦町、大口屋八兵衛。いせ屋惣兵衛。井筒屋八郎右衛門。兒玉屋權左衛門。伊勢屋喜兵衛。兒玉屋庄助。天王町、和泉屋才兵衛。大口屋源七。後藤屋七右衛門。森田屋市兵衛。大口屋彌右衛門。和泉屋孫兵衛。大口屋利助。笠倉屋權三郎。代地、坂倉屋勘七。上總屋庄助。坂倉屋萬右衛門。伊勢屋幾次郎。坂倉屋助太郎。坂倉屋七兵衛。伊勢屋喜右衛門。伊勢屋要右衛門。森田町、伊勢屋喜十郎。伊勢屋四郎兵衛。泉屋茂右衛門。福井町、森村屋藤右衛門。堺屋藤藏。坂倉屋與惣兵衛。鳥越町、坂倉屋太兵衛。

——一話一言

一、兩三日已來、町々米屋酒屋菓子屋抔惣而穀物商賣等、其外町屋所々ゟ狼籍者大勢入込、家作等打損さし、米酒穀物等町中ゟ取出し、衣類諸道具等迄打破りゟ由。此節諸色高直、畢竟前代未聞ゟ由。晝夜共鯨波之聲相聞へ、役僧智天を以松平和泉守殿〇乘ゟ完。差出ゟ書付、左之通。

覺

御當山門前幷近邊町々何となく物騷御座ゟ。萬一御山へも立入可申哉難計、安心不仕ゟ。

御靈屋向御要害御場所之儀ニ付、先申上ゟ。以上。

五月廿三日〇天明七年(紀元二四四七年)。

右、堀田千右衛門請取置ゟ事。

増上寺役者

——役所日鑑〇増上寺。

荒凶のうちつゞきて、四五年を歷しことなれば、米價のたかきことわりながら、商賈ゝなほ利を射ん爲に、あちこちの米粟をいちはやく買ひとり藏めて、蠹み朽つるまで出ださず。中買小賣の商人までも、おのも〳〵彼に倣ひて、且利の上に利を見ざれば、あれどもなしとて賣らざりけり。この故に貧士賤民露命を繫ぐに由なくして、ことのよしを奉行所へ訴出でつゝ、あれ米商人等が隱しもてる米を出だして賣らしめ給へと願ひまうせしもありしとぞ。これより先に良賤なべて粥をたうべよと徇させ給へり。このときの町奉行は、曲淵甲州〇景漸。と、山村信州〇良旺。なりしが、信州〇山村良旺。は新役にて、甲州〇曲淵景漸。は故膓なり。この夏〇天明七年(紀元二四四七年)。五月のころにやありけん甲州〇曲淵景漸。件のねがひ人等をよびのぼして、汝等願ひにより、米商人等を穿鑿したれど、彼等に米はなしといへり。げにあき人の事なるに、ある米ならば賣るべきに、賣らぬゝなきがまことなるべし。かう慊らぬ折から、糧を食ふにますことなし、われ一方を誨んか、味噌豆をよく熬て、升の底もて推すときゝ、碎けてふたつにならぬゝなし、扨其豆に麥まれ、稗まれ、野菜まれ、多く加へて炊きてたうべよ、そゝ腹もちのよきものなれば、一食にても足らんずと、ねもごろにいゝ

れしを、誰とて承伏するものなく、稠人の後邊にをりて、遠く隔りたるものゝ、なか〳〵に憚らず、悪口しつるも少からねど、多人數の事なれば、アヒ捕ふるに得およばで、ひとしく追ひ立てられしとなん。これぞこの人氣の寄立はじめなるべし。このあひ春米屋等相謀ひて、春米を買ハんとて、來る人別に、百文或は二百文と定めて、その外を賣り與へず、それすら黎明より巳の時まで、或ハ巳の時より正午までなんど、時刻を定めて賣りしかば、買ひ後れじとて立ちつどふ、老弱男女囂しく、罵るもあり、推さるゝもあり、果ハ突き倒し、摑みあうて、泣き叫ぶも少からず。それも後にハ札を出だして、何處の米屋も賣らずなりぬ。この故に麥を買ハんとほりすれども、麥を得がたく、野菜を求めんとほりすれども、その價廉ならず。こゝをもてせんかたもつき、寒民ハ昆布海帶鹿尾菜などを食として、一兩月を凌ぐもあり。又豪家と唱へらるゝ三井越後の呉服店、糸店、兩替店ともに琉球芋を多く蒸して、半切の桶に入れ、店の四隅便宜の處にすゑ置きて、十五歳以下の小厮の走り廻りをするものに、恣にとり啖せしかば、日毎に穀をはぶきしこと、大かたならずと聞えたり。〇中略。人すらかくのごとくなれば、犬猫ハ痩せ衰へて、骨立して道路に臥したり。五六

月〇天明七年（紀元二四四七年）。のころにやありけん、松島町〇市内。なるむかひの武家の大溷に、痩せたる犬のうちつどひて、草を啖ひねたりしを予〇澤解。はまのあたりに見たることあり。かゝる類多かるべしさる程に、五月晦日〇天明七年（紀元二四四七年）〇諸書或ハ五月十八日トシ、或ハ十九日トシ、二十日トス。のことにやありけん、この夜戌の比及に、俠客どものむら立ち起りて、麹町〇市内。なる米商人の、いちぐらを理不盡に破却せり。これぞ世にうちこわしといふものゝ手はじめとぞ聞えたる。かくてその次の日より、或ハ四五十人、或ハ百數人、一隊となりて、江戸中なる米屋の店を破却すること、日として間斷なかりけり。はじめハ夜中もしくハ早朝のみなりしが、後には白晝にもこの騒劇あり。その破却する物の響、罵り叫ぶ人の聲弗撥暮塵として、十町の外に聞えたり。予〇澤解。は京橋南傳馬町〇市内。なる、米商人萬作が店を、破却せられし迹へゆくりなくとほりかゝりて見てけるに、米穀ハみな俵を斫斷て、その店前に引きちらし、衣類雜具ハ箪笥長櫃をうち破りて、路中へ投げ棄てたれば、ゆくもの道をさりあへず、その米を拾はんとて、貧民の妻婆々小女さへ、乞兒と共にうちまじりて、袂に摑みこみ、嚢にいるゝ有さまハ、耻をしらざるものに似たり。さりとて制するものもなし。このごろ小日向

霸都時代ノ飢饉

水道町○市内。にて、豊島屋といふ米商人の、其店を破却せられし有さまを、予○瀧澤解。がめのをんなゝ見たりしに、そのことの爲體、これかれ同じかりきといへりこの故に米あき人ならざるも、店のさまの相似たるゝ、破却せられしも間々ありけり。これにより、市のかみより寄騎同心を出だされて、制せさせ給ひしかども、勢當るべくもあらず。只今こゝにあるかとすれば、忽焉として隣町にあり。あふれものどものそが中に、年十五六の大わらゝの、いつも衆人に先きたちて、檐に手をかけ、矮樓に飛び入り、奮撃すること大かたならず。これは人間わざならで、必天狗なるべしとて、牛若小僧と唱へつゝ、人みな戰き怕れしが、後にその素生を聞きしに、大工わらゝといふものにて、渠十二三のころよりして、身輕く力あり、つねに好みて梁をわたるものなりとぞ。はじめ兩三日の程、甲州○曲淵景漸。も馬を出して、制せんとせられしかど、彼等いかにか角ひけん、搦み捕れしものありともも聞えず。そのいく隊なる溢れ者を、いづれの町の誰が店子ぞと、定かにしれるもあらず。この故に、うちこわしの奴原あらバ、速に搦み捕るべく、もし手にあまらば撃ち殺し、斫殺すともけしうゝあらずと、いと嚴に町ふれ有りけり。これにより町々なる家主に、おの〳〵竹鎗を用

意して、夜ゝ暮六より路次を閉ぢ、店番といふものを輪番せしめて、店中を巡らする物から、もしその店の米屋が家に、件のものどものむらたち來て、破却することあるときゝ、店番ゝあはてまどひて、拍子木だも鳴らし得ず、家主ゝ竹鎗を引き提げながら、路次の戸内にふるひゐて、阿容たゝしくこゝにさせけり。この事只江戸のみならず、京大坂も亦かくのごとし。凡米屋といふ米屋の、米をもてるも持たざるも、破却にあひしゝ闕遺なしと、六月○天明七年(紀元二四四七年)。のすゑに聞えけり。こは未曾有の奇事といはまし。かくて米屋ニハ、なごりなく破却せられて、そのことはいつとなく、凡一旬あまりにして、かき消すごとく鎮まりぬ。さればとてそのものどもの召捕れしとも聞えず。只湯島○市内。なる米商人津輕屋三右衞門今の掖齋(○狩谷)が父のときなるべし。がいち宇のみ破却を免れて、かへつてその一人を撃殺せしといふ。こゝ津輕侯より足輕許多遣して、護し給ひし故とも聞え、或ゝ鳶の者等に、多く錢を取らして、日夜防禦せし故ともいへり。

翌年天明七丁未の年○紀元二四四七年。五月、玄米兩に貳斗五升、麥ゝ八斗、大豆六斗、同月○天明七年(紀元二四四七年)五月。十日頃白米百文ニ付三合五夕、豆七合、同月○天明七年(紀元二四四七年)

——兎園小說

五月。十八日頃百文ニ三合、御藏米三拾五石ニ金貳百五兩、壹兩に壹斗七升、錢兩ニ五貫貳百、茲にいたりて米穀ハ動かず、米屋共江戸中戸を閉す。同月〇天明七年(紀元二四四七年)五月。廿日の朝、雜人共赤坂御門外〇市内。なる米屋を打毀す〇籠註ニ、「此時數十人打コヘシノ中ニ、美少年一人交リテ、飛鳥ノゴトクトビタリ。入道ハ金剛力士ノ如クニテ目モアヤ也ト見タル人カタリキ。是ハアラビニツレテ暴神ノ顯形シタルナルヘシ。」同日〇天明七年(紀元二四四七年)五月廿日。同刻京橋南傳馬町三丁目〇市内。萬屋作兵衛方作とて聞えたる米問屋を打こわし、破りたる跡を見たるに、米俵ハ家の前に散乱し、米こゝかしこに山をなす、その中にひき破りたる色々の小袖、帳面の類、破りたる金屏風、こわしたる障子、からかみ、大家なりしニ内ハ見えすくやうに殘りなく打毀したる。後に聞ハ始ハ十四五人なりしに、追々加勢して百人計なりしとそ。同夜中〇小網町〇市内〇伊勢町〇市内〇小舟町〇市内〇神田内外〇市内〇藏前〇市内〇淺草邊〇武藏國南足立郡〇市内〇千住〇市谷〇四谷。同夜より翌廿二日〇天明七年(紀元二四四七年)五月。にいたりて曉迄諸方の蜂起、米屋のみにあらすとも、富人ハ手を下せり。然れとも官令寂として聲なし。〇籠註「道路ニチリタル物ヲ取テ逃ル者アレハ、打コワシノ人取返シ、打擲シツヽ取タルモノハ引破リ捨置ク事、町火消ノ掟ニヨク似タリ。」廿二日〇天明七年(紀元二四四七年)五月。町奉行出馬、幷に御先手十人捕へ方の命あり。又竹鎗御免、死骸訴に及ざるの令市中に下りし故、市人勢を得て木戸〳〵〻切、相しる

し相言葉をつくり、互に加勢の約をなし、拍子木をしらせとす。茲にいたり蜂起も又寂として聲なし。江都開發以來未曾有の變事地妖といふへしと諸人いひけり。後に聞けは、大商の閉したるハ大八車四五挺に大勢取付撞き破り打毀したるのち、酒食を貪しか、同類盜を禁したるハ、所謂江戸ッ子なるへし。

——蜘蛛の糸巻

五月十八日〇天明七年(紀元二四四七年)。本所扇橋邊深川六間堀邊〇市内。にて、玄米屋春米屋を夥敷打こわし騒動致候由承候處、同〇天明七年(紀元二四四七年)五月。廿日之夜、いつ方より か參候哉、年の比十七八才に見え候大若衆先に立候て、赤坂邊〇市内。より初て、山の手ハ四ッ谷青山邊〇市内。の玄米屋春米屋のこらず打こわし、同〇天明七年(紀元二四四七年)五月。廿一日晝八ッ時比より、芝金杉邊〇市内。より本芝高繩邊〇市内。の玄米屋春米屋のこらず打こわし、同七つ時比より、新橋邊〇市内。より京橋邊南傳馬町〇市内。より伊勢町本船町邊〇市内。の玄米屋を不殘打こわし、本舟町河岸〇市内。白子屋仁兵衛と申玄米屋抔うち被割候が、跡にて咄しを承候得者、右仁兵衛方家之二階に大八車貳輛御座候と申はなしにて候、同〇天明七年(紀元二四四七年)五月廿一日。夜に

入、小網町・小舟町邊○市内。の玄米屋舂米屋不レ殘討わり、同時に鎌倉河岸通り○市内。より大傳馬町新道通り油町・馬喰町邊○市内。之舂米屋の分不レ殘、新道に住居致候米屋迄打こわし、御藏前通り○市内。藏宿不レ殘打割、殘米屋に至る迄壹軒も不レ殘こわし候て騒動致候。同刻に内外神田明神下通り○市内。より湯島・本郷邊○市内。の舂米屋・玄米屋・乾物屋迄殘無打こわし候。廿二日○天明七年（紀元二四四七年）五月。迄所々米屋打こわされ候と申噂の場所、有增左之通。

日本橋より中橋京橋邊、新橋尾張町・靈岸島・龜島町の邊、本所・深川・本石町通、白銀町・堺町邊、元大坂町・難波町・和泉町・高砂町・乘物町・長谷川町・橋町通り、富澤町・兩國近邊、横山町・小傳馬町・大門通・橋本町邊、柳原近所不レ殘、淺草馬道邊より山の宿・山谷・坂本・淺輪千住の邊、駒込・巢鴨・小石川・牛込・大久保市ヶ谷・麹町邊、麻布・白銀・三田通、芝邊、築地鐵砲洲邊、八丁堀・新川・新堀・茅場町、都て町續之所玄米屋舂米屋の分新道小路に至る迄壹軒ものこらず打こわし申候。

右之通、江戸中同刻に騒動に及し事、前代未聞の珍事にて候。右之若衆至て大力にて、大八車を以戸をつき破り、或は土藏造りの金網を片手にて引破り打割働き候由、所々にて見候由、其砌專ら噂にて候。騒動しつまり候て何處へまいり候哉、何國ノ誰といふものか、決て知る者壹人も無之、誠に不思議の事に御座候。此騒動は誠に江戸町々端々に至る迄不レ殘同日同刻に騒動致候。其內乾物屋などい米屋と間違にてうち被レ割候家何軒といふ限なく、酒屋商賣致候家にては、私方い酒屋商賣仕、米穀商ひ者不レ仕旨詫言を申、身上に應して酒一樽二樽つゝ表へ出し、かゝみを抜て酒を振舞候家も夥しく有之候由、風聞致候。此騒動より日本橋邊○市内。い通壹丁目より本芝田町邊○市内。迄、室町壹丁目○市内。より神田須田町邊○市内。迄、大通りの處晝夜ともに木戸〆切、潜より往來爲レ致、尤も一人毎に送り、拍子木にて晝夜共往來致候。大通り如此嚴しく致候故、横町新道に至る迄往來い勿論嚴敷事是亦未聞之事ともにて有之候。尤京都○山城國。大坂○攝津國。奈良○大和國。堺○和泉國。其外西國筋北國邊より當月一統に騒動致し打こわし候と申噺にて御座候。

——天明七丁未年江戸飢饉騒動之事

天明七未年○紀元二四四七年。四月中旬より、米穀追日高直に罷成い付、町奉行衆にても、米買置圍ひ候者有之哉、御詮義有之といへども、米問やは勿論、中買小賣に至迄甚排底、其上諸國より廻米も一向無之、別て五月○天明七年（紀元二四四七年）。に相成、誠

に取續も難二相成一及二困窮一候ニ付、町々より誰申合すともなく、名主月行事兩町奉行衆へ御慈悲願に罷出る。此節月番北之町奉行曲淵甲斐守殿〇景漸。彼二仰渡一候には、其方共願之趣、公儀にても精々御世話有レ之候へども、上之御威光にても江戸中に米も無レ之、出來秋迄は今少しの内に候間、可レ成丈如何樣にも致し取續可レ致候、併已前の飢饉には猫壹疋三匁宛いたし候、それに引競候へば、未だ夫程之事も無レ之など、笑を被レ含候て被二仰渡一候へば、願出候ものは肝を消し、一統無レ力罷歸候よし。其比世上にて評判いたし候は、猫を食へといはぬ計の被二仰渡一、其上御威光を以ても米なきとあるは、何共安心難成由、とり〴〵米の事のみ噂いたし候。しかる處に同〇天明七年(紀元二四四七年)。五月十九日之夜、赤坂〇市内。中之米屋の分いづくともなく人集り、大勢にて時の聲を上げ寄來、東西には往來之者の燈を爲レ消、内へ入込候者は、火之元念入候樣にと聲を掛、拍木にて掛引いたし、悉く打壞し候。中にも火消屋敷之下に伊勢屋茂兵衛といふ土藏造の米屋あり。彼は米穀を夥敷貯置候故、大勢來り俵を大道へ出し、ことごとく切解き、山の如くに積上げ候由。其朝當番に罷出候ものは、砂場をあるく如く米を踏いて罷出い由。又同所裏傳馬町〇市内赤坂區。に、木綿屋にて米商賣致し候者

有レ之、是も米貯置候故、俵を切解き大道へ蒔散し、木綿を悉く下水へ打込、其夜中夜明迄打壞申候。同〇天明七年(紀元二四四七年)。五月。翌廿日晝七ツ時に、京橋南傳馬町貳丁目〇市内。東側に、土藏作にて萬屋作兵衛と云米中買問屋あり、略て萬作と云、是もいづくともなく人集り、銘々手鳶など所持いたし、時の聲を作て打こわす、かねて萬作方にては用意致候哉、二階へ上りがたき爲に、二階へ米積上候處に、表の屋根へ梯子を掛、窓の筋がねを取放し内へ入込、積置候米は大道へ引出し、俵を切山の如く積あげ、長持等取出し、紗綾縮緬の夜着ふとん、其外衣類等夥敷大道へ引出し、鳶口にてズタ〳〵に破り、其外雛長持ども取出し、所々へ投げ散し、鉦拍木にて相圖を致、中休をいたし打壞申候。表には見物のもの敷百人、町内にては木戸を打、七時より暮六半時迄は三四町之往來之人も相止、其近邊の米やの分は不レ殘打こわし申候へども、萬作程之事にては無レ之候。其夜よりして江戸中端々に至迄、何れといふ限りもなく、殘る所もなく打こわし、中にも廿一日〇天明七年(紀元二四四七年)。五月。より致候ては、晝夜の無二差別一騷動いたし候。其内にも外神田〇市内。に津輕屋三右衛門といふ者あり、彼が方にては手勢多く用意いたし防ぎ候故、怪我人餘程有レ之、又數寄屋橋外〇市内。に堀田相模守

殿春入をいたし候米屋あり、屋敷に用向差支候付、屋敷之足輕看板を着し棒を突、門を數十人にて警固す。これにてはよもやと存候處、時之聲を立來候へば足輕は離散いたし、内に用意も無之に付、ほう〳〵の體にて家内のもの逃候よし。又淺草御藏前〇市内。に兒玉屋といふ藏宿は、隣を打壞に來候と、頓智の者ありて、家内のがらくた道具を取出し、手勢にて打こわし、此内は我等請込打こわす也、先へ罷越可壞と申せし故、兒玉やは無難にて相濟候由。所によりては質屋酒屋などこわし候由。其外沙汰致したる町人、先づ芝三田豐岡町〇市内。にて海保仙波、麻布〇市内。にて堀木、銀座〇市内。にて大坂屋八兵衛と云藥種や、これは右に准じ候身上には無之候得共、米油などの相場商ひいたし候に付利欲に拘り米買置候故也。其外傳馬町〇市内。にて大丸屋、神田〇市内。にて津輕屋、玉河等、何れも米商賣にて無之候へども打壞申い。其外酒食など振舞候て遁れ候者數多有之由。最初は決て米一粒たりとも持來不申候所、追日增長に隨ひ盜人入交、金銀米錢盜取候由。又一説に集り候人數之内、小造成剛童誠に力士の如く相見、諸人に勝れ眞先進で働候と風聞いたし候。此騷動に付ては、町々は戸をさし、諸商賣とも相休、一向安堵の思ひをせず、其上米穀無之、所々へ

緣を求め調へ候ても漸々米貳合か三合の事、如何して飢饉を遁れ、騷動を可遁哉と、晝夜心を痛め、今にも狼藉者來り候て、いかが可致哉と心痛致し候。尤兩町奉行衆にも乘馬にて御廻り有之、組同心中數多相廻り候へ共、中々一兩人被召捕候ぐらひにては鎭り候氣色なく、それ人ごゑいたし候と申候へば、町々木戸を打、早拍子木を打、山之手邊は武家屋敷などへも押寄可申など噂いたし、組やしき抔にては鐵砲へ火繩など付、待構候處も有之候由。分けて廿二日、廿三日〇天明七年(紀元二四四七年)五月。兩日の騷動には、町奉行衆も手に餘り、乃向ひ候樣子にて、所々打壞候へば、一統安堵の思ひを不致、行末いかゝと案事候。

——親子草

一、此時名の忘れたりしが、何がしといへる大名、家中へ渡すべき扶持米とて其本家へ無心して、貳拾俵計車にて、警固も大勢附き添ひ來りしに、鮫ケ橋にて打こはしの一むれ百人計も追取巻きて、車の米申し請けたし、もし異議ある上の、力づくにて請取るべしとて、きそひかゝれる大勢のやうすになすべきやうなくて、宰領の足輕三四人も命からく〳〵逃げ出だし、屋敷へ歸りてしかく〳〵のよし役人中へ申しゝ故に、屋敷よりも侍分の者とりまぜ、追取刀に

て馳せ至りしが、車ともにいづくへ持ち行きしか、其行方しるべきやうなければ、各歯がみをなしつゝ、手をむなしく歸れり。因りておもふに、人心一たびうごきていだすべきやもしれず、されば、前漢の賈誼が言に、安民可ニ與行一義、而危民易ニ與爲一非とあるハ、ならびなき名言なり。

——消夏自適〇兎園小說所收。

五月廿三日〇天明七年(紀元二四四七年)。幕府暴動取締トシテ先手組ニ市中巡邏ヲ命ズ。

一、廿三日〇天明七年(紀元二四四七年)五月。御先手

河野庄左衛門〇通哲。　柴田三右衛門〇勝彭。　安藤又兵衛〇正長。

長谷川平藏〇宣雄。　安部平吉〇信窩。　鈴木彈正少弼〇政賀。

武藤庄兵衛〇安徵。　小野次郎右衛門〇忠吉。　松平庄右衛門〇親遂。

奥村忠太郎〇正明。

町々騒々敷趣相聞候に付、組之者召連、今日より相廻り、暴候者は召捕、町奉行所ニ可ニ引渡一候、尤手に餘り候はゝ、切捨にもいたし候ても不苦候間、其趣可ニ相心得一候。

右御書付牧野越中守殿〇貞長。堀帶刀〇秀隆。へ御渡被ニ成ハ一。

五月廿三日〇天明七年(紀元二四四七年)。

此時町奉行曲淵甲斐守〇景漸。山村信濃守〇良旺。なりしが町家のやうす見廻らんとて大勢にて出でしかど、西河岸邊に三百五百の組を立てたるあふれ者大瓦など積みまうけ、無事なる時ハ奉行を恐るべし、此節に至りてハ、何の憚るべきことあらん、近付けば打殺すべしと、口々にのゝしりし故に、兩奉行もすごゝゝと引きとりきとぞ。

——一話一言〇親子草同。御徒方萬年記略。

日々かくのごとき故に、御先手十組の面々、安部平吉、柴田三右衛門、河野勝左衛門、安藤又兵衛、小野次郎右衛門、松平庄右衛門、長谷川平藏、武藤庄兵衛、鈴木彈正少弼、奥村忠太郎、各與力同心を召し具して、江戸中端々まで廻りしが、何の仕出したる事もなかりき、其頃の取沙汰に、御先手の面々、物馴れたる同心に道をはらハせ、打ちこハしの一むれある所をば通行せずして、脇道をのみ廻りきといへり。

——消夏自適〇兎園小說所收。

〔參考〕柳營日次記ニ、

六月十八日〇天明七年紀元二四四七年)

御先手　長谷川平藏　松平庄右衛門　安部平吉

覇都時代ノ飢饉

河野勝左衛門　安藤又兵衛　柴田三右衛門
小野次郎右衛門　武藤庄兵衛　奥村忠太郎
鈴木彈正少弼

右先達而町方騒々敷ゝ付、組之者召連相廻、あはれ候者召捕候様申渡候處、此節町方靜ニ相成候ニ付、御免之旨、於二桔梗間一越中守（〇松平定信）申二渡之一。太田備後守（〇資愛）侍座。

幕府旗下小祿ノ士ニ米穀ヲ貸ス事柳營日次記ニ見ユ。

六月一日（〇天明七年（紀元二四四七年））。左之書付渡レ之。

米相場高直ニ付、小給之もの及二難儀一ゝ段、達二御聽一、格別之思召を以、高百俵五人扶持以下、并御扶持方計りの分ゝ、壹人扶持五俵之積り、拜借米被二仰付一ゝ間、頭支配裏印手形を以、淺草（〇市内。）於二御藏一、可レ請二取之一、返納之儀者追而可二相達一ゝ。

右之趣、可二相廻一ゝ。　六月（〇天明七年（紀元二四四七年））。

救恤

米高直ニ付、御救米被レ下之事

鳥居丹波守殿（〇忠孝。）御渡

近來凶作打續、米穀高直之上、去秋（〇天明六年（紀元二四四六年））。出水以後、此節ニ至、米直段別而高直ニ相成、町々及二困窮一、下賤之者ニ至ゝ而ゝ、今日をも送兼ゝ程ニ致二難儀一ゝ趣、達二御聞一ゝ。依レ之格別之思召を以、御救之ため御手當として米代金被二下置一ゝ間難レ有奉レ存、此上猶亦致二勘辨一取續ゝ樣可レ仕旨名主共ゝ可二申渡一ゝ。右御手當金之儀ゝ、御勘定奉行ゟ申談請取可レ被二相渡一ゝ、尤被二下方等之儀ゝ致二了簡一、可レ被二取計一ゝ。

五月（〇天明七年（紀元二四四七年））。

天明七未年（〇紀元二四四七年）。五月二十三日

一、米拂底ニ而、町々困窮ニおよひゝ付、此度米穀并雜穀等、去ル辰年（〇天明四年（紀元二四四年））。御買請米之御振合ニ而、明二十四日（〇天明七年（紀元二四四七年））五月。町々へ買請被二仰付一、勿論此節ゝ米拂底ニ付、少々之儀ニゝ得共、引續追々入津米等買請、御割渡被レ遊ゝ段、甲斐守樣（〇曲淵景漸。）於二御番所一被二仰付一ゝ間、先達而之振合之通り、町々ゝも買請米引取方、致二手當一ゝ樣、御支配町々へ可レ被二仰渡一ゝ。

但明廿四日（〇天明七年（紀元二四四七年））五月。明六時ゟ四時迄之内、追々江戸橋（〇市内日本橋區。）藏屋敷ニ而、御渡有レ之ゝ。

一、右買請米　千四百貳拾五石（金壹兩ニ付三斗かへ。）

一、同大豆　　右同斷。金壹兩ニ付、御定直段下直之方。

但買米代金之儀ハ、追々御沙汰可ㇾ有ㇾ之旨、被ニ仰渡一ㇶ。

五月〇天明七年(紀元二四四七年)。

同月〇天明七年(紀元二四四七年)五月。廿日の蜂起々、廿一日廿二日廿三日廿四日〇天明七年(紀元二四四七年)。——憲教類典

五月。迄、江戸中諸商戸をさして業をせす。依ㇾ之米ハ更也、諸人日用の品に困る。廿五日〇天明七年(紀元二四四七年)五月。始て戸をひらく。町奉行に公命有て御救被ㇾ下、曲淵甲斐守殿(〇景漸)牧野大隅守殿(〇成賢)四日市〇市内日本橋區。御小屋掛り、施行場とす。一人に玄米貳合五夕、豆貳合五夕、銀三夕二分ツヽ、小兒七才以上迄被ㇾ下。——蜘蛛の糸巻

既ニシテ幕府關東代官伊奈忠尊〇半左ヲ衛門。擢用シテ、窮民救恤ノ事ニ當ラシム。乃チ左ノ如シ。

六月八日〇天明七年(紀元二四四七年)。

右近來不作打續、世上米穀拂底及ニ難儀一ㇶ、譜代之家來も多、常々諸御用向等も手廣相勤馴ㇶ家筋ニ付、右御救方取計被仰付「依ㇾ之小性組番頭格被ニ仰付一旨、於ニ奥、被ニ仰渡一、其後於ニ御座之間一御目見、上意有ㇾ之。

伊奈半左衛門〇忠尊。

此節米穀拂底ニ而江戸町之者共及ニ飢渇一、難儀之趣ニ付、右御救方取計之儀伊奈半左衛門〇忠尊。ニ被仰付ㇶ。右ニ付、津々浦々ハ勿論、國々ゟ米穀御買上廻方、半左衛門〇伊奈忠尊。家來差出可ニ取計一間、其旨相心得、差支無ㇾ之様御料者御代官、私領ハ領主地頭より、早々可ニ被相觸一ㇶ。——柳營日次記〇本丸廻狀留同。

六月七日〇天明七年(紀元二四四七年)。伊奈半左衛門〇忠尊。被ニ召、御小性組番頭格被ニ仰付一。

右者此間御列座ニ而半左衛門〇忠尊。ハ御談之趣有ㇾ之、先達而大水之節之一件ゟ已來此度騒動之趣、存寄不ㇾ殘被ニ申上一ㇶ由。伊奈半左衛門〇忠尊。一體御勘定吟味役上座ニ而ハ間、御勘定奉行支配ニ而、大水之節も、桑原伊豫守〇成貞。半左衛門〇忠尊。連名之書付上ㇶ處、支配之儀ニハ間、不ㇾ及ニ此儀一とて伊豫守〇桑原成貞。一名ニて被ニ差上一ㇶ故、半左衛門〇伊奈忠尊。ハ預之口と成ㇶ由。御勘定奉行支配ニ而者、甚仕にくき事計有ㇾ之、右様之事共ニて者骨折も見へ不ㇾ申、常々歎息ㇶ由、又先手伊奈備前守〇忠宥。御勘定奉行を被ㇾ勤ハへ共、御取固等之儀ニ付、奉行ニてハ下を吟味いたしハ役目也。郡代ニ而ハ、又百姓共をかこひいハねば成不ㇾ申ハ間、御勘定奉行者難ㇾ勤旨、兼被ニ申上置一ㇶ由、此度過分之格式ニ被ニ仰付一ㇶ口と云々。

石川大隅守屋敷石川島ニ、町人共園米預置ル由。依而差控被仰付ト云々。其外御小人目付町奉行同心等、江戸中吟味ニ相廻ル。後ハ誰共名目無之園米多有之ト云。

六月八日〇天明七年(紀元二四四七年)。ゟ伊奈半左衛門〇忠尊。役所にて米下直ニ賣渡しハ由。

六月十日〇天明七年(紀元二四四七年)。伊奈半左衛門〇忠尊。津々浦々米扱并町之願筋取扱之。

六月十六日〇天明七年(紀元二四四七年)。伊奈半左衛門〇忠尊。世上之沙汰、町人共雌伏致ス

——森山孝盛日記

御徒方萬年記、憲教類典、天明記、蜘蛛の糸巻、聞のまに〳〵、其他略ス。

天明七未年〇紀元二四四七年。六月十五日

一、御救米請取人數書上之義、一人ニ而茂召仕有之分ハ相除キ、召仕無之者共計可書出之取沙汰相聞ハ、召仕有之ハ者ニも、米穀買請差支ハ者可有之事ニ付、名主家主共ニ而相糺、町々家持并身元相應之者相除、召仕有之ハ共、米穀買受方差支ハもの人數可書出ハ事。

右之通相心得、人別取調早々可書出ハ旨、組合町々可申通者也。

六月〇天明七年(紀元二四四七年)。

半左衛門〇伊奈忠尊。役所

一、米麥相場金壹兩ニ付、

米四斗。大豆壹石壹斗。小豆壹石也。

右之通買請被仰付ハ。以上。六月〇天明七年(紀元二四四七年)。

六月二十九日〇天明七年(紀元二四四七年)六月。朝五時、町々月行事一人つゝ、御救米買請切手可相渡間、明朔日〇天明七年(紀元二四四七年)。ゟ廿四日觸略。

一、名主差添罷出ハ樣、組合町々不洩樣可申通者也。

六月廿九日〇天明七年(紀元二四四七年)。

半左〇伊奈忠尊。役所

——憲教類典

六月十八日〇天明七年(紀元二四四七年)。より半左衛門殿〇伊奈忠尊。取計ひとして、町々人別のあらため有之、生れ子ニいたるまて一人前に黒米壹合皮麥五合つゝ、江戸中不殘御救として被相渡、代金當時御取立は無之、近々ニ上納いたすへし、町中借家店賃も當時は差出ハニ不及旨、申渡し有之しと也。

半左衛門殿〇伊奈忠尊。より取計として、公儀金若干萬兩ほと出されハを、近國津々浦々迄家來之者を廻されて、江戸ニ而の高き相場を以て御買上可被成段、所々へ申觸有之、間合ハ者ハ自分の俸米を殘し置、餘米之分は不殘差出しハ

様申觸させんへは、諸民心服して、半左衛門殿〇伊奈忠尊。の下知なれハとて、忽ち諸方より我も〳〵と持出し、不日に江戸中ニ米穀夥しく成りて、六月十四日十五日十六日〇天明七年(紀元二四四七年)。ト都合三度、半左衛門殿〇伊奈忠尊。より御救米出たり。

——天明記

此節奥州筋の咄にハ食物無之候故、わらをいりて臼にて挽き、粉にいたし候て食事に致候所抔も有之候由、尤江戸中にても、豆腐屋のきらずを升にてはかり、壹升四十八文位に賣申候。如此に町中に困窮故、騒動致候に付、五月廿七日〇天明七年(紀元二四四七年)。御救米として大人小兒の差別なく人別帳を以て、壹人に付白米三合二夕に銀三夕二分つゝ被下置ハ。其後御救米として、御代官伊奈半左衛門殿〇忠尊。より人別帳を以、壹人に付白米壹升ッゝ、御渡し、尤代銀壹人分銀九分五厘つゝ上納可仕旨被仰渡同〇天明七年(紀元二四四七年)。六月廿一日御同人〇伊奈忠尊。より人別帳通り壹人五日分の食物の由にて、玄米五合此代六十五文なり。穀麥四升相場之由被仰渡候、此砌錢相場金一兩に付五貫八百文同〇天明七年(紀元二四四七年)。六月廿八日御同人〇伊奈忠尊。より玄米壹升、穀麥二升、小麥五合、右一人分にて日積り五日食物之由被仰渡、此代上納取立にて一人前二百五十八文つゝ御取立同〇天明七年(紀元二四四七年)。七月六日御同人〇伊奈忠尊。より玄米一升、穀麥二升、小麥五合、右一人分にて日積り五日分之由、此代上納御取立一人前三色にて百九十五文つゝ上納被仰付候。夫より諸色少々宛直段引下ヶ候て、町方米小賣相場、錢百文に付上白米六合、中白米六合五勺、下白米七合、是に准じ諸色直段引下げ、騒動之後御藏前御張紙も三斗五升入百俵に付百三十兩と改り申候、此砌町奉行曲淵甲斐守殿〇景漸。山村信濃守殿〇良旺。勤役にて有之候。

——天明七丁未年江戸飢饉騒動之事

御政道の嚴敷によつて、徒黨之者共夥敷被召遣有之者は相除、米大豆共被下置、御救金は壹人に付三夕貳分づゝ被下候。此金凡貳萬兩出候由、其比風聞致し候付、我等〇喜田有順。是を以、人數を考へ候處、三拾七萬五千人と相成申ハ。右御救金と同時に、百俵已下へ百俵に付四俵づゝ御救米被下候。御仁恵に依て忽ち四五日之内平生之通穩に相成、町方にても渡世致し候。乍併米穀見世打壞候付、表は戸を立、或は板圍抔致し商賣相休候。此節賣候品々直段、米百文に付三合、大豆百文に付五合、麥百文に付六合、素

麵百文に付七八把と賣、御藏米相場之儀も一向相場に不ㇾ拘候よし、望手によ
り百俵に付百兩餘いたし候。極下米と申候ても、八十四五兩位致候由なれど
も、一體に無ㇾ之に付、七八町四方を尋、又は緣を求め近在迄調歩行、漸く露命を
つなぎ、町々裏家まで糧を食候哉、もし觸を背き粥など不ㇾ食ものも有ㇾ之哉と、
名主家主裏々相廻り食次を改申候。初之内は嚴敷被ㇾ仰付候ても、骨折業抔致
し候ものは糧も不ㇾ食候が、追日高直にて金銀を何程積といへ共、石瓦の如く
にて一粒の足にも不ㇾ相成、依て家毎に大豆を煎り飯にまぜ、或は赤小豆粥小
麥の粉にてつみ入、又はにふめんなどいたし、茄子は飢饉にまれに安き故こ
れ等を糧に入、誠に米計食候ものは無ㇾ之、田舍へ大根の干葉を調に行候棒手
振有ㇾ之候處、田舍にても糧を食候に付、漸少し計買出し來り、我が近邊へ可ㇾ賣
と存候處に、途中にて買調度申に付、無ㇾ餘儀壹把賣候處、我も〳〵と罷出候て、
奪取候やうに買取申候。其一把の代承り候處、百文づゝにて賣候由。右之錢を
以又々罷越買出し賣候。夫を聞付候哉、田舍より干葉を賣に出申候。扨町中家
持は、其店々へ地主の身上に隨ひ、南鐐壹片に素麵五把、或は豆二升に赤小豆
三升などゝ、其店々に限り候て救ひを引、其外沙汰いたし候身上向之町人は、

一町中へ裏々迄救ひを出し候者其數不ㇾ知、中にも隣町は不ㇾ及申救ひを引候
者は、北新川〇内。市にて鹿島屋清兵衛、彼れは靈岸島十八町〇内。市へ裏々に至迄、
素麵に大豆を引、淺草御藏前〇内。市札差坂倉屋七郎兵衛と申者は、淺草御門之
内竹門田町邊〇内。市迄不ㇾ殘救ひを引、芝飯倉町〇内。市に小川平七といふものは、
隣町は不ㇾ及ㇾ申、田町高輪邊〇内。市迄救を引、其外にも二三町四方へ救を引候者
數多有ㇾ之趣承候へ共、噂のみにて慥成事は見及不ㇾ申候付略ㇾ之。後に救ひを引
候ものは、名前書出候樣被ㇾ仰付、奇特之旨御言之御褒美有ㇾ之候。去るにても米
穀一向に無ㇾ之、一日々々と送り候處、もはや糧に致し候もの食盡し、豆抔煮す
して食し候者は、腹脹り候て悶へ苦み、或は所々に行倒有ㇾ之、今暫も如ㇾ斯有ㇾ之
候ては、必死より外無ㇾ之處、御仁惠を以、天明七未年〇紀元二四四七年。六月八日、御救方
被ㇾ仰付候旨被ㇾ仰渡候付、一統元氣を得候。其書面之寫左に記す。

伊奈半左衛門〇忠尊。

近年不作打續、世上米穀拂底及ㇾ難義ㇾ候、譜代之家來も多、常々諸御用向等も
手廣に相勤馴候家筋に付、右御救方取計被ㇾ仰付候。依ㇾ之御小姓組番頭格被ㇾ
仰付ㇾ候。

右於奥御老中被仰渡相濟、於御座之間御目見、出精可相勤旨、上意有之候。

六月八日（天明七年（紀元二四四七年））。

牧野越中守殿（貞長）。町奉行へ御渡御書付。

覺

此節米穀拂底にて、江戸町々之者及飢渇、難儀之趣き相聞候付、右御救方取計之儀伊奈半左衛門（忠尊）へ被仰付候。右一件に付ては諸事同人差圖を受差支無之樣、町中へ早々可被相觸候。勿論右に付町々之者呼出し、或は吟味筋等、其時々半左衛門（伊奈忠尊）より不及掛合、取計候筈被仰渡候。

但、江戸町々之者共、半左衛門（伊奈忠尊）役所へ出入之義、其時々兩番所へ届に不及候。

右之通被仰渡候付、町方へも早速觸有之候得共、誠に希異之思ひをなし、最早此上は必死之氣遣は無之旨安堵致し候。然處曲淵甲斐守殿（景漸）御轉役、其跡へ石河土佐守殿（政朝）被仰付候。其後同月（天明七年（紀元二四四七年）六月）十二日、伊奈役所へ可罷出呼出し有之候付、町役人共罷出候へば、於白洲半左衛門殿（伊奈忠尊）直に被仰渡候は、近々之内御救被下べし、此方にても所々へ役人差遣し、天下之御

威光を以、津々浦々へ被仰渡候へば、早速廻米有之候間、何も安心いたし、今少之内に候間、如何樣にも取續可申、尤極難澁之者にて取續き難相成候はゝ、町役人共如何樣にも取計取續き可爲致候。不肖之某（伊奈忠尊）斯る台命を蒙り候上は、一命に懸候ても一統之難義を救ひ可遣との被仰渡に候へば、白洲に罷在候町役人共、先達て甲斐守殿（曲淵景漸）被仰渡とは雲泥の違ひ、扨も難有事に不思落涙致候由、其當人之咄に承り候。然る處に米穀拂底とはいへど、御威光を以諸國へ御詮議有之候得ば、忽ち夥敷積出申候。其比之風聞には、半左衛門樣（伊奈忠尊）御救方被仰付候由、御勤之御規模にも御座候間と申、我も〳〵と少しの貯にても差出、御勤之御手際も相見候樣にと、御支配下一同に打はまり候由。近在は不及申、江戸中役人吟味有之、米穀御買上被仰付、一日壹人に付、米五合、から麥四升にて、都合五日分、其後は一日壹人ニ付、米五合、小麥五合、から麥壹升都合五日分宛被下、所々へ上げ場取建、竹矢來等補理、先づ芝邊（市内）は田町に豊田といふ分限之藏屋敷あり、本宅は三田（市内）にて紀州公之出入之町人也。此藏屋敷と數寄屋橋御門外、神田川柳橋深川仙臺堀（市内）其外所々に有之候由なれど、慥に見候所計を記申候。御救米之渡場には、御用伊奈といふ

幟を立、請取に罷越候者は、舟車抔の用意を致し、町役人は人足をつれ罷出る。渡方は役人中兩人にて、腰札を渡し請取場へ罷出る。請取候者は其町の人數を見分けべき爲に、髻へ赤紙又は猫じやらし抔付け、甚混雜致候へ共、手配之能事恐入候と噺申聞候。扨受取來候へば、町内にては會所を立、米麥共に舂上げ候て、賣渡候所も有之、又は被下候儘にて配當致候も有之候。其節から麥舂賃壹石に付壹貫文致し候。舂賃も町入用の内より出候も有之、又は麥の代へ割合候て取立候向も有之由。依て江戸の市中は田舍の如く、日々麥を舂大道へ干、其比は端々に至迄兩側へ莚を敷、麥の干て無之所は一町も無之候。代金之儀は、米壹升に付銀壹匁五分、から麥壹升に付銀五分五厘、小麥壹升に付銀六分之積を以、初度被下候分二度目被下候節上納、又右之内にも上納難成町々は、日延相願候へば御聞濟有之、殘所もなき難有仕合、是偏に御治世之儀。既に天正年中〇紀元二二三三年―二二五一年。には五畿内飢饉致し候儀有之候へ共、其比は治世の事に無之に付、救の沙汰にも不及、依之道路に倒伏餓死致し候者夥敷由、其節秀吉公〇豐臣。には、爲救加茂川・桂川〇山城國。の堤普請被仰付、鳥目抔被下候に付、餓死を遁れ候者有之候由、是等之趣能々可相辨、斯く天下御一統被爲在候へばこそ、諸國へ廻米の御下知も有之候。御一統に無之に於は、漸く加茂川の堤普請位の事にて其沙汰に不及、自と飢餓を難遁に、御治世の難有さには、厚御仁惠を以、僅か三四日之内に、御下知を以米麥夥敷廻米致し、諸人危命を助り候事、莫大之國恩にて難有しといふも愚成事也。

――親子草

〇上略。猶事足らす思召けん、御郡代伊奈半左衛門殿〇忠尊。生年二十四歳なりしを從五位下攝津守に任し、米穀運送の惣司となし給へり。抑此伊奈の御家と申すは、代々關東の御郡代として、其德八州にしき給ひ、ことに今伊奈殿〇忠尊。賢才の聞へましますにより、さはかり拂底せし米穀如何して集め給ひけん、下し給ふる二十萬兩といふ金子を以て、兩に貳斗つゝに商ひし其儘に買求め、一倍賤敷價四斗つゝをもつて窮民に分ち與へらるゝ、その外大豆麥迄皆是に准し、買調へて分かち給へるゆへ、諸人益是を感し、此殿〇伊奈忠尊。を助け參らせんと日々四方の國々より、御府内へ米雜穀を運ひ入たり。依之忽御府内豐饒となる。扨其時の有樣、船の印に伊奈といふ文字を白地に赤く染出し、船毎に押立しゝ秋の紅葉の浮むか如し、誠に海河狹しと見へたり。また穀物わかち與ふる場所、芝糀町深川淺草四ヶ所に定められ、爰に集る窮民ゝ誠に雲

霸都時代ノ飢饉

霞のごとし、何程といふ數しれず、皆大旱に雨を得たりしよりも勇敢、目出度
君の御國恩と歡のいろ巷にみちたり。　——後見草

從二往年米價踊貴一至二今年一（天明七年（紀元二四四七年））。五月、貴極精米每二斗直小板一金。自レ是
無二常價一、或一斗八九升、或一斗五六升直小板一金。而都下無レ見レ米。都人皆糅二豆麥一
而食レ之、吏失二救恤一、都下寇大起、白晝至二穀肆一、毀二戸牖一衝入、蹂躪米穀、及二財用一。南芝里、
（○市内。）北至二淺草里一、（○市内。）無レ所レ不レ至矣。於是、命二吏嚴遂捕賊黨一、而發二倉廩一賑二救窮民一。既
而都下穀肆、皆閉レ戸不レ販、市人之日買レ米甕飧者、無レ由レ得レ食、大窮。六月（○天明七年紀元二四四七年）。命二關東稅使伊奈忠尊（○伊奈。）一救二餓者一。忠尊乃差二吏於諸州一、募二求蓄積一、日詣二都下一、
賈人使レ出二其所一レ秘藏之米一、而悉買レ之、以貸二市人一。市人由レ此得レ不レ餓。
——續三王外記

天明七未年（○紀元二四四七年。）江戸御救金米

一、此度飢饉にて、天明七未（○紀元二四四七年。）五月、江戸中町家御救米並御救金高、
御救金　二萬兩。　御救米　二萬俵。
大豆　二萬俵。
○編年史料所收雜事記ニハ、

此度御救ニ付、町役所御改人江戸町改
一、二千七百七十餘町　但、新地新院とも。
一、家數二十萬八千餘軒　但表間口計。
一、人數百二十八萬五千三百人　内、五十八萬七千八百人男。六十九萬七千五百
人女。
一、三千八百四十四人　座頭。
一、壹萬四千五百餘人　吉原人數。
内、八千二百人男。六千三拾人女。
外、
五萬三千四百三十人　出家。
七千六百三十人　山伏。
三千五百八十餘人　神主。
右之町中ゟ、左之通被レ下。
一、御金　壹萬兩。
一、御金　壹萬兩。
一、御米　六萬俵。
未（○天明七年紀元二四四七年）五月

此ノ戸口中、蜘蛛の糸巻ニハ總人口中男女數ヲ五十萬五千三百人男、六十九萬五百
人女ニ作リ、吉原（○市内）ノ部中、六千三百人女、内二千五百人遊女禿ニ作リ、又出家五
萬二千四百三十人、一向宗之女除レ之、山伏七千二百三十人、妻帶之者除レ之ニ作ル。終ニ
覇都時代ノ飢饉

「右之外御用達町人・能役者・諸家之家來町住居之者除レ之」ト有リ。一話一言ニハ、此時ノ江戸ノ戸口ヲ擧ケテ、町數二千七百七十二町、家主二十萬八千五百餘人、人數百廿八萬五千三百人(内男五十八萬七千七百八十二人、女六十九萬七千五百餘人)、外ニ座頭三千八百四十餘人、出家五萬三千四百三十人、諸神主三千五百八十人、山伏七千二百三十人、新吉原人數一萬四千五百餘人(内男八千二百人、女六千三百人、外ニ遊女かむろ二千五人)ト百三十六萬七千八百四十餘人ト見ユ。

授賞。

東都ゟ未年(元二四四七年紀)。風説到來。

當五月(元二四四七年紀)。以來、町方困窮の所、濟致レ候段、奇特に思召、此段達上聞一レ候。依之越中守殿(松平定信。)御取計ニ而、爲御褒美、五拾兩以下濟レ候者へ百疋つゝ、百兩以下貳百疋つゝ、其上三百疋つゝ被下候。右御褒美人數六千五百人程。

——天明大政錄(編年史料收。)

〔參考〕天明紀聞云フ。

一、天明九年(紀元二四四九年)二月三日、改元寛政。仝(寛政元年紀元二四四九年二月)十一日ヨリ、諸寺諸山ニ於テ、先年飢饉之節、餓死之者、並ニ山燒ニテ死亡之者又ハ洪水之節、溺死之者、此度爲二供養一、一寺へ銀十枚宛被二下置一、供養被二仰付一候。但二夜三日之間ナリ。

補饑新書ニハ左ノ記事有リ。初鹿野信興(河内守。)天明八年(紀元二四四八年。)九月十日江戸町奉行ト爲リ、寛政三年(紀元二四四五一年。)十二月廿日ヲ以テ卒ス。且傳フル所此時ノ事ニ似ズ。或ハ傳聞ニ何等カノ誤有ル歟。

天明凶荒之時、江戸の米商各園米して利を專らとして、人々金銀を儲へし者と雖も容易に米を買ふ事を得す、官よりて嚴敷園米は諸人の難儀に及ふ事なれば禁制あれとも、ひそかくにて、何人園置と云ふ事をしらす。其時初鹿野河内守(信興)と云人町奉行なりしか、淺草藏前にて壹人、靈岸島にて壹人、深川にて壹人、米商の者三人にて合體して糶を閉し事を聽出したり。右の三人之者を呼出しければ、三人之者如何計りの重料に處せられべしと恐怖しけるを、各へ銀子壹枚つゝの褒美を與へ、其方共能くぞ園米を事心得候へば、猶も此上も益々高價に相成候節は、都下の今日暮し致者は餓にも及ふへきに、其時節を見て園置候分下價にして諸人の難澁を救ふへき心得なるへし。誠に氣どくの事なりとて、大に感賞して、猶も右樣の心得あるもののあらば申出へしと申渡しければ、三人の者誠に慚愧して贈を潰し、申合せし園米を出して賣買しければ、引續て園米をせしもの、追々に米を出して賣けるとなり。誠に明吏の處置とも申へし。

〔附記〕白川實記(編年史料所收。)ニ據レハ

一、十二月廿五日(寛政三年(紀元二四五一年)。)昨日(寛政三年(紀元二四五一年)十二月廿四日。)御勘定所へ御呼

出ニ付、今日（〇寛政三年（紀元二四五一年）十二月廿五日。）九ツ時參上ル處、御勘定奉行久世下野守樣（〇廣武。）根岸肥前守樣（〇鎭衛。）御列座ニテ、左之通御演說被成ル。

近來打續、米價高直ニ付、下々及ニ難儀一候。當年（〇寛政三年紀元二四五一年）作方宜候得共、人々凶作手當持圍候氣分ニ相成候ニ付、格別ニ米價引兼樣ニ相聞候。尤凶年手當ハ致ニ内々一義ニ候へとも、人々此節持圍心得にのみ相成候而者、自然与大坂（〇攝津國）廻米拂米無ニ甲斐一、融通不レ宜樣ニも相成候而者、可レ致ニ難儀一、不便ニ被ニ思召一候。右ニ付此節成丈大坂（〇攝津國）者勿論、向寄により、江戸表等ニ廻米致候儀、簡要之事ニ候。右體ニ相成候得ハ、下々之爲ニ相成候而、不便ニ被ニ思召一候處も、おのつから被レ爲レ休候儀ニ候條、被レ懸ニ勘辨一、夫々へ被ニ申付一、領内へも被ニ申付一方可レ有レ之儀ニ候。右之通厚心得可レ被レ申候。

右之通、可ニ相觸一候。　十二月（〇寛政三年紀元二四五一年）

柳營日次記ニハ、是年（〇寛政三年（紀元二四五一年）。）十二月晦日幕府諸國ノ造酒高ヲ減セシメ、浦賀（〇相摸國。）中川（〇武藏國。）兩番所ニ令シテ江戸輸入ノ酒樽ヲ監查セシムルコト見エ、甲子夜話ニハ、同月（〇寛政三年（紀元二四五一年）十二月。）江戸市中ニ金穀增貯法ヲ設ケシムルコト見エ。

三貨圖彙及續日本王代一覽ハ云フ、

今年（〇寛政三年（紀元二四五一年）。）七月迄ハ氣候宜シキ處、八月六日（〇寛政三年（紀元二四五一年）。）關東筋風雨洪水コレアリ、打續キ氣候不順ニテ、五畿内西國邊モ同樣ニ風雨出水等コレアリ、諸稻作不熟ニ付、追々米價高直ニ相ナリ、市民迷惑ニ及ブ。コレニ依テ江戸表ニテモ、市民買シメ等致ス間敷、又粥麥等ヲ食シ、隨分米穀ヲ喰延シ、難澁致サザル樣、一統申合ベシトノ御敎諭コレアリ。大坂（〇攝津國。）モ同樣仰渡サル。有難キコトナリ。然レトモ諸國不熟ニ付、八月末（〇寛政三年（紀元二四五一年）。）ヨリ追々米價高直ニ相ナリ、肥後米七十七八匁ナリ。但シ酒造ノ義ハ、寛政元年（〇紀元二四四九年。）頃ヨリ、諸國豐作ニ付、半造御免コレアル處、當年（〇寛政三年（紀元二四五一年）。）ハ不熟ニ付、先年ノ通リ、三歩一作リノ義猶嚴重ニ仰渡サレ、且昨戌年（〇寛政二年（紀元二四五〇年）。）十月ニ、大坂（〇攝津國。）ニ於テ、市民非常ノ備トシテハ、市中ノ者共、分限相應ニ現米圍ノ義始テ仰渡サル。

——三貨圖彙

關東大風雨洪水、諸國洪水、江戸米價高直ナリ。金一兩ニ米四斗八九升ヲ買フ、町家大ニ困窮ナリ。公儀ヨリ官米ヲ出シ救給フ。御旗本千俵以上ノ勤仕及不勤十俵以上以下ノ輩當冬（〇寛政三年（紀元二四五一年）。）切米渡高ノ内五分一、當時米ニテ賜ル。御

文化五年（〇紀元二四六八年。）亦米價高直也、續日本王代一覽後記ニ、

覇都時代ノ飢饉

——續日本王代一覽

天保四年飢饉
天保四年飢饉事蹟

九月〇文化五年(紀元二四六八年)。ヨリ十月〇文化五年(紀元二四六八年)。ニ至テ、江戸及近國、米穀ノ價甚高シ。金一兩ニ米六斗五六升ヲ買フ。諸人大ニ困窮ス。

仁孝天皇天保四年癸巳〇紀元二四九三年。江戸飢饉ス。幕府命シテ窮民ヲ救恤セシム。〇米價高直。補畿新書。馬琴日記抄。政保間記。天保飢饉奥羽武藏聞書。巷街贅說。

天保四年飢饉　左ノ如シ。

同〇天保四年(紀元二四九三年)。九月十八日肥後守殿〇休忠英。甘一日(〇天保四年紀元二四九三年九月)觸。

先年米直段格別下直ニ候間、相場之障ニも相成候ニ付、追而及沙汰候迄者、都而白米ニ而、江戸表ニ引請候儀、素人者不及申、たとひ問屋共ニ候共、一切引請申間敷旨、文化三寅年〇紀元二四六六年。町觸有之、奥筋并關八州、御料私領寺社領ニも相觸候處、此節江戸表有米拂底ニ而、米價高値ニ付、市中及難儀ニ候間、在方ニ而米所持之ものハ、白米ニ舂立、來午〇天保五年(紀元二四九四年)。ノ三月中を限り、江戸内ニ積送、問屋者勿論、素人迄も勝手次第賣捌可申候。尤同年〇天保五年(紀元二四九四年)。四月ニ至り候ハヽ、是迄之通可相心得候。

右之通、奥州并關八州、御料私領寺社領共、不洩樣可被相觸候。

九月〇天保四年(紀元二四九三年)。

右之通可被相觸候。尤西丸御目付にも可有通達候。

天保四巳年〇紀元二四九三年。十一月十三日肥後守殿〇休忠英。十五日(〇天保四年紀元二四九三年十一月)觸。

此節江戸表有米拂底ニ而、諸人及難儀候ニ付、公儀ニ而も色々御世話も有之候得共、追々米價高直ニ相成候儀、武家方ニ寄、圍米等致候向も有之哉ニ相聞候。武家寺社町方共、一同救合候心得ニ而、其家々之飯米假成ニ間ニ合候はヽ、餘分者勿論、違作無之國柄者、不貯置、早々江戸廻致し、問屋并脇店米屋共ニ賣捌候樣可致候。

右之趣可相改觸候。尤西丸御目付にも、可有通達候。

十一月〇天保四年(紀元二四九三年)。

——政保間記

天保四巳年(〇紀元二四九三年)十一月四日認ル

此節市中其日稼ノ者共ヘ、救米被下候御趣意、裏店表店ノ差別ナク、表店ニテモ、其日ヲ稼キ候者ヘハ被下、裏店ニテモ其日稼ニ無之分ヘハ不被下、妻ニテ、家持并家主ヘモ其日稼ノ分ヘ被下候。且又人數石高總町中ヘ被下候分、荒增左之通り。

覇都時代ノ飢饉

一、三拾壹萬八千九百貳拾八人程。此白米壹萬千九百二十七石程。御救被下ゐ方は三歳迄之小兒相除キ、四歳ヨリ十四歳マテ、六十歳以上ノ者、幷ニ女ヘハ三升ツヽ、十五歳ヨリ六十歳マテノ男ヘハ五升ツヽ、被下ゐ由。右ハ全ク荒増凡ノ高ニ御座ゐ由。

——天保飢饉奥羽武藏聞書

○天保四年(○紀元二四九三年)九月十九日ノ條

一、此節米高直に付、貧窮の妻子置去多し。本所○市内。のみにて貳百貳十二人有之、右町奉行所へ訴出ゐよし也。白米百文に六合、或は五合五勺にうりゐ所もよし也。

——馬琴日記抄

○上文風雨記事略。是によりて、諸國稻作は勿論、諸作物甚風損違作、わきて東北へよりたる國々は猶更なり。上總下總、安房など、津浪あり。船橋○下總國。なる獵師町も津浪のために百軒餘りの人家、皆悉く打こぼちて跡なく沙濱となりぬと、こは翁○塵哉翁。が家に五とせ召使へるしもと呼る女の在所にして、彼が兄も漁師にて庄五郎と呼者なりしが、後女が母參りて、委しく荒れの咄しも聞けり。されど怪我は多くもあらぬよしなりき。奥羽は殊に稀なる荒にて、更に作物なく飢渴甚敷よし。出羽の庄内は別而餓死する者多く、山野の草木も

糧に盡て、ほとんど難儀と聞及べり。同役貝塚某は已前出羽に住ぬる縁により、彼方より時々の便宜ある人なり。十月○天保四年(紀元二四九三年)。頃の咄しに、彼方にて唐茄子一つ二百五十文、糧にいたす牛房の葉一貫日二百六七十文位のよし。霜月○天保四年(紀元二四九三年)。末より近在諸所の干葉切干大根を、佐竹家へ買上るよし。一度の便り馬附十三駄にて領所出羽庄内へ送らるゝこと六七度と、極月○天保四年(紀元二四九三年)。半頃風説せり。御府内も米穀諸色追高直にて、十月霜月○天保四年(紀元二四九三年)。頃御藏前相場も、百俵にて九十四五兩位迄引上たれば、町賣も百文にて五合五勺までになりぬ。されば末々困窮御救として、兩度まで籾藏に於いて御救米被下置ぬ。又有德の者は、我も〳〵と其程々に、施行米錢を出して、難澁を助ぬる故哉、思ふにたがひて此冬○天保四年(紀元二四九三年)。火事少く、世上も穩なるは制禁の怠らざるなるべし。過ぬる天明六年○紀元二四四六年。末とかや、飢饉にて、町賣百文に三合五勺となりぬれば、御府内町々米屋々々を打こわし、大きに騷動せしとかや。これ三日程の間にて直に五合に成しと。此節は御藏前相場百俵百七十兩位もせし由、老人の話しに聞ぬ。こは翁○塵哉翁。が六歳の頃にして、豆入たる粥たふべたる事のみは幽に覺え、其外は覺え侍らず。天明○紀元二四四一年|二。

四四八年。の後はかゝることもなかりしが、思はずも今年（天保四年（紀元二四九三年））。飢饉といふなるゝされど諸國の皆違作といふにはあらず、美濃・尾張・紀伊國抔は出來方よろしく、能登はわきて三四十年來の豐年にて、豐年祭もせしとかや、外にも猶あるべきか。しかし翁（塵翁。）も初めてのことなりせば、家内に諭して、麥を焚、粥を煮、且小米を交へていさゝか冥利を思ふのみ。——巷街贅說

今玆癸巳（天保四年（紀元二四九三年））。關以東の諸州年穀登らずして米價騰貴して、諸色も高直なり。天明よりして五十三年なるに、この凶荒の事ありて、諸民安堵せず、四隣に事多し。——補儀新書

舊幕府引繼書類米價高直ト題スル簿冊中載スル所、天保七年（紀元二四九六年。）十月町奉行與力原善左衛門仁杉五郎左衛門ノ救恤申立ニ「天明四辰年（紀元二四四四年。）幷去ル巳年（天保四年（紀元二四九三年））。翌午年（天保五年（紀元二四九四年））。ニ至違作之國柄共、土地ニ住居難相成、可便方無之、無宿ニ相成、御當地（江戸。）ニ出、物貰ひ致し歩行い得共、給續兼、終ニ行倒、相煩罷在いもの有之いニ付、介抱小屋補理、十ヶ月程之間右躰之病人見當次第引連參、小屋ニ入置、病氣全快之上、身分片付相願いもの者、元領主地頭ニ御引渡可相成、積、被仰付、扶持米藥代雜用錢小屋場入用等、御金藏ゟ請取、彈左衛門ニ相渡いゝ儀ニ御座いゝ處、右病人共全快之節、身分片付方之儀、天明（紀元二四四一年―二四四八年。）之度者人數七百廿貳之由、片付方書留無之難相分。去々午年（天保五年（紀元二四九四年））。者人數貳百九拾人之内、貳人者幼年ものニ而、母一同右小屋ニ入罷在いゝ内、母者病死致しいゝニ付、幼少もの貳人、元領主ニ御引渡ニ相成、其餘者、銘々可立返旨申之いゝニ付、上方ものゝ分者品川宿（武藏國荏原郡。）奥州筋之もの者千住宿（武藏國南足立郡。）其外御内町外迄引連、見送遣いゝ儀ニ有之いゝ」下見エ。亦以テ此時ノ飢饉狀態ヲ推スルニ足ル可シ。

〔參考〕天保飢饉奥羽武藏聞書ニ、

天保四年（紀元二四九三年）九月、大坂町奉行所ヘ、當年（天保四年紀元二四九三年）ノ作割平均ノ由。

一、東山道〆五分八厘七毛。
一、東海道六分七厘。
一、北陸道四分八厘貳毛。
一、南海道山陽山陰道六分五厘。
一、西海道六分五厘。
一、關八州五分壹厘七毛。
一、奥州三分五厘貳毛、（内、五厘喰込引、〆八厘六毛、十（ママ）、三六斗五升程。

天保五年飢饉

五年甲午〇天保〇紀元二四九四年。前年〇天保四年(紀元二四九三年)。ニ引續キテ江戸飢饉ス。〇米價高直。政保間記。天保飢饉奥羽武藏聞書。

天保五年飢饉事蹟

天保五年飢饉　天保五年〇紀元二四九四年。亦前年〇天保四年(紀元二四九三年)。ニ引續キテ江戸市中飢饉シタル事ハ、上記米價高直言フ所ノ如シ。其外政保間記・天保飢饉奥羽武藏聞書等ニモ、之ヲ證ス可キ文書有リ。

天保五午年〇紀元二四九四年。正月廿七日肥後守殿〇林忠英。來月(〇天保五年紀元二四九四年二月)七日觸。

去ル巳年〇天保四年(紀元二四九三年)。陸奥出羽稀之違作ニ而、江戸廻米無之、右兩國も、場所ニ寄飢渇之者も有之趣、風聞世上に相響、米穀圍持ハ人氣押移、利潤之ためニ不埒之賣買をも致しハ哉ニ而、江戸表は勿論、在々迄も米價高直ニ成、末々之者共可及難儀ハニ付、關東筋國々之儀、米麥雜穀共、其村町限り役人共ゟ相改、小前所持之分、夫々家内人別に引合、當年〇天保五年(紀元二四九四年)。新穀出來迄之手當を殘し置、其餘分者、持主限最寄市場町へ賣捌、又は江戸廻致し、地廻米問屋幷脇店米屋共に賣捌、在々穀類商賣之ものたり共、不相當之石數、其餘は米穀早々江戸廻之上、前書之通賣捌方可致候。右ニ付賣買幷津出し廻船等、相互ニ正路ニ可致者勿論ニハ得共、別而無差支樣、速ニ可被取計ハ。

若妨ハ類之者有之ハハヽ、早々可訴出ハ。

一、身元相應之者共、銘々心得を以、窮民を救ハため、米麥雜穀圍置ハもの有之ハハヽ、右者別段之儀ニ付、名前石數等、御料者御代官、私領者領主地頭に、早々申立置候樣可致ハ。

一、右ニ付而者追而改之者差遣ハ儀も有之ハ。併前書之次第者差懸りハ儀ニ付、心得違之者無之樣、爲教諭、兼而關東在々廻村致ハ御代官手附手代等、此節ゟ相廻ハ筈ニハ。

右之趣、關東筋國々、御料者御代官、御領所私領者領主地頭ゟ、寺社領共、町々在々浦々迄も、不殘樣可被申渡ハ。且又本文窮身救之ため、米麥雜穀圍置ハ者有之、其段申立ハハヽ、名前石數、早々御勘定所に可被相屆ハ。

右之通關東筋國々領分知行有之面々に、可被相觸ハ。尤西丸御目付にも可有通達ハ。　正月〇天保五年紀元二四九四年)。

同年〇天保五年(紀元二四九四年)。三月廿一日肥後守殿〇林忠英。廿五日(〇天保五年紀元二四九四年三月)觸。

江戸表米價高直ニ而、市中及難儀ハ間、在方ニ而春立ハ白米、當三月〇天保五年(紀元二四九四年)。中を限り、江戸内へ積送り、素人迄も勝手次第賣捌可申ハ。尤四月

ニ至りいたゝ、是迄之通可相心得旨、先達相觸ゐ處、當二月〇天保五年(紀元二四九四年)。中度々之大火ニ而、市中舂米屋共も多く類燒いたし、町々未普請等不行屆、舂立手廻り兼、其上玄米相場も高直ニ付、猶又當十月〇天保五年(紀元二四九四年)。迄、白米江戸廻し差免ゐ間、素人迄も勝手次第賣捌可申ゐ。尤十一月〇天保五年(紀元二四九四年)。ニ至りいたゝ、前々之通り可相心得ゐ。

右之通、奥筋幷關八州、御領私領寺社領共、不洩樣可被相觸ゐ。

三月〇天保五年(紀元二四九四年)。

右之通、可被相觸ゐ。尤西丸御目付にも、可有通達ゐ。

同年〇天保五年(紀元二四九四年)。六月七日肥後守殿〇林來十日(〇天保五年紀忠英。元二四九四年六月)觸。

去ル巳年〇天保四年(紀元二四九三年)。陸奥出羽國其外違作之國柄等有之、江戸表者勿論、諸國在々迄も、米價高直ニ相成、末々之者共及難儀ゐ趣相聞ゐ處、銘々領分知行限り、他國之賣買差留ゐ向も有之、身元相應之者米穀有之ゐ而も、賣捌方相成兼、おのつから融通不宜ゐ間、御料私領之無差別米穀融通無差支樣、急度相心得、米賣買可致ゐ。

右之趣、御料者御代官、私領者領主地頭ゟ、早々可被相觸ゐ。

六月〇天保五年(紀元二四九四年)。

右之通、可被相觸ゐ。尤西丸御目付にも、可有通達ゐ。

天保五午〇紀元二四九四年。五月九日松平陸奥守樣御家來、下御勘定所へ御呼出、御達シ之趣、

國元當年〇天保五年(紀元二四九四年)。麥作宜敷相聞候處、右樣ノ事ニ候ハヽ、猶豫有之丈、御當地へ被相廻候樣、尤モ何程相廻不苦候哉、可成丈早々取調、御屆可被成候由、土方出雲守殿〇勝政。御達之趣、御勘定組合石井源右衛門殿被仰聞候事。

天保五午年〇紀元二四九四年。五月

覺

一、南部信濃守樣　米貳千俵。

一、上杉彈正大弼樣　同千俵。

一、津輕越中守樣　同千俵。

一、松平山城守樣　同五百俵。

但、山城守樣へハ、外大豆何俵ニテモ、被仰付次第、可被進候事之由。

一、戸澤大和守樣　米五百俵。

一、秋元但馬守樣　同三百俵。

一、織田若狹守樣　同三百俵。

右之通被レ進レ之。尤モ兼々御拂米被二仰込置一候得共、右之儀御斷、聊御挨拶トシテ

陸奥守殿使者　村上恒之丞

被二贈進一候由。

五月十八日〇天保五年(紀元二四九四年)。

——天保飢饉奥羽武藏聞書

天保七八年大飢饉

天保七八年大飢饉事蹟

七年丙申〇天保〇紀元二四九六年。江戸大ニ飢饉ス。四年癸巳〇天保〇紀元二四九三年。ヨリ五年甲午〇天保〇紀元二四九四年。ニ亘レル不作ノ後ヲ承ケ、荒凶殊ニ甚シク、物價昂騰シ、市民ノ窮飢スル者極メテ多ク、延テ八年丁酉〇天保〇紀元二四九七年。冬ニ及ブ。幕府救小屋ヲ設ケテ飢者ヲ收容シ、及濱殿ノ溝渠ヲ浚渫シテ其急ヲ救フ。〇柳營日次記。天保撰要類集。天保七申年七月臨時御救一件。天保七申年十一月再度御救一件。米價高直。聞のまに〳〵。曲亭雜記。五月雨草紙。救荒二物考序。改保間記。牧民金鑑。續日本王代一覽後記。天保飢饉奥羽武藏聞書。

天保七八年大飢饉　天明二〇七年(紀元二四四七年)。ニ於テハ、彼ノ打毀ノ如キ暴動無カリシト雖、其慘狀殆ド天明度〇七年(紀元二四四七年)。ニ讓ラズ。左ニ兩三書ヲ抄シテ其狀況ヲ參看互視スルニ便スト云フ。

町方飢渴之もの御救之儀ニ付申上ル書付

原善左衛門

仁杉五郎左衛門

近年引續米價高直ニ而、其日稼之もの共、一統及二困窮一ル處、當夏〇天保七年(紀元二四九六年)。ゟ追々米直段格別引上ケ、此節者必至与及二難儀一ル趣ニ而、店賃相滯ル儀者勿論、家財衣類等迄賣拂、猶夫ニ而も續兼、住所ニ相離レ、類之もの有レ之、物貰致し歩行ル而も、此節柄之儀、食物施しルものハ少く、往還ニ行倒、病死又者相煩罷在ル者も多く、且平年は捨子一ケ月ニ四五人位之儀ニ而、拾人も有レ之者稀成儀ニ御座ル處、當七月〇天保七年(紀元二四九六年)。ゟ先月〇天保七年(紀元二四九六年)九月。迄三ケ月之間ニ、七十六人ニ而、此節者更相增、當月〇天保七年(紀元二四九六年)十月。ゟ十日迄ニ十七人有レ之、既ニ去七日〇天保七年(紀元二四九六年)十月。夜南傳馬町壹町目往還〇市内。ニ捨子ゟ添ル書付有レ之ル儀者、全米價高直故、右類之儀与相聞、且又住所ニも離れ、御救相願ル段

申立、御番所ゟ欠込願出ゟものも追々有之、當時錢百文ニ付白米四合賣ニ而、暫引續居ゟニ付、老人子共厄介多有之ものハ、別而給續兼、無致方無宿ニ相成、及飢餲ゟ間、差當右躰之もの御救被成ゟ方ニも可有御座ゟ哉。然ル處天明四辰年〇紀元二四四四年。幷去ル巳年〇天保四年(紀元二四九三年)。ゟ翌午年〇天保五年(紀元二四九四年)。ニ至、違作之國柄共、土地ニ住居難相成、可便方無之、無宿ニ相成、御當地〇江戸。ゟ出、物貰ひ致し歩行ゟ得共、給續兼、終ニ行倒、相煩罷在ゟもの有之ゟニ付、穢多頭彈左衛門圍内ゟ、介抱小屋補理、十ヶ月程之間、右躰之病人見當次第引連參、小屋ゟ入置、病氣全快之上、身分片付相願ゟものは、元領主地頭ゟ御引渡可相成積被仰付、扶持米藥代雜用錢小屋場入用等、御金藏ゟ請取、彈左衛門ゟ相渡ゟ儀ニ御座ゟ處、右病人共全快之節、身分片付方之儀、天明〇紀元二四四一年―二四四八年。之度は人數七百廿貳之由、片付方書留無之難相分。去々午年〇天保五年(紀元二四九四年)。は人數貳百九拾人之内、貳人は幼年ものニ而、母一同右小屋ゟ入罷在ゟ内、母は病死致しゟニ付、幼少もの貳人、元領主ゟ御引渡ニ相成、其餘も銘々可立返旨申之ゟニ付、上方ものの之分者品川宿〇式藏國荏原郡。奥州筋之ものも千住宿〇武藏國南足立郡。其外御内町外迄引連、見送遣ゟ儀に有之ゟ處、今般之儀者、在方もの之儀ニも無之、元町方人別之

ものニ而、俄ニ住所ニ離レゟもの共ニ付、前書之振合を以、穢多町之内ゟ被差置、當座之御救被成下ゟ共、跡々可取續手段無之、其上穢多共之手ニ懸り養育受ゟ而ハ、後日身分立戻方之運ひも自然不宜、旁無宿非人ニ相成ゟもの多く可有之哉。左ゟ得者一旦之御憐愍ニ者可相成ゟ得共、小屋引拂ゟ節、矢張立行難相成儀ニ付、勘辨仕ゟ處、場所を見立、三間ニ貳拾間程之小屋を貳ヶ所も相建、町會所ゟ朝夕之賄御救被下、晝之内は銘々商ひ等ニも罷出ゟ樣相成ゟハヽ、元手錢ニも有附、小屋引拂ゟ節、店持ゟ儀も出來可申哉。尤猥ニ小屋入等申付ゟ而者、左迄ニ無之ものも這入ゟ樣相成、際限も有之間敷ゟ間、前書之通、兩御番所ゟ欠込、御救相願ゟものは、元町町役人呼出し、一ト通相糺、實々極貧ニ而、住所ニも相離レゟ程之もの相違無之ゟハヽ、小屋入申付、且行倒ものも元ゟ、無宿非人之分者、是迄之通溜預申付、其外及飢餲行倒ゟニ相違無之ものも、糺之上小屋入申付ゟハヽ、御仁惠之程行屆可申哉。勿論月限之儀者、凡三ヶ月も小屋入申付、其内出稼等爲致、元手ニも有付ゟ樣、精々怠り無之樣見廻り之役人教諭致しゟハヽ、一命之境、實意ニ承伏行屆、重々厚キ御仁惠相辨候ハヽ、銘々身分之立行方も自然与仕學可仕哉奉存ゟ間、右之趣ニも被仰付ゟ而者、如何

可レ有二御座一ハ哉、此段申上ハ。以上。

申〇天保七年(紀元二四九六年)。十月

原善左衛門
仁杉五郎左衛門

申(〇天保七年紀元二四九六年)十月廿一日迴シ濟。申(〇天保七年紀元二四九六年)十月廿二日加賀守殿(〇大久保忠眞)ヘ林阿彌ヲ以伊賀守(〇筒井政憲)上ル。

印、渡邊三郎助　佐藤清太郎印　正田榮次郎印
佐藤十兵衛印　田中新五兵衛印　本多彌太夫印
村井專右衛門印　加藤又左衛門印

加賀守殿(〇大久保忠眞)

市中其日稼之者之内、飢ニも可レ及程之もの御救小屋取建ハ儀ニ付、申上ハ書付

印筒井伊賀守〇政憲。　印大草能登守〇高好。
印明樂飛驒守〇莚村。　印田口五郎左衛門〇喜行。

米價之儀引續高直ニ付、其日稼之もの之内、極貧ニ而實ニ難立行、飢ニも可レ及程之者、何とか御救筋有レ之ハ方与奉レ存ハ間、去ル午年〇天保五年(紀元二四九四年)。大火之節之振合を以、神田佐久間町壹町目地先〇内。市ヘ御救小屋取建、右之者入置、朝夕賄之儀者、男女并三歳以上ハ一日壹人米三合宛之積、町會所ニおゐて焚出差遣ハ積、可レ取二斗旨、右懸り支配向之者ヘ申渡ハ。依レ之申上置ハ。以上。

申〇天保七年(紀元二四九六年)。十月

〇朱書天保七申年(〇紀元二四九六年)。

加賀殿〇朱書〇大久保忠眞。ヘ主計頭〇榊原忠之。伊賀守〇筒井政憲。出雲守〇土方勝政。五郎左衛門〇田口喜行。立會、米價追々高直ニ相成ハニ付、市中ヘ御救可レ被レ下哉之段、口上を以御内慮相伺ハ處伺之通御救差出ハ樣、即刻御下知有レ之ハニ付、主計頭〇榊原忠之。ゟ一躰圍穀も手薄ニ付、此度者米錢半々之積を以相渡ハ樣可レ仕旨申上、是又御聞置ニ相成ハ由、同日〇天保七年(紀元二五九六年)七月十二日。御勘定所詰合岩淺三五太夫被レ仰渡ハ。右ニ付伺書等不レ差上、左之通申上置之書面取調差上ハ事。

天保七年(〇紀元二四九六年)七月十二日

筒井政憲)上レ之。

印、渡邊三郎助　正田榮次郎　岩淺三五太夫印
佐藤十兵衛印　佐藤清五郎印　加藤又左衛門
松浦彌右衛門同　本多彌太夫　村井專右衛門同

米價高直ニ付其日稼之者共ヘ御救米錢被レ下ハ儀申上ハ書付

印榊原主計頭〇忠之。　同筒井伊賀守〇政憲。

同　土方出雲守○勝政。　同　田口五郎左衛門○喜行。

此節追々米價高直ニ而、市中之者共及ニ難儀一ニ付、右之者共ニ御救相渡ル方ニ可レ有ニ御座一ル旨、御内慮相伺ル處、伺之通被仰渡一ル間、人別取調、渡方取調ル樣、支配向組之者ニ申渡ル。尤先例米價高直之節者、男壹人ニ一日米五合つゝ、六十歳以上拾五歳以下之分幷女壹人ニ同三合ツゝ之割合を以、相渡ル得共、此度之儀者、米錢半々之積ニ而、男壹人ニ米貳合五夕、當時市中下白米相場錢百文ニ付六合之割を以錢四拾文、六十歳以上十五歳以下之者幷女壹人ニ米壹合五夕錢貳十四文ツゝ、日數十日分差遣ル樣可レ仕奉レ存ル。依之此段申上置ル。以上。　申○天保七年(紀元二四九六年)。七月

申○天保七年紀元二四九六年)七月十九日廻ル濟。

印主計頭○榊原忠之。　印渡邊三郎助正田榮次郎

印伊賀守○筒井政憲。　印岩淺三五太夫佐藤十兵衛同

印出雲守○土方勝政。　印佐藤清五郎同加藤又左衛門同

印五郎左衛門○田口喜行。　印松浦彌左衛門同本多彌太夫同　村井專右衛門同

此節米價高直ニ付、向柳原○市内。町會所幷筋違橋御門内建添地○市内。ニ而米錢被レ下ル間、右圍内ニ籾摺立白米春立場之儀、町會所内ニ取建有レ之ル籾摺立場者取繕、其外者新規取建ル積、前々臨時御救之振合ニ不レ差騎ニ諸色省略仕、入札申付、開札仕ル處、惣建坪四百七拾六坪餘幷町會所内摺立場取繕共一式、

落札　金貳百八拾壹兩銀九分七厘　伊勢屋惣七

金貳百八拾七兩壹分銀貳匁五厘　明石屋市郎兵衛

金三百八兩壹分銀貳匁五分　河内屋半平

右之通ニ有レ之、不相當之儀無レ之ル間、落札直段を以爲ニ取懸一申ル。尤掛役人時々見廻、座人手代等附切、可レ成手廻仕、今日○天保七年(紀元二四九六年)七月十九日。中皆出來之積御座ル。此段申上置ル。　申○天保七年(紀元二四九六年)。七月

申○天保七年紀元二四九六年)八月廿四日加賀守殿○大久保忠眞)ヘ啓阿彌を以上ル。

印渡邊三郎助　正田榮次郎印　岩淺三五太夫印
佐藤十兵衛印　佐藤清五郎同　加藤又左衛門同
松浦彌左衛門同　本多彌太夫同　村井專右衛門同

町會所御救相渡ハヶ所并人數相增ハ儀ニ付申上ハ書付

印榊原主計頭〇忠之。　印筒井伊賀守〇政憲。

印田口五郎左衛門〇喜行。

米價高直ニ付、市中其日稼之ものハ、御救米錢、向柳原〇市内。町會所圍内ニ而貳ヶ所、筋違橋御内建添地〇市内。圍内ニ而二ヶ所、都合四ヶ所ニ而、一日凡五千人餘宛、先月〇天保七年(紀元二四九六年)七月。廿五日ゟ追々渡方爲取計罷在ハ處、惣人ニ而者凡三拾四萬人餘之渡方ニ付、日數も相掛りハ儀之處、次第米價高直ニ罷成、自然被下方後レハもの共者、殊更可及難儀間、向柳原〇市内。町會所内ハ渡場壹ヶ所相增、都合五ヶ所ニ仕、一日凡壹萬人程ツヽ渡方可取計旨、支配向組之ものハ申渡ハ。依之申上置ハ。以上。　申〇天保七年(紀元二四九六年)。七月

——天保七申年七月臨時御救一件

天保七申年(〇紀元二四九六年)十一月四日加賀守殿(大久保忠眞)ハ大澤彌三郎を以伊賀守(〇筒井政憲)ゟ進達致し候處、御同人御一覽之上、市中之氣請如何可有之哉、先此度ハ皆米に而相渡候樣いたし候方にも可有之哉と、大澤彌三郎を以飛驒守(〇明樂茂村)ハ被仰付候に付、掛帋之通文段相直し、翌五日〇(天保七年紀元二四九六年十一月)同人を以伊賀守(〇筒井政憲)上候處、書面之趣被御聞置候間、渡方可取斗旨、彌三郎申聞候事。

印都筑金三郎　正田榮次郎印　佐藤十兵衛同

福田所左衛門同　田中新五兵衛同　本多彌太夫同

村井專右衛門同　加藤又左衛門同　松浦彌左衛門同

米價高直ニ付其日稼之もの共ハ再度御救米錢被下ハ儀申上ハ書付

印筒井伊賀守〇政憲。　同大草能登守〇高好。

同明樂飛驒守〇茂村。　同田口五郎左衛門〇喜行。

米價高直ニ付、市中其日稼之もの及難儀ハニ付、當七月〇天保七年(紀元二四九六年)。中ゟ、九月中迄、一統ハ御救被下ハ處、此節も打續、米價追々相進みハニ付、其日稼之もの之内、元手錢ニも究果、飢にも可及程之ものハ、神田佐久間町〇市内。ハ御救小屋補理入置ハ積、當十月〇天保七年(紀元二四九六年)。中申上置ハ處、右小屋ハ入ハ程ニも無之、其日稼之ものハ、是又御救筋〇恐紙。有之ハ方と奉存ハ。尤初度御救之節者、米錢半々之割合を以被下置ハ得共、此節之場合ニ而者、皆米ニ而被下置ハ方、別而御仁惠之筋ニ而、且者一体之并とも相成可申哉ニ付、前々之振合を以、先例之通、男壹人ハ一日米五合、六拾歳以上拾五歳以下之分、并女壹人ハ三合ツヽ之割合を以、日數十日分差遣ハ樣可仕奉存ハ。依之此段申上置ハ。以上。

申〇天保七年(紀元二四九六年)。十一月

酉(〇天保八年紀元二四九七年)五月三日越前守殿(〇水野忠邦)御引ニ付、啓阿彌を以飛彈守(〇明樂茂村)上ル。

町會所掛支配向組之者ゟ御手當之儀申上候書付

印筒井伊賀守〇政憲。同大草能登守〇高好。
同明樂飛彈守〇茂村。同田口五郎左衞門〇喜行。

米價高直ニ付、市中其日稼之もの及難儀ニ付、御救として、去七月(〇天保七年(紀元二四九六年)。中一統ゟ米錢被下ゟ處、米價彌相進候ニ付、其日稼之ものも、再度御救皆米ニ而被下ゟ積、同〇天保七年(紀元二四九六年)。十月中猶又被仰渡ゟニ付、其段掛り支配向組之ものゟ申渡、夫々前々之振合を以、手配り爲仕、同月〇天保八年(紀元二四九七年)。迄ニ渡方相濟、其段申上置ゟ儀ニ而御座ゟ處、去秋〇天保七年(紀元二四九六年)。初度御救米錢被下ゟ節者、惣人數三拾五萬三百人餘ニ有之、此度者惣人數四拾萬九千百人餘ニ相成、差引五萬八千八百人餘此度之方相增、且其日を營兼ゟ者共、小屋入爲致、朝夕之食事焚出并右小屋入之者惣人數困窮之次第、紀方等を初、摺立ゟ圍籾石數も多分ニ付、渡し方ニ相成ゟ迄之手續者、不容易儀ニ有之ゟ得共、御仁惠筋之儀ニ付、殊更一同差はまり、取締方第一ニ相心得、改革後之仕法を相守、諸失脚等可成丈省略仕取計、早出居殘仕、格別骨折相勤ゟ儀ニ付、勵之ため御手當被下ゟ方可然哉ニ奉存ゟ。右被下方之儀御勘定組頭ニ銀七枚別段銀七枚、御勘定方ゟ銀拾枚別段金拾三兩ツヽ、吟味方改役并支配勘定同出役ニ銀八枚別段金拾兩ツヽ、兩組與力ゟ銀七枚別段金十兩ツヽ、御普請役同見習并兩組同心ゟ金千疋別段金五兩、町會所御下ヶ金利金溜之內を以、被下ゟ積申渡、御用達以下之もの共儀も、前々之振合を以、町會所金之內ゟ夫々手當差遣し申ゟ。依之申上ゟ。

去秋(〇天保七年紀元二四九六年)初度御救米錢渡方相濟候節、町會所改正始而之取扱ニ而、諸入用多分相減、格別骨折候ニ付、御勘定組頭ゟ銀十五枚、吟味方改役御勘定方ゟ金貳拾兩ツヽ、兩組與力ゟ金十八兩ツヽ、同心ゟ金八兩ツヽ、御手當として町會所御下ヶ金利金溜之內を以被下候旨申渡、此段申上候。

以上。酉〇天保八年(紀元二四九七年)。四月

——天保七申年十一月再度御救一件

申(〇天保七年紀元二四九六年)十一月六日加賀守殿(〇大久保忠眞)ゟ大澤彌三郎ゟ以五郎左衞門(〇田口喜行)上ル。

印　都築金三郎　正田榮次郎印　佐藤十兵衞印
福田所左衞門印　田中新五兵衞印　本多彌太夫印

村井專右衛門印　加藤又左衛門印　松浦彌左衛門印

市中其日稼之もの之內飢ニ可及程之もの御救小屋建增ハ儀ニ付申上ハ書付

印筒井伊賀守〇政憲。　印大草能登守〇高好。

印明樂飛彈守〇茂村。　印田口五郎左衛門〇喜行。

米價高直ニ付、其日稼之もの之內、極貧にて飢ニも可及程之もの爲御救佐久間町地先〇市內。ハ小屋取建、右之內ハ入置、町會所ニおゐて焚出し仕ハ旨、去月〇天保七年(紀元二四九六年)十月。中其段申上置、支配向組之ものハ申渡、爲取斗ハ處、右小屋入之者、當月〇天保七年(紀元二四九六年)十一月。四日迄ニ七百七十三人ニ相成、是迄之小屋ニ而者手狹ニ付、猶又同所ハ一ヶ所小屋取建ハ積申渡、依之申上置ハ。以上。

申〇天保七年(紀元二四九六年)。十一月

申(〇天保七年紀元二四九六年)十一月十六日加賀守殿(〇大久保忠眞)ハ大澤彌三郎を以田口五郎左衛門(〇喜行)上ル。

印　都筑金三郎　正田榮次郎印　佐藤十兵衛印

福田所左衛門印　田中新五兵衛印　本多彌太夫

村井專右衛門印　加藤又左衛門　松浦彌左衛門印

荒歲流民救恤圖

原寸 竪六寸 横八寸六分　福鎌文也所藏

華山渡邊登畫ク所、天保七八年(紀元二四九六年二四九七年)ノ飢饉ニ際シ、筆者自ラ儒者北小路大學助ト共ニ、京師三條磧ニ救小屋ヲ設ケテ流民ヲ救恤シタル際、其狀況ヲ圖シタル者、京師ノ出來事ニ係ルト雖、江戸ノ慘狀亦略相同シキヲ以テ、此ニ其十一面中救小屋內ヲ畫キタル者二面ヲ撮影シ、以テ當日ヲ想見スルニ便ズト云フ。所藏者ノ父福鎌芳隆嘗テ模刻シテ、明治天皇乙夜ノ覽ニ供シタルコト有リ。筆者自記ニ云フ。

荒歲流民救恤圖並略記

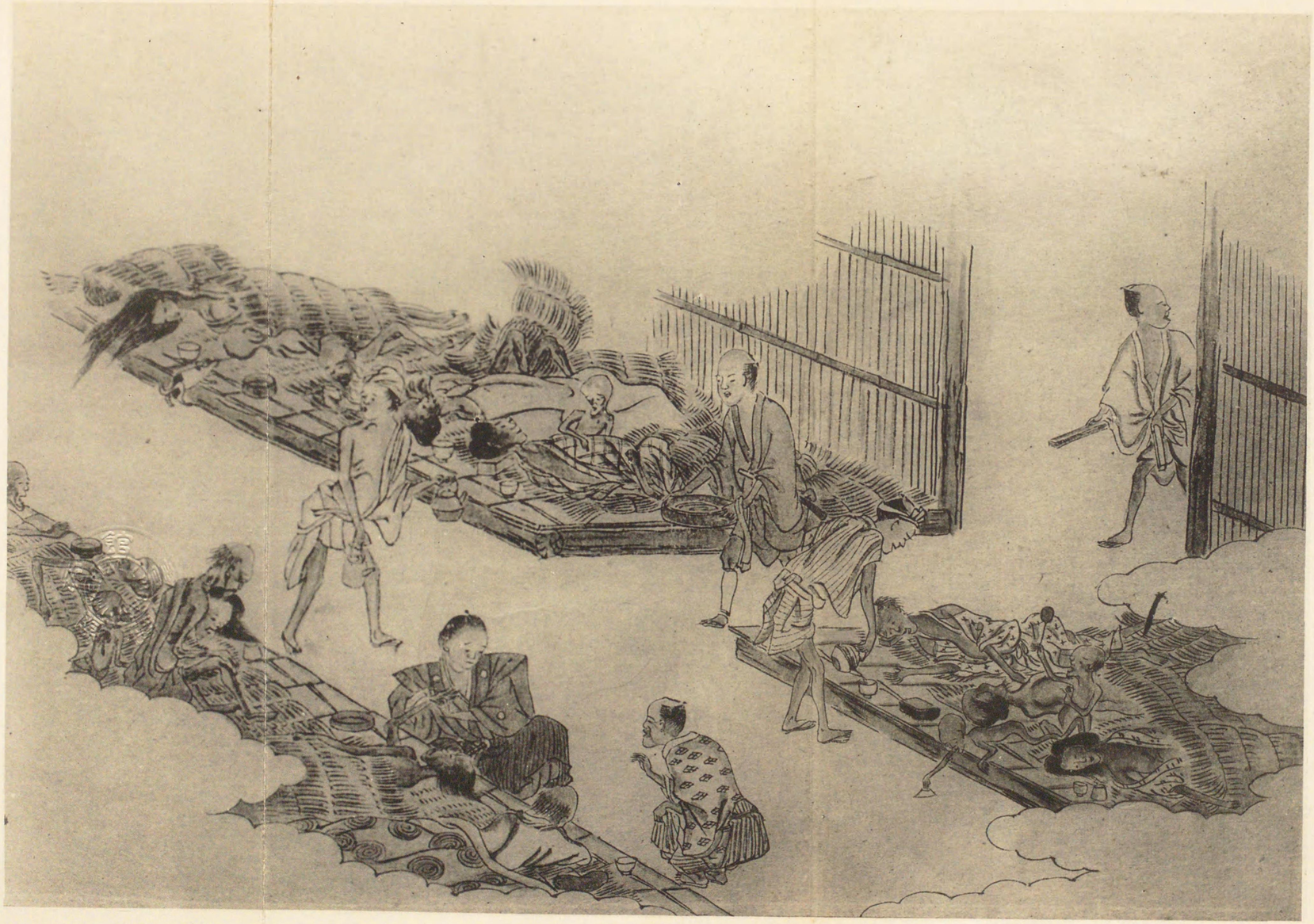
天保七年丙申夏雨水災ヲ爲シ、海內一般ノ凶稔ニシテ、米價日々沸騰シ、秋冬ニ至テ、貧民飢餓ノ者夥シ、目下其慘狀ヲ見ルニ忍ズ、於是不肖定靜、教諭所儒師北小路大學助ナル者ト謀リ、普ク都下ノ同志者ヲ募リ、官ノ許可ヲ經テ、明八年丁酉正月ヨリ、三條橋南ノ磧ニ於テ、數區ノ小舍ヲ結ヒ、是ヲ救小屋ト唱ヘ、飢餓ノ流民ヲ招集シ、衣食醫藥ヲ救與シ、死者ハ埋葬シ、翌九年三月ニ至テ止ム、十五ヶ月間也。救恤スル者總テ一千四百八十餘人、內死亡セシ者九百七十四人、死亡埋葬ノ寺院七ヶ寺也。則

五條坊 安祥院　砂川 常林院　藏手 西願寺

藏手 三綠寺　藏手 高樹院　三條今出川 佛佗寺

六波羅 寶福寺

天保九年四月　田原 渡邊登源定靜並記



市中其日稼之内可ゝ及ゝ飢程之者差置ゟ御救小屋建増之儀申上ゟ書付

印筒井伊賀守〇政憲。　印大草能登守〇高好。

印明樂飛彈守〇茂村。　印田口五郎左衛門〇喜行。

引續米價高直ニ付、市中其日稼之内、極貧ニ而飢ニも可ゝ及程之者、神田佐久間町地先〇市内。ゟ爲ニ御救一小屋取建入置、焚出し握飯差遣ゟ積申上置ゟ處、小屋入之者追々相増、右ニ而ハ手狹に付、同町續キ花房町地先〇市内神田區。ゟ尚又小屋建増ゟ積り可ニ取計一旨、掛り支配向組之者ゟ申渡ゟ。依ゝ之申上置ゟ。以上。

申〇天保七年(紀元二四九六年)。十一月

申(〇天保七年紀元二四九六年)十一月廿三日加賀守殿(〇大久保忠眞)ゟ大澤彌三郎ヲ以伊賀守(〇筒井政憲)上ル。

印都筑金三郎　正田榮次郎　佐藤十兵衛小印

福田所左衛門印　田中新五兵衛同　松村忠四郎同

本多彌太夫同　松井專右衛門　加藤又左衛門同

松浦彌左衛門

市中其日稼之内飢にも可ゝ及程之もの差置ゟ御救小屋建増之儀申上ゟ書付

覇都時代ノ飢饉

小印筒井伊賀守○政憲。同大草能登守○高好。同明樂飛彈守○茂村。同田口五郎左衞門○喜行。

引續米價高直ニ付、市中其日稼之內、極貧ニ而、飢ニも可及程之もの爲御救神田佐久間町○市內。井同町續花房町地先○市內。ハ小屋取建入置、焚出し握飯差遣ハ積申上置ハ處、小屋入之もの追々相增、右ニ而ハ手狹ニ付、柳原土手北之方ナダレ地○市內。与唱ハ場所之內、稻荷河岸東ゟ淺草御門西之方迄之間明キ地之分ニ尙又小屋建增ハ積り可取斗旨、掛支配向組之ものニ申渡ハ依之申上置ハ。以上。

申○天保七年(紀元二四九六年)。十一月

十一月十一日○天保七年(紀元二四九六年)。ゟ同○天保七年(紀元二四九六年)十一月。晦日迄

一、握飯代

男三千五百拾四人、

此代貳百三拾四貫貳百六拾四文。

女井子供 七千八百七拾五人、

此代三百拾壹貫七百拾八文。

——天保七年御救小屋一件

ゟ錢五百四拾五貫九百八拾貳文。

此金八拾貳兩貳分三朱錢貳百四十六文。但兩ニ六貫六百文替。

外

一、人足百人ニ付半人掛晝夜分 壹人錢三百三十文之積。

此賃錢 ゟ三拾七貫七百貳十三文。

一、炭拾六俵 廿日之內四日除、十六日分。

此代錢六貫百五十八文。

一、薤百枚

此代錢十貫四百四十八文。

一、半紙貳萬貳千枚

此代錢三拾貫八百五十三文。

一、半切六千枚

此代錢六貫六百文。

一、蠟燭三百貳十挺

此代錢五貫百四文。

霸都時代ノ飢饉

六口 〆錢九拾六貫八百九拾文。

此金拾四兩貳分貳朱錢三百六十六文。

惣〆錢六百四拾貳貫八百七十六文。

此金九拾七兩壹分貳朱錢貳百四文。

申〇天保七年(紀元二四九六年)。十二月朔日ゟ酉〇天保八年(紀元二四九七年)。正月廿日迄

一、握飯代

人數四百四十七人。

內

男百四十九人、

此代錢九貫九百三十貳文。

女幷子供 二百九十八人、

此代錢拾壹貫七百九十貳文。

〆錢貳十壹貫七百二十四文。

此金三兩二分一朱錢三百五十二文。

外ニ

一、人足百人ニ付半人掛晝夜分 壹人錢三百三十文之積。

此賃錢壹貫四百八十七文。

一、炭五俵 (朱)炭壹俵銀三匁五分。

四十九日分

此代錢壹貫九百廿四文。

一、半紙八百九拾四枚 (朱)半紙壹束銀二匁五分五厘。

此代錢壹貫貳百五十二文。

一、半紙二百廿四枚 (朱)半切百枚銀壹匁。

此代錢二百四十五文。

一、筆五十對 (朱)壹匁ニ付四對もの。

此代錢壹貫三百七十貳文。

一、墨七挺 (朱)墨壹挺ニ付八分もの。

此代錢六百十五文。

一、朱墨七挺 (朱)朱墨同四分もの。

此代錢三百八文。

八口〆錢九貫百口文。

此金壹兩貳分錢百廿八文。

惣〆錢三拾貫八百五十六文。

此金五兩貳朱錢百八文。雨ニ六貫文替。

前(未)書銀直し六貫六百文之積り。

水野越前守殿(〇忠邦)御渡候御書付寫

町奉行衆

大目付ゟ

去申年(〇天保七年(紀元二四九六年))。以來、米價高直ニ付而ハ、御府內市中其日稼之もの共、及難儀ハ間、町會所ニおゐて、御救米錢被下、又ハ御救小屋取建、厚御世話も有之ハ得共、此節ニ至ハ而ハ、道路ニ迷ひ、又ハ行倒ハものも有之哉ニ相聞ハニ付、此度御代官中村八太夫・山田茂左衛門・伊奈半左衛門・山本大膳掛りニ而、品川(〇武藏國荏原郡。)板橋(〇武藏國北豐島郡。)千住(〇武藏國南足立郡。)內藤新宿(〇武藏國豐多摩郡。)邊ゟも、御救小屋取建、御手當有之ハ積ニ付、右體道路ニ迷ひ、或者行倒ハもの等も有之ハハヽ、其場所辻番所組合頭取ゟ家來差添、最寄小屋場ゟ差出、右組合ニ入不申向者、銘々家來差添、同樣可差出ハ。

右之趣、江戸中武家方寺社之向ゟも、不洩樣可被相觸候。

三月(〇天保八年(紀元二四九七年))。

右之通可被相觸ハ。

酉(〇天保八年紀元二四九七年)十一月廿一日佐野嘉三兵衛ゟ以御渡、同日本紙者同人ゟ返上。

町奉行衆

明樂飛驒守(〇茂村)。

矢部駿河守(〇定謙)。

米價高直ニ付、下賤之もの共取續兼、道路ニ迷ひ、又者行倒ハ類、品川(〇武藏國荏原郡。)外三ヶ所ゟ御救小屋取建、御手當有之ハ間、右體之もの者、其向々ゟ最寄小屋場ゟ可差出旨、町觸之儀、先達而及御達ハ處、いまた米價下直ニ申ニ者無之ハ得共、去秋以來ニ見競ハ而者、格別ニ引下ケ、最早取續兼ニと申時節ニも無之ハニ付、自今小屋入差留ハ間、其旨可相心得段、町方惣體ゟ御觸有之、且穢多彈左衛門狩込ハもの引渡之儀も、是又差留之儀、御申渡有之ハ樣存ハ。右者水野

越前守殿〇忠邦。に伺之上、及御達候。　酉〇天保八年(紀元二四九七年)。十一月

米價高直ニ付米錢其外施行差出しいもの調書付

但武家方御用達町人より施行差出し候も有之候

一、深川海邊大工町　所持地面之内

通壹町目儀左衛門店　半三郎

表店八軒に挽割八斗

裏店三拾貳軒に同三石貳斗。但壹軒ニ付壹斗宛。〇下略。

——米價高直

天保八酉年(〇紀元二四九七年)三月六日樽藤左衛門役所ニ而申渡。

「御救小屋場に町役人呼出之儀ニ付、小口年番名主共に申渡寫

今六日〇天保八年(紀元二四九七年)三月。町觸差出いゝ通、市中行倒等之もの、町役人見當次第最寄小屋場に召連いゝ節、其もの身元之儀、詰合之御代官手附手代ともゟ相糺、有宿者勿論、假令當時無宿ニ候とも、元來御當地〇江戸。之もの者、元居町役人とも呼出引渡、并去秋〇天保七年(紀元二四九六年)。以來町會所ニおゐて一旦御救受候もの共も、是又元居町に引渡、一同所役ニ手當爲致候積。右ニ付而者、町役人とも呼出し之儀、其度々達有之候而者手延ニ相成差支候ニ付、此度ニ限り奉行所差紙者不相混樣、掛り御代官中村八太夫・山田茂左衛門・伊奈半左衛門・山本大膳手附手代ともゟ書付を以、其所支配之名主ともに呼出之儀可申遣候。

右之趣、御勘定奉行衆ゟ御達し有之候間、兼而心得居候樣、例之通組々早々可申繼候。

右之通被仰渡奉畏候。爲御請御帳ニ印形仕置候。以上。

天保八酉年〇紀元二四九七年。三月六日　南北小口年番名主共

——天保撰要類集

天保七申年〇紀元二四九六年。七月廿三日肥後守殿〇林忠英。

先年米直段下直ニいゝ間、相場之障ニ相成いゝ付、追而及沙汰いゝ迄、都而白米ニ而江戸表に引受いゝ儀、素人者不及申、假令問屋共ニいゝとも、一切引受申間敷旨、文化三寅年〇紀元二四六六年。町觸有之、奥筋并關八州御料私料寺社領にも相觸いゝ處、此節江戸表米價高直ニ付、市中及難儀いゝ間、在方ニ而米所持之者共者、白米ニ舂立追而及沙汰いゝ迄、江戸内に積送、問屋共者勿論、素人迄も勝手次第賣捌可申いゝ。

右之趣、奥筋并關八州、御料私領寺社領共、不洩樣可被相觸いゝ。

右之通、可被相觸いゝ。尤西丸御目付にも可有通達いゝ。　七月〇天保七年(紀元二四九六年)。

天保七申年〇紀元二四九六年。十一月十二日肥後守殿〇林忠英。十五日〇天保七年(紀元二四九六年十一月)觸。

近年遠々國柄有レ之、江戸入津米無數、米價雜穀共、此節甚高直ニ相成、下々難儀致レ候ニ付、御救等被二下置一其外米穀融通宜敷樣早々御汰沙も有レ之折柄故、諸家中扶持米丈ケ者銘々領分知行所ゟ相廻レ候樣可レ被二心得一候。尤凶作皆無同樣之場所、或者運送手間取レ候場所等者格別、左も無レ之分者、江戸ニ而買入レ候儀、可レ成丈勘辨致し可レ被二取計一、且餘分ニ相廻し、扶持米程除置、其餘市中ゟ相拂レ候義者不レ苦候。

右之通、萬石以上以下共、領分知行所有レ之面々ゟ、可レ被二相觸一候。尤西丸并大納言樣御目付ゟも可レ有二通達一候。十一月〇天保七年(紀元二四九六年)。

天保八酉年〇紀元二四九七年。七月廿八日大和守殿〇堀親審。

去申年〇天保七年(紀元二四九六年)。以來、米價高直ニ付御府內窮民爲二御救一、品川〇武藏國荏原郡。外三ヶ所ゟ、御救小屋取建置レ候間、道路ニ迷ひ、又ハ行倒レ候類者、辻番頭取家主町役人等差添、右小屋場ゟ可二差出一旨、當三月〇天保八年(紀元二四九七年)。中相觸、追々小屋入之ものハ、厚御手當も有レ之レ候處、今以御府內立廻りハ飢渴之人共不レ少由ニ付、向後町方之儀者、町奉行組同心廻り、御二救小屋一ゟ送方之儀及二差圖一レ候樣、町奉行申渡レ候間、武家屋敷近邊、御小人目付日々見廻、道路ニ迷ひ又ハ行倒レ候者ニ而茂、小屋入不二相願一分ハ相除、實々小屋入相願レ候者ともハ、最寄御救小屋ゟ送方之儀、及二差圖一レ候樣、可レ被二申渡一候。尤四ヶ所御救小屋をも、御小人目付時々見廻り、取締等之儀も心附レ候樣是又可レ被二申渡一候事。

——政保聞記

天保丙申荒噺略記

天保七年〇紀元二四九六年。八月以後、江戸並に諸國荒噺、就レ中奥州仙臺甚しと云。この年春の三月下旬より秋七月まで、屢連雨にて、日光を見ざること數十日に至る。六月〇天保七年(紀元二四九六年)。土用中も、日毎に冷氣にて、予〇瀧解。が如き老人等は、夜分安火を用ひたり。三伏の夏日單衣を着ぬることと只三日のみ、その日も朝夕は夾衣なりき。この故に夏物實のらず、野蔬の高直甚し。市中白米の小賣り、初は百文に六合、八月上旬〇天保七年(紀元二四九六年)。より五合になりぬ。九月〇天保七年(紀元二四九六年)。より冬に至りては百文に四合にて、明春〇天保八年(紀元二四九七年)。までかくの如し。黑扁豆壹合二十八文、赤小豆百文に四合五勺、黑胡麻壹合二十八文、味噌壹朱に付一貫目、燈油一合五十六文より七十二文に至りし日もあり。胡麻油一合百十六

文、この餘も都て高料ならざる物なし。里芋一升六十四文、（冬春相同じ。）葱は最高價日ごろに十倍也。この餘魚蔬の類、五倍三倍高價ならぬはなし。且燈油は問屋にて樽賣をせずとて、一人別に一合より餘は賣らず、それも亦なしとて賣らざる日もまゝこれあり。已ことを得ず魚油を買ふに、魚油は一合四十文也。（去年は十九文。）綿は皆無のよしにて價五六倍登れり。一匁五厘の小袖綿一匁五六分になる。百文に二十二三匁の糸綿十二匁になりければ、木綿もこれに準ず。足袋なども甚貴し、悉枚擧に遑あらず。餘皆倣之。この故に良賤一箇月の費用平日の二箇月分にても猶足らず、困窮せざるは稀也。これに依て丙申（紀元二四九年〇天保七年）八月より、上よりも裏借屋の窮民に御救として、度々一人別に米錢（御米二合、錢二百五十文。）を下され、江戸の巨商も施行をしたり。しかれども猶窮民多しと聞えしかば、丁酉（紀元二四九七年〇天保八年）の冬十一月上旬より、江戸川佐久間町河岸（内神田区。）へ御救小屋を造らして、願ふ者は老弱男女共に入れ置れ、一日に米五合づつを給したまはりて、新吉原町（浅草区。）〇市内並に施行をせざる富商にその炊出しを命せられ、窮民の男子は渡世に出ることを免されてかせぎどりに致し、毎日上げ錢五十文を納め、來春（紀元二四九八年〇天保九年）二月御小屋をとり拂ふゝ折、その

錢五貫文許なるを、本手に渡したまはると也。よなき御仁政仰ぎ奉るに餘りあり。その後同所大根河岸（内〇市内。）に無宿の者の御救ひ小屋を造らして、無宿の窮民を入れおかれ、日毎に三食を下さるゝこと右の如し。丁酉（紀元二四九七年〇天保八年）の春二月十日頃までにて、御定の日限果ければ、宿ありしものは元の家主に引渡され、無宿もみな出されて、御小屋はとり拂ひになりぬ。その御救小屋にありし窮民老人或は多病のもの、嚴寒に堪ずして死するもの多しと云。又無宿の御救小屋には盜賊、巾着切などいふ小盜も多く入りて在りしとぞ。丙申（紀元二四九六年〇天保七年）の冬に至りて新菰かぶりの乞兒甚多かりとぞ。その中には兒兒もありて、或は放火し、或は竊盜を事とすと聞えしかば、それ等はみな驅捕れたり。さらぬ新前の菰かぶりは、冬十二月（紀元二四九六年〇天保七年）に至りて路頭に餓死せるもの多しと聞ゆ。いまだ菰かぶりにならざる男女も、道路に仆るゝもの日毎にこれあり。柳原の土手下などには、日々に五人三人づゝ餓死せしを見ることなしとある人（表具師萬吉。）の話なり。江戸にてかゝる事は前未聞也。天明六年（紀元二四四六年〇天明六年）以後丙午（紀元二四六六年〇誤記有ルカ歟。）の夏まで、江戸並に諸國荒嘯なりし頃は、已（〇瀧解。）弱冠にて、武家に仕へてありしかば、さばかりにも覺えざりき。且

天明丙午〇六年(紀元二四四六年)。丁未〇元年(天明七年(紀元二四四七年)。の飢饉は、夏より秋までにて久しからず、その年〇天明七年(紀元二四四七年)。十月に至り新米も出來、且諸國の隱し米も出しかば、はやく百文に五六合になりたり。又諸物も此度の如く高價ならざりしかば、猶凌ぎ易かり。此度は巳年〇天保四年(紀元二四四九三年)。より申〇天保七年(紀元二四四九六年)。に至りて不作又五箇年なり。その間午〇天保五年(紀元二四四九四年)。未〇天保六年(紀元二四四九五年)。の間は半作にて、さばかり高價に至らざれども、丙申〇天保七年(紀元二四四九六年)。には、その年〇天保七年(紀元二四四九六年)。の秋より明年〇天保八年(紀元二四四九七年)。の秋まで、期年の飢なれば、尤久しきこと也。窮民の凌ぎかぬるも實に理り也。己〇澤解。七十一に至るまでかゝる事はおぼえず。しかれども始より覺期よきその日かせぎのぼてふり小商人は、本手を失はずして日毎に商賣して妻子を養ふこと、是全く泰平の御恩澤、江戸大城のおほん下にて渡世しぬる大幸といふべし。丙申〇天保七年(紀元二四四九六年)。季秋の頃か、大坂町奉行矢部駿州〇定讓。轉役して、御勘定奉行(御勝手掛り。になされしより、いたく心を用ゐざることなく、且上の御尊慮によりて錢を多く御買上げになりしかば、是より錢相場俄に登りて、金一兩に大錢六貫六百六十四文。まで金一兩に小錢六貫七百八十文。なりしに、冬十二月上旬〇天保七年(紀元二四四九六年)。になりたり。これに

より錢にて賣る諸物は直下をせよとある町ぶれ度々に及びしかば、酉〇天保八年(紀元二四四九七年)。春二月上旬より豆腐類など定價の物は小半挺にて一文づゝ下直にいたし、蕎麥なども二八を三五に改めけり。しかれども豆腐は、例年の小半挺よりその形を半分にいたし、蕎麥も例の一椀にくらぶれば半椀ばかりになりぬ。餅煎餅などの形をちひさくして、例年の三分一ばかりにあらざるはなし。此餘定價ならざるものは、錢の安かりし折とかはることなし。諸物元方高料なれば、いかにちひさくしてもなほ引あはずと聞ゆ。紙類の高料又いふばかりなし、半紙はよき物は一帖三十二文也、これらも前未聞のことなり。酒は一升三百五十文、四百文より下直なるはなし、一升二百五十文の味淋四百文になりたれども、都て水を多く加ると覺えて生酒はつや〳〵なし。錢相場の登りしは商人の爲には宜しかるべけれど、武士諸職人なんど金を得て錢を買ふものゝ爲には妙といひがたし。人の心はいやしきものにて、荒年には平生小食の者も食すゝめり、己〇澤解。が如き老人も覺えずして一二椀を增たり。人咲ども猶餓る、故に荒年を饉飢と云、又嘯といふがゝる故にや丙申〇天保七年(紀元二四四九六年)。の冬より味噌豆を煮りて黑砂糖を衣にかけたる物いたく行はれ

て、日毎に賣あるくもの數人なり、只豆のみならず、下直の食物は何によらずよく賣るゝと云。職人の飯米なども一日一人分銀二匁也、道中のはたご錢一人に三百七八十文四百文なる所もありとぞ。扨又御切米の御張札は、丙申（天保七年（紀元二四九六年））の二月五月は百俵（三斗五升入）、金三十八兩、十月は金四十三兩、丁酉（天保八年（紀元二四九七年））の二月の御張札も申（天保七年（紀元二四九六年））の十月に同じ。町の大相場は百俵（四斗入）百七兩より百十七兩まで登りたれば、御張紙はその半にも足らざる也。官庫にも御米多からずと聞ゆ。錢相場の登りしより百文に四合の白米を四合五勺に賣るべし、そも二百文三百文に限るべしと命ぜられしかば、百文二百文づゝ小買をなすものには益あるに似たれども、金にて買ふものゝ爲には二朱に四合の損あり、これも妙とはいひがたかり。丁酉（天保八年（紀元二四九七年））春に至りて入津の米苞多く破船しつと聞えて、小うりも又百文に四合になりぬと聞ゆ。錢の登りしも勢ひそのかひなきに似たり。舊冬（天保七年（紀元二四九六年））寒中より雪しば〳〵なりしかば、麥作は宜しかるべしと云。麥作豐熟せば諸方の隱し米も出づべしといふ者あり。この故に貸借甚あしくて、借んと欲するものは多くて貸す者は稀なり。衣類諸道具などを沽却するに平生の價より三等も四等も下直ならざれば賣れず、さればとて亦買入るゝにはすべて高料ならぬはなし。諸國荒噪の風聞をきくに、四國は三分一の損、西國は半作或は三分一の損もあり、中州大和河内邊も相似たりと云。特に甚しきは奥州仙臺（磐城國）また之に亞ぐ、奥羽常陸不同なれども皆凶作なり。信濃越後三分二の損毛之も亦不同と云。みな風聞なれば詳なることを知らず。江戸近郊の農夫等、野蔬不作といへども常價の十倍なれば、畑作を宗となすものはよろしと聞ゆ。江戸の光景昨今の乞食等錢を乞ずして食を乞へり、凍餓の急なる憐むにあまりあり。吾孫等なほ幼少なればかゝる事を忘るべし。後年に至りてこの記を閲せば、驕奢を省き、天命を畏れ、よろづに不足の慾を禁て、泰平聖世の有がたさを思ひ知るよすがにもなりなん歟と、おもふばかりに記するのみ。あなかしこ〳〵。時に天保八年丁酉（紀元二四九七年。）の春二月十三日筆を閣く。（三月中旬より錢相場下りて兩に六貫七百文餘になりぬ、白米は百文に二合五勺也、前未聞ざいふべし。）

七十一　翁蓑笠陳人（瀧澤解。）記

——曲亭雜記

四月中〇天保七年(紀元二四九六年)。ゟ雨多く、五月〇天保七年(紀元二四九六年)。ニ至りては絶間なく、開帳參詣稀なり。七月十八日〇天保七年(紀元二四九六年)。大風雨、八朔〇天保七年(紀元二四九六年)。大嵐ニて、近在出水、米價愈高く、民間困苦す。御救出。米價六升五合ほとより次第に騰り、八月〇天保七年(紀元二四九六年)。ニハ上米二斗九升、白米百文ニ四合三合五勺之願出たれ共御聞濟なく、御拂米一萬石有之。廿日之後少々宛入舟あり、諸品夥しく高直、野菜少し。七月十八日并八月朔日(〇天保七年紀元二四九六年)曉ヨリ之大嵐ニて雜船おひたゝし、風ハ四ツ時比晝ニいたりて止、又十三日(〇天保七年紀元二四九六年)八月〇天保七年(紀元二四九六年)夜も大嵐、諸國共大方凶作といふ。〇十月下旬〇天保七年(紀元二四九六年)。筋違橋御門外和泉橋〇市内。まて御救小屋建、小屋入之者追々相增、十一月下旬〇天保七年(紀元二四九六年)。ニハ凡五千人餘と云。小屋入之節被ニ仰渡一候。此節米直段高く、其日暮しなりかたく、給つゝきかねに住所にはなれ、道路にさまよふも有レ之由、依レ之此小屋へ被ニ入置一、毎日御賄被下、當人へハ元手錢まて被レ下ほとの厚き思召を難レ有存、日々稼方精を出し、一日も早くその身の有付かた兼て心をかくへし。御小屋いつまてもと存、御拂之時身の片つき方ニ狼狽ぬやうニ心掛へし。一、火の用心嚴重に心付申へき事、酒一切用ひ申間敷事、公儀御法度ハ不レ及レ申、喧嘩口論凡而男女互に行義相愼、老人小供等別ていたはるへき事、右之趣堅相守、心得違於レ有レ之ハ、小屋出し申付るものなり。申〇天保七年紀元二四九六年)十月。

其後五十年、天保七年〇紀元二四九六年。の饑饉には、米價錢百文に付二合五夕に昇りたれど、屢々お救米出で、又お救小屋建て、極貧の者は其中に入りて飢を凌ぐ事を得たればにや、打毀しなどの暴行はあらざりしが、市中人別外の者諸方より入込來りて、非人乞食の類日に殖へ、是等供給の道なかりしなるべし、餓莩は日々路に滿ちたり、大晦日の夜など、柳原通り筋違見附より、淺草見附の間迄に三十餘人の屍を橫たへたるは、實に酸鼻の至りなりと、親しく見し人の話なり。

癸巳〇天保四年(紀元二四九三年)。巳來、天災薦臻、至レ今秋〇天保七年(紀元二四九六年)。巳元二四九三年)。巳爲レ甚。公家發二倉廩一給二米與一錢。

——聞のまに〳〵

——五月雨草紙

一、御救米頂戴書付

人數　三十四萬三千二百四十六人。

右者此度於二町會所一、市中輕き者ニ御救被レ下候惣人數ニ御座候。尤午年〇天保五年(紀元二四九四年)。御救頂戴致候人數三十三萬三千八百廿七人ニ即合候へ者、九千四百拾九人相增申候。

一、男壹人　白米二升五合。

一、同　十四歳以下ゟ　六十歳以上之者　錢四百十六文。

一、女壹人　白米一升五合。錢二百四十八文。

同斷

——救荒二物考序

但、三歳以下之小兒者相除候事。

右者先日御話し御座ゐニ付、此段申上ゐ。以上。

申〇天保七年(紀元二四九六年)。八月　　町年寄

——應思穀恩編

〔參考〕應思穀恩編云ヲ、

天保七申年(〇紀元二四九六年)

江戸中家數(表通り家數計)　貳拾八萬八千間程。

此外ニ御米被レ下候人數

百廿八萬七千八百人程　內、男五十八萬九千八百人、女六拾八萬八千人。

外ニ人數

三千八百四十四人座頭。　三千五百八十人神主。　七千二百三十人山伏。　五萬

四千八百五人出家。

〃六萬九千四百五十九人。

新吉原町　人數壹萬五千七百人程　男八千貳百人、女七千五百人。此內遊女二千

五百人。

同〇天保八年(紀元二四九七年)十二月。二廿六日、町奉行御勘定奉行同吟味役以下之者迄、米價高直之節、御救筋之義、骨折ゐニ付、御褒美被レ下。(町奉行筒井伊賀守(〇政憲)大草安房守(〇高好)御勘定奉行明樂飛驒守(〇茂村))

右三人に、時服三ツ、。御勘定吟味役田口五郎左衛門(〇喜行)へ時服二、右被レ下レ之。△去申年(〇天保七年紀元二四九六年)より稀なる飢饉にて、餓死人巷ニ滿。〇十月下旬(〇天保七年紀元二四九六年)ニ至、爲二御救一神田佐久間町(〇市內ゐ)ゐ四十間四方之小屋取建、市中難澁之者共、ハ町奉行所へ願出、父母妻子諸共、此小屋へ入、此時商賣爲二基手一一人ゐ錢四百文ツ、被二下置一、賣德之內錢五十文ツ、積錢渡し、百日之間預り置、追而小屋拂之節、右積錢被二相渡一候御主法之由也。依レ之追々人數相增、六百人餘ニ成ル。是ゟ同所ゐ小屋五ヶ所取建。十一月二十日(〇天保七年紀元二四九六年)小屋入之人數四千六百八人也。壹人ニ付米三合ツ、、此飯米一日米十三石八斗壹升四合也。但三歳以下ゐハ不レ被レ下。此內產婦五十餘人有レ之。出生ゐ生衣一ツ、被レ下候。此時總人數二萬餘人ニ及ミ云。〇申(〇天保七年紀元二四九六年)ノ十月朔日ゟ同(〇天保七年紀元二四九六年)十月廿九日迄、町奉行所へ訴出候分、左ノ通。行倒死百五十八人。捨子五十三人。缺落百十八人、盜賊ニ遂候者屆百五十七口、湯屋盜賊百六十一軒也。〇此時米價錢百文ニ付二合五勺也。〇西(〇天保八年紀元二四九七年)ノ二月御觸、此節米價幷諸色共高直ニ而、何れも致二難儀一候ニ付、取續相成ル樣、早々御世話有レ之、殊ニ町人共之內、身元相應之者ハ、施行差出候者數多ニ而、夫々賞譽も有レ之、場末ニも右樣之義數多にて、輕き輩ゐ心得違を生しゐたり。ヶ間數義有レ之哉ニ相聞、既ニ去冬中(〇天保七年紀元二四九六年)下目黑村ニ而ゐたり、又ゐ押借致候上、其所を爲レ騷、口論等仕懸り者有レ之ニ寄、召捕、夫々御仕置申付候得共、身元宜數者ハ、ゐたり等不二申掛一候共、銘々身上相應之施行等も差出候義有レ之處、事六ヶ數之御仕置被二仰付一候間、心得違無レ之樣申諭、尤困究者にて、町會所ゟ臨時御救も被レ下、其外御救筋御世話も有レ之候義ニ付、銘々相愼み、取續方心掛る樣可二申付一候。〇酉(〇天保八年紀元二四九七年)ノ三月ニ至、猶又御代官中村八太夫・山田茂左衛門・伊奈半左衛門・山本大膳掛りニ而、品川(〇武藏國北豐島郡)千住(〇武藏國南足立郡)內藤新宿(〇武藏國豐多摩郡)へ御救小屋出來、十一月下旬(〇天保八年紀元二四九七年)引拂、翌戌年(〇天保九年紀元二四九八年)十二月御代官三人ゐ、御褒美金一枚ツ、被レ下レ之。

此外廻狀留・牧民金鑑・應思穀恩編・甲子夜話・守靜堂雜錄・大村家覺書・北叟遺言・松

——泰平年表

霸都時代ノ飢饉

平容敬年譜・續日本王代一覽後記・武江年表ノ類、煩ハシケレハ今之ヲ略ス。精シキハ救濟史ヲ見ル可シ。若夫窮民救助ノ一手段トシテ濱殿溝渠ノ浚渫工事ヲ起シタル顚末ハ、天保撰要類集ニ左ノ如ク見ユ。

御救之ため濱御構掘浚一件

天保七申年（〇紀元二四九六年）十一月十五日大久保加賀守殿（〇忠眞）御直上ル之。

窮民御救筋之儀ニ付申上ル書付　筒井伊賀守（〇政憲。）

當夏（〇天保七年（紀元二四九六年）。）以來、米相場追々高直ニ相成、當時ニ至候而者、米麥者勿論、雜穀其外食用相成候品者、何品も高直ニ相成、日增ニ世上難澁難ル凌樣子ニ相成候故、追々御救筋御世話も有之、先者穩ニ有之候得共、實ニ輕者共窮迫之樣子ニ而、捨子欠落者行倒等日々多人數有之、且御救小屋入相願候も日々相增、兩三日者月番之番所ニ駈込來候者八九百人ゟ千ニもおよひ候得共、御救小屋も場狹ニ而、中々大人數者入兼候故、追々建增、當時四棟ニ相成候得共、申出候儘小屋入申付候而者、際限も無之、置所焚出之手當等も行屆兼候儀ニ付、町役人共呼出、當人之樣子篤ゟ相糺、其次第ニ寄理解申聞、町役人ニ引渡遣候も多、實以及飢餓候程之者而已小屋入申付候得共、昨日（〇天保七年（紀元二四九六年）十一月十四日。）迄

ニ千七百九拾四人ニ相成、猶此上も追々無據者共者、聞屆遣候事ニ候得者、人數日々相增可申、小屋入申付候程之者共、小兒抔召連來實以眼も當られざる樣子ニ有之、飢餓之躰無相違相見ニ付、可憐事ニ御座候。乍去格別之御仁惠を以、右樣御救小屋も被仰付、艱苦相凌、殊元手錢迄も被下候得者、小屋内ゟ商ひ日雇等銘々夫々之稼も出來仕候間、不一方御救筋ニ而難有儀ニ有之、其上再度之御救米も、兩三日中ニ者渡方相成候間、此上人氣も落付可申与奉存候。乍併今年（〇天保七年（紀元二四九六年）。）之儀者、連年不作之上之儀ニ候得者、米穀拂底之段ハ無相違、何分江戸表有米高不足ニ有之、心配仕候故、此間伺濟之趣を以、町方御用達共ゟ申付、米買付方爲取斗、又者米問屋其外身元相應之もの共も、厚キ御趣意之段申諭、爲買入候手筈ニ候得共、當時近在遠國共、米穀拂底之折柄ゆゑ、商賣取組之故障も多、先達而御觸も有之候得共、諸國領主地頭津留等も有之、又者其所ニ而津出不爲致も有之樣子ニ候得者、急速買付方行屆、不遠入津米可有之との見居も未相付不申儀ニ候得者、此上相場引下ケ、窮民共歸住、家業營候程之場合ニ至り候ニ者、暫く月數も相掛可申哉、其内なから商賣躰ニ寄ていゝ、差而不及困窮も有之候得共、諸職人并按摩取藝人之類、或者小切賣古道具屋、ら

うのすけ替抔之類、緊要ならさる商賣躰之者ゟ、悉く障ニ而取續難澁之趣ニ
相聞、猶此上も米價諸色永々高直ニ有レ之候ハヽ、此節ゟ御救米も被レ下候得共、
纔十日之食料ニ而渡し、日數も相懸候得者、未々迫者とも者、二ヶ月餘も相後
れ候事ニ候間、夫迄ニ者凌兼、道路ニさまよひ候樣可二相成一哉、御救小屋迚も無二
際限一建增も難二行屆一、此上別ニ御救筋之儀、差當存付も無レ之候得共、享保之頃ニ
者、飢饉之節、右樣之者共救之ため、御堀淺被二仰付一候儀有レ之由及レ承候、突留有無
之儀早速難二相分一候得共、いか樣右樣之儀も可レ然哉、其子細者、此節柄いつ方ニ
而も難二捨置一場所之外者、普請作事等いたし候者も無レ之、且銘々無益之失費無レ
之樣心掛候得者、無據品之外者買候者も少く、按摩取其外藝人抔之類等賴候
儀無レ之候得者、自ラ右樣之類取續難澁相成候道理ニ有レ之、其內職人抔者何レ
も健强成者ニ候得者、万一困苦ニ堪兼、何樣之不了簡可レ致も難レ斗、御堀淺等被二
仰付一候得者、右等之類又者御救小屋ニ罷在候者共、土持堀方等ニ出候得者、上
手下手之無差別歩行擔物相成候程之身分ニ候得者、銘々之働丈者、元手錢無レ
之共賃錢受取候事故、差當居なから困苦ニ迫候儀者有レ之間鋪哉ニ付、猶此上
世上之模樣ニ寄、右樣之儀被二仰付一候ハヽ、又一時之御救ニも相成可レ申哉、必可レ

然との見居も無レ之候得共、右者格別之御入用も不二相成一、御失墜相成候筋ニ者
無レ之候間、此節柄存付候儀ニ付、御取捨之程者兎も角も、先此段申上候。以上。

申（天保七年（紀元二四九六年））十一月　筒井伊賀守（政憲。）

（天保七年紀元二四九六年）十二月八日大久保加賀守殿（忠眞）ゟ御直上、同月（天保七年紀元二四九六年十二月）廿七日御書取添、大澤彌三郎を以御下ゲ、承ヒレ付致、翌廿八日（天保七年紀元二四九六年十二月）返上。「ヒレ付、末ニ記。」

御堀淺御入用御出方之儀勘辨仕候趣申上候書付

筒井伊賀守（政憲。）

米價高直ニ而、市中輕者共之內、其職業ニ寄候而者、猶更極難澁之者共有レ之、右
等之御救旁御堀淺之儀存付候趣申上候處、右者可レ然思召候得共、多分之御入
用も相掛可レ申合、御出方之儀存付も有レ之候ハヽ、可レ申上旨被二仰渡一候。
此儀兼而可レ然存付も無レ之候ハヽ、御出方ニ相成候而者、御費に
方補之ため、金千兩分錢御座候得共、差當勘辨仕候處、此度市中輕者共取續
も不二相成一可レ然哉ニ候得共、折角御買上之錢猶又市中ゟ御渡方相成候而者、
忽錢相場相崩、御買上相成候詮も無レ之儀ニ付、右も難レ申上、依而者錢相場引

上候得者、相場違ニ而、兩替屋共利益之内取上候八歩者、是又錢ニ而爲ニ相納一、此錢者在浦方魚仕入金、又者此節之魚油仕切金等爲レ致候歟、船ニ而運送相成候在方ニハ振向、金ニ引替候上、町方御用達共ニハ申付候米買入方諸失脚之補ニも可レ仕哉与心組罷在候間、御堀浚御入用御藏御出方之處、御差支も有レ之候ハヽ、右を繰替御用辨相成候而も宜、左候ハヽ米買方失脚補之方者、又々何与歟取斗方も可レ有レ之間、右ヲ以御用辨ニも可ニ相成一哉、或者千兩橋掛替永續御手當金も、只今者餘程之溜金ニ可レ有レ之間、千兩斗者右之内御遣ひ方ニ相成候而も御差支も有レ之間敷候。然處錢之儀も先千兩御買上ニ仕、尚模樣ニ寄千兩歟貳千兩御買上之積相心得可レ申旨被ニ仰渡一候間、若哉都合三千兩錢御買上之方ニ被ニ御除置一候儀ニも御座候ハヽ、最初御買上之千兩者御下金有レ之、跡貳千兩之儀者外ニ勘辨仕、取斗方猶相伺候樣仕、御下ケ金之儀不ニ申上一相濟候樣ニも取斗申候ハヽ、右貳千兩者御浮金ニ相成可レ申委故、右貳千兩之内を以、御堀浚之御入用御用辨ニ相成候ハヽ、別段御金藏御出方ニ相響候儀も有レ之間敷間、右三ヶ條之内を以、被ニ仰付一候ハヽ、可レ然哉ニ奉レ存候。

右勘辨仕候趣、書面之通御座候。依レ之被ニ成ニ御下一候書付壹通返上、此段申上候。以上。

申（天保七年（紀元二四九六年））十二月　　筒井伊賀守（政憲）。

下ケ札

書面米價高直ニ而、市中輕者トも之内、職業ニ寄猶又極ニ難澁一之者共御救旁御堀浚御入用出方之儀、筒井伊賀守（政憲）ニ被ニ仰渡一候趣ヲ以勘辨仕申上候趣一覽仕取調候處、此度錢相場違ニ而兩替屋共利益之内取立候方御堀浚御入用ニ遣拂候歟、又者千兩橋掛替永續御手當金溜之内千兩も御遣方ニ相成候歟、其餘此度千兩御買上仕、猶模樣ニ寄、千兩歟貳千兩錢御買上之積ニ相心得可レ申旨被ニ仰渡一候間、三千兩錢御買上之方ニ被ニ御除置一候儀ニも候ハヽ、錢御買上者金千兩御下ケ有レ之候ハヽ、貳千兩之外ニ勘辨取計方猶相伺候樣、御下ケ金不ニ申上一、右貳千兩御浮金ニ相成候姿ニ付、御堀浚之御入用ニ相成候ハヽ、別段御金藏御出方相響候儀も有レ之間敷哉之旨ニ御座候間、猶勘辨仕候處、此度處御門外御堀埋候處浚方之儀、御普請奉行相伺ひ候書面私共評儀仕申上候趣ヲ以、浚方被ニ仰渡一候ハヽ、伊賀守申上候市中輕者共雇入、相應之働爲レ致、賃錢差遣候積有レ之、且前文伊賀守勘辨仕申上候三廉之内、錢相場引上ヶ候付而者、兩替屋共利益之内八歩取立候分者、全同人差略ニ出來候浮金ニ御座候間、右之分御堀浚之入用高ニ調達いたし候ハヽ、其高を以輕者御救筋御堀浚有レ之候儀者可レ宜哉ニ御座候得共、其餘之貳ヶ條者、御堀浚ニ付、別段之御出方ニ相成、可レ然与も難ニ申上一候間、

書面申上候三ヶ條之内、錢相場引上候ニ付、兩替屋共利益之内八歩取立候方、御堀浚之御入用高ニ調達いたし候積、御普請奉行ゟ打合候樣可レ仕旨、伊賀守ゟ被二仰渡一有レ之趣、御普請奉行之働爲レ致、賃錢差遣し候積、御堀浚いたし候心得を以、御堀ヶ所御入用等取調相伺候積、御堀浚いたし候ハヽ、其金高を以、市中輕もの共御救助筋相應も被二仰渡一可レ然哉ニ奉レ存候。

申(〇天保七年紀元二四九六年)十二月　明樂飛彈守(〇茂村)。矢部駿河守(〇定謙)。田口五郎左衛門(〇喜行)。鳥居八右衛門(〇元吉)。川路三右衛門(〇聖謨)。村田幾三郎(〇矩勝)。

御勘定方

ヒレ付

書面御堀浚御入用御金出方三廉之内、錢相場引上候ニ付、兩替屋とも利益之内八歩取立候分、御堀浚之御入用高ニ調達いたし候ハヽ、其金高を以、市中輕者共御救助筋相應之働爲レ致、賃錢遣候積之心得を以、御堀ヶ所御入用等取調可二相伺一、尤此外御金出方二廉之分ハ無用可レ仕旨被二仰渡一、奉二承知一候。

申(〇天保七年紀元二四九六年)十二月廿七日　筒井伊賀守(〇政憲)

酉(〇天保八年紀元二四九七年)三月御直上レ之。

〔越前守殿(〇水野忠邦)〕

御堀浚之儀ニ付申上ル書付

筒井伊賀守(〇政憲)

去年(〇天保七年(紀元二四九六年)。)以來、米價高價ニ而、市中一統及二困窮一、其内ニも小前之者共、別而難澁仕候ニ付、右等之者共御救之爲メ、御堀浚等被二仰付一候而者如何可レ有レ之哉之段、存付之趣ヲ、舊冬(〇天保七年(紀元二四九六年)。)加賀守殿(〇大久保忠眞。)ゟ申上候得者、其後御入用御出方之儀御尋有レ之、勘辨仕候趣申上候處、錢相場引上候ニ付、兩替屋共利益之内八歩取立候分、御堀浚之御入用高ニ調達いたし候ハヽ、其金高を以、市中輕もの共御救筋相應之働爲レ致、賃錢差遣候積之心得を以、御堀ヶ所御入用等取調可二相伺一旨、舊臘(〇天保七年(紀元二四九六年)。)御同人(〇大久保忠眞。)被二仰渡一、當春(〇天保八年(紀元二四九七年)。)右取立候内金千兩御堀浚之方ゟ御出方ニ相成、差支有無御普請奉行ゟ掛合有レ之、差支無レ之段及二挨拶一置候處、日比谷御堀(〇市内。)井赤坂溜池(〇市内。)常浚組合入用遣殘御金藏ゟ假納いたし置候金子、幷右私方ゟ可二差出一金千兩を以、一橋御門(〇市内。)ゟ數寄屋橋御門(〇市内。)迄之間、清水御門(〇市内。)ゟ竹橋御門(〇市内。)迄之間、御堀掃除浚之儀取調、御普請奉行ゟ相伺候處、假納金之内御使方者、先差延之積、右取立金千兩を以、掃除浚窮民御救方行屆候樣、今一應取調直し可二相伺一旨被二仰渡一候得共、千兩而已ニ而場廣之御堀掃除浚ニ而も中々出來兼、殊御救筋行屆候樣ニ者迚も無覺束ニ由ニ而、右千兩之外ニ私方おゐて御出方ニ可二相

成金子無之哉之旨、猶又懸合有之候間、素ゟ右千兩之外私共方ゟ可差出金子無之、并右千兩而已を以、御堀浚等被仰付候而者、場廣之御府内御救筋之御趣意行渡申間敷候間、今一應勘定いたし可申上旨、其外委細及挨拶候ニ付、猶又相伺候哉ニ承知仕候得共、未御差圖無之候哉沙汰無之、然ル處追々市中差詰り、實ニ極難之樣子相聞、此程心痛仕罷在候折から、此度大坂〇攝津國。表之騷動を、市中之もの共内々取沙汰仕由ニ候得者、右之通大坂〇攝津國。表之變事ニ而者、彌以入津米有之之間敷抔存迷ひ、不了簡不仕樣夫々手段仕居候時節ニ相臨候故、猶又急速御堀浚等ニ而も有之之右之方ニ極難之もの共多人數罷出候樣相成候ハヽ、窮迫之者共氣配を相鎭メ候一助ニも罷成可申哉ニ付、前書之御堀掃除浚、又者先達而御普請奉行ゟ伺置候由之濱御堀浚等ニ而も、急速御差圖御座候樣仕度奉存候、依之申上候、以上。

酉〇天保八年(紀元二四九七年)三月

申渡

筒井伊賀守〇政憲。

酉〇天保八年紀元二四九七年)三月廿七日、於二例席一申渡。

山崎助左衛門

此度町々窮民共御救之爲メ、御普請奉行一手持ニ而、濱御殿地御構堀浚有之、窮民共多人數罷出、可及混雜ニ付、人足制方懸申付ル。酉〇天保八年(紀元二四九七年)三月

〔參考〕天保飢饉奥羽武藏聞書ニ左ノ如ク見ユ。

一、酉(〇天保八年紀元二四九七年)ノ六月三日朝、小川町(〇市内神田區)戸田長門守樣裏御門脇御土藏ニ張付之レアリ、早速相取捨ニ相成候由。

近來奸臣權ヲ取リ、下情上ヘ不レ通、中下御旗本御家人及ニ困窮一、中ニテモ米取ノ者十人ノ内八九人ハ、高百俵ニ付、借財百有餘兩ツヽ有レ之、其以下、高ニ准シ同樣、何レモ取續難レ成、尤モ借金等ハ、各心懸次第トハ乍レ申、祖父父代ヨリ引受候借財ニ、次第利加ヘ、其内臨時吉凶入用等ニテ、三季御切米ヲ各已ニテ、來金共札差方ヘ引取、手元エ這入候金子無レ之、種々賴入、又候借返シ等、少々致シ、漸ク取續キ居候。是ヲモ不レ辨勝ニ付、極窮ノ者、色々惡事致シ、是迄御旗本御家人家名斷ニ付、極窮ノ者、色々惡事致シ、是迄御旗本御家人家名斷ニ候。却テ難澁ノ町人共ヘハ、度々御救米錢等、過分御手當モ有レ之候得共、武家困窮ノ者ニハ、少々ノ御趣意モ無レ之、全ク奸臣等ノ所爲ト被レ存候。最早此上ハ、我々取續モ難レ成、不レ遠家名斷絶目前ニ付、同志ノ面々一統申シ合ノ上、札差共、其外有德ノ町人ニ亂妨致シ、窮民ヲ救ヒ、便宜ニ依リ、奸臣ヲ討チ、總テ大坂(〇攝津國)表ノ例(〇大鹽平八郎ノ事ヲ指ス)ニ習ヒ、兎モ角モ可ニ相計一候。同志ノ輩モ有レ之候ハヽ、市中ヘ變事出來次第、其最寄エ早々集會可レ有レ之候。月日

〔附記〕

嘉永四年亥年〇紀元二五一一年。

覇都時代ノ飢饉

此節米價引續高直、其上世上一統風邪流行ニ付、市中其日稼之者へ御救被
下候間、家族三才迄ハ相除、名前年付等入念早々取調、支配限り人別書可差
出旨、御掛り御役人中被仰渡候。全其日稼之者共ニ限り取調可申段、精々被
仰渡候ニ付、別紙廉書之趣得与御支配限り當人共身持之差別精々御取調、
不相當之者ハ書出無之樣、御取計可被成候。右御調行届次第、別紙雛形之通、
半紙竪紙、御差配限り全冊ニ被成、來月十五日迄之内、可成丈御手操被成、拙
者共詰所ゟ御銘々ゟ御差出可被成候。
來月〇嘉永四年(紀元二五一一年)二月。十五日迄ニ、人別書御差出可被成候處、御差配人別少
々之分ハ、取調方も急速出來ハ義ニ付、右樣之分ハ、日限ニ不拘、早々當處へ
御差出可成旨、御役中被仰渡候。此段各樣ゟ、御組合人別少之御同役人得と
御談可被成候。

但、月行事持場所者、最寄御同役ニ而御調御加印御差出可被成候。

亥〇嘉永四年(紀元二五一一年)。正月廿五日　町年寄　番

此度米價高直、幷風邪流行ニ付、三才迄之小兒者相除、十五歳以上之もの六
十歳迄之男へ者白米五升宛、六十一才以上十五才以下之男へ者白米三升

宛、人數ニ應し被下之。

當〇嘉永四年(紀元二五一一年)。二月十五日ゟ同〇嘉永四年(紀元二五一一年)。五月十日迄、

總人數三十八萬千七百四十人。此竈數十一萬千六百三十一口。
大傳馬町壹丁目外千七百七十六ヶ處
外ニ淺草寺地中三十四ヶ院境内町屋
此白米一萬四千二百十五石一斗六升。
人數十三萬八千百四十八人。壹人ニ付五升宛被下候分。
此白米六千九百七石四斗。
人數廿四萬三千五百九十二人。壹人ニ付三升宛被下候分。
此白米七千三百七石七斗六升。

右之通、於町會所御救米被下候處、五月十日〇嘉永四年(紀元二五一一年)。ニ而御渡濟ニ相
成申候。

——藤川寛雜記〇編年史料收。

七月二日〇嘉永六年(紀元二五一三年)。左之書付大小目付へ正弘〇阿部。及若年寄遠藤但
馬守〇胤統。ゟ渡

近年引續米價高直之處、當作方之模樣ニ寄、猶此上米價相進候樣ニ而者下
々難儀可致候間、當年之義、諸家中扶持米丈ハ銘々知行所ゟ相廻ハ樣可被
心得候。尤違作等ニ而廻米差支候場所、或ハ運送手間取ハ場所等者格別、左

安政六年米價騰貴

文久三年物價騰貴

も無之分ハ、江戸ニ而買入ハ義、可成丈勘辨致し可被取計、且餘分ニ相廻し、扶持米程ハ除置、其餘市中へ相拂之義不苦ハ。右之通、萬石以上以下共、領分知行所有之候面々ハ可被相觸候。

——阿部正桓家記〇編年史料收。

安政六年(〇紀元二五一九年)十二月十四日

和泉守殿〇松平乘全。御渡

大目付ハ

諸國酒造之儀、三分一相減、三分二酒造可致旨、天保十二丑年〇紀元二五〇一年。相觸ハ處、當未年〇安政六年(紀元二五一九年)。之儀ハ、關東筋出水等ニ而、米價高直ニ有之、村々及難儀ハ趣ニ相聞ハ間、追而及沙汰ハ迄、關八州酒造人共銘々鑑札高之内、米高相減、酒造可致ハ。尤隱造過造等無之樣、取締方之儀ハ、都而是迄之通相心得、彌嚴重改方可申付ハ條、若隱造過造等いたすにおゐてハ、其ものは勿論、其所之役人迄吟味之上、急度可申付ハ條、心得違無之樣可致ハ。

右之趣、關八州御料私領寺社領共、不洩樣、早々可觸知もの也。

右之通可被相觸ハ。　十二月〇安政六年(紀元二五一九年)。

——幕府沙汰書

此節物價格外之高直ニ相成、小給之者共ハ、別而難義之趣、被爲及聞召ハニ付、莫大之御物入打續ハ折柄ニハ得共、格外之以思召、部屋住勤之外三百石以下之御旗下面々并御家人へ拜借金被仰付、百俵以下之者ハ、夫々御金被下ハ旨、被仰出ハ。右ハ厚御主意ヲ以被仰出ハ事ニ付、一際質素儉約相用ハ樣可致ハ。萬一心得違之者於有之者、急度御沙汰之品も可有之ハ條、其旨可被相心得ハ。　二月〇文久三年(紀元二五二三年)。

右之通、可被相觸ハ。

——官武通紀

慶應二年窮民暴動

慶應二年窮民暴動事蹟

孝明天皇慶應二年丙寅〇紀元二五二六年。五月、江戸物價騰貴シ、窮民暴動ス。九月〇慶應二年(紀元二五二六年)。再ビ騷擾有リ。〇嘉永明治年間錄。增訂武江年表。

慶應二年窮民暴動　元治元年〇紀元二五二四年。頃ヨリ江戸市中ノ物價貴躍シ、慶應元年〇紀元二五二五年。ニ及ビ、町會所ヨリ貧民ヲ賑恤シタルコト、增訂武江年表慶應元年〇紀元二五二五年。閏五月ノ條「去、年〇元治元年(紀元二五二四年)。より米穀・薪炭・酒・味噌・油・絹布の類、其餘諸物の價、次第に登揚し、菜蔬・魚類に至る迄、其價甚貴し。」ト見エ、七月〇慶應元年(紀元二五二五年)。ノ條「米價諸色高直に付、同月〇慶應元年(紀元二五二五年)七月。より町會所に於て、市中の貧民へ御救の米錢を頒ち與らる。」ト有ル如シ。二年〇慶應〇紀元二五二六年。米穀ノ貴踊益甚シキニ及ヒ、遂ニ窮民ノ暴動ヲ見ルニ至ル。

江戸窮民騒動

五月廿八日〇慶應二年(紀元二五二六年)。夜品川宿〇武藏國荏原郡。にて大勢集り、物持居宅多く打毀シ、同〇慶應二年(紀元二五二六年)五月。廿九日夜、芝田町邊〇市内。數十軒打破り、六月二日三日四日〇慶應二年(紀元二五二六年)。頃或ハ四ツ谷邊〇市内。或ハ下町、本所邊〇市内。所々白晝に横行いたし、横濱商ひいたしハ者、又ハ米店其外富有の町家を打毀し、希有なる哉、格別大勢にても無く、兎角子供の多く集り來り、中に頭分とも相見え、十五六歳の男子、屋根上を飛が如く、縦横自在に奔走、頻りに下知を傳へ打毀し、又ハ先へ行、同樣の所業日々夜々流行すと云ども、手を束ねて傍觀するのみにて、制する者ハなし。此頃、江戸尹の門外に張札あり。其文に云、御政事賣切申ハと樂書有之と云ふ。此頃の米相場ハ壹兩に付壹斗四五升位なり。其餘も準之。

江戸ニ於テ窮民騒動

九月十八日〇慶應二年(紀元二五二六年)。より老幼男女窮民大勢一町毎に集り、其町名を記したる紙幟を押立て、町々富有の店先に來り、大道に伏して曰く、米穀ハ不及申、物價高直に付、困窮の私共、今日露命取續兼、無據御大家樣の御助情奉願度旨申演べ、大勢歎き居るさま恰も餓鬼の如し。止むを得ず家毎に米五升一斗、或ハ一俵二俵ッヽ、或は薩摩芋一俵二俵、味噌醬油等施行するもあり、窮民共兼て車を用意し、其施行物を車に積み、紙幟を先に建て、町毎に順行し、土産神の境内抔の地を見立、大釜を懸け、米大豆小豆大根薩摩芋等一所に入れ、粥に炊き立て、一同是を食養し、又翌日前の如く外町々を順行す。實に數百町の窮民、東坊西街の紙幟、南屯北集の困民、哀れ云ふ計りなし。或は五六日七八日にして止む。

——嘉永明治年間錄

近年續て諸物價の騰貴し、今茲〇慶應二年(紀元二五二六年)。は別て米穀不登にして、其價貴踊し、五六月〇慶應二年(紀元二五二六年)。のころよりは、小賣百文に付て一合五勺に換へたり。八九月〇慶應二年(紀元二五二六年)。の頃に至りては、一合一勺位に及べり。如此く登踊して、賤民の困苦いふばかりなし。五月二十八日〇慶應二年(紀元二五二六年)。の夜五時頃、何ものとも知らず、南品川御嶽町〇武藏國荏原郡。稻荷祠の太鼓を取出し、同所本覺寺の境内にいたり打鳴らしければ、何方よりか雜人多く集ひ來り、夫より群行して、南品川馬場町〇武藏國荏原郡。油屋某か宅を破却し、南品川宿北品川歩行新宿東海寺門前〇武藏國荏原郡。の町屋を打毀す事、凡四十軒。即時に散じて行方を知らず。

夫よりして、かゝる狼戻の輩諸方に蜂起して、日夜に群行し、本芝・同田町・金杉町・芝西應寺町・濱松町・中門前〇以上市内芝區。等に及し、六月二日〇慶應二年(紀元二五二六年)。は、新和泉町〇市内。・四谷區〇市内。鮫河橋〇市内四谷區。・麻布本村〇市内。等の町屋を壞てり。又三日〇慶應二年(紀元二五二六年)六月。には、堀留町〇市内。・牛込中里町〇市内。・早稲田町〇市内牛込區。・馬場下町〇市内牛込區。鎌倉横町〇市内。・赤坂田町〇市内。・新町〇市内赤坂區。の邊、四日〇慶應二年(紀元二五二六年)六月。には本所茅場町〇市内。・四谷傳馬町〇市内。五日〇慶應二年(紀元二五二六年)六月。には、本所綠町〇市内。に及へり。この内幼弱の少年も立交りて、飛鳥の如く駈廻りて、ともにこぼちける由なり。天明(〇七年紀元二四四六年)の打こわしは、少年の男子先立したり・奇といふべし。何方より來て何方へ歸るといふ事を知らず、不思議といひあへり。かゝる狼藉に及びしかど、全く飢餓に迫りし事故、六月〇慶應二年(紀元二五二六年)。中には、町會所より貧民御救として、一人分錢壹貫文宛を頒ち與へられ、九月初旬〇慶應二年(紀元二五二六年)。には、百文に付二合五勺の御拂米これあるべしとて、坊間へ張紙を以て徇へられしが、其公驗行渡らず・此米は賤民の内にも、わけて貧窶窮迫の者にわかちて、飢餓を救ふべしとありしが、此撰に洩たるを羨、且憤りて、九月十日〇慶應二年(紀元二五二六年)。の頃よりは、本所大島町〇一部市内。邊の貧民、急卒に大路に輳り、富商の家、又は米屋・味噌屋・炭薪屋等の門邊にイで救施を求む。大釜を押て借受、押借の米を焚て是を饗ふ。是よりや始りけむ、深川猿江〇市内。のあたり、松代町・本所松倉町邊〇市内。其餘追々諸方に屯集し、本所法恩寺〇市内。の境内に集り、卒塔婆を折て薪とし、米を焚て夜を明せり。寺主も始の程は穩に諭し軟言けるが、餘りの放逸に困じ果、されば、とて巨多の人數にして達晨に暨び、捨置べからざれば、止事を得ず、寺社奉行所・町御奉行所へ訴へ申けるにより、人數を向られて、即時に追擺はる。しかれとも猶他所の市店に迫り、武家へも赴きて扶助を募る。本所〇市内。細川家には、最寄の町々へ百金を給ひ、津輕家には表門へ押寄せし族を制せられしかど、更に不肯に依て、空砲を放ちて追退けられたり。十五日〇慶應二年(紀元二五二六年)九月。頃、淺草邊・橋場・今戸〇市内。に及ぼし、淺草寺・辨天山・橋場法源寺・總泉寺〇市内淺草區。に集り、富商の施財を催促す。深川〇市内。靈巖寺へも集りし由なり。十七日〇慶應二年(紀元二五二六年)九月。には、中の郷・南割下水〇市内本所區。下谷坂本〇市内。其外所々に群り、大路に駢闐せり。依て商家は戸扉を鎖して聲をもたてず。十八日〇慶應二年(紀元二五二六年)九月。下谷龍泉寺町〇市内。の族大恩寺に集り、谷中天王寺〇市内。へも群れり。和泉橋・北廣小路・下谷稻荷社内〇市内。へも屯しける。十八日〇慶應二年(紀元二五二六年)九月。は、上野〇市内下谷區。大師の

緣日にて、詣る人もありけるが、異國人此邊を通りかゝりけるを、群集の貧民、大聲を擧て罵詈、礫を打てやまざれバ、異國人恐れて逃延たり。十八日 二〇慶應二年(紀元二五二六年)九月。夜よりは、神田〇市内。町々の賤民も、道路に屯集して、前同樣の所行有。春米屋も怖れて戸を閉、家業を休しかば、諸人彌迷惑せり。〇九月 〇慶應二年(紀元二五二六年)。神田佐久間町〇市内。の河岸へ、貧民御救の假屋を建られて、扶育せられ、又同〇慶應二年(紀元二五二六年)九月。廿一日より、五ヶの寺院に於て焚出しの御救始りしかど、更に間にあはず、未明より其所に集り輿へられたり。五ヶの寺院は、本所廻向院、谷中天王寺、大塚護國寺、澁谷長谷寺、三田功運寺〇市内。等なり。富饒の輩は、此節賤民の狼戻を憤る有ど、暴行を厭ひ、各米錢を贈す事夥し。猿若町〇市内淺草區。三座の芝居興行を停む。遊里に赴くもの更になく、妓家貨食舖等の寂莫たる想像すべし。〇中略。〇同〇慶應二年(紀元二五二六年)六月。七日より、別隊組の輩、日夜巡邏始る、市中に四ヶ所の詰場を設らる。〇中略。〇同〇慶應二年(紀元二五二六年)八月。十九日、英吉利人四人男二人女。王子村〇武藏國北豐島郡。の邊へ遊歷して、谷中の團粉坂〇市内本郷區。を過ける時、烏合の貧民紙幟を立、富家へ至り曝施を乞ふの爲弊衣を着し、あらぬさまして群行しけるを見て笑けるを、濫行不軌の族、これを憤り、衆口等しく罵りて、礫を打しより、次第に人數增て散動し、手々に瓦礫を抛ける。別隊組の士も、これに副て護送せられけれど、多勢に避易して制する事あたはず、馬をはやめて馳られけれど、追々に人數重りあひしを、段々に逃のびて、淺草寺門前〇市内淺草區。より御藏前〇市内淺草區。を經てより、彌混駁し、別隊組の輩は、猿屋町〇市内淺草區。の會所、御藏等へ逃入しかど、屋上より尙石瓦を投ること始に倍して、面部其外へ疵をかふぶり、血に染て終に川中へ踊入り、東岸〇市内本所區。より忍ひ歸られしもありとぞ。又異國の男女、始め車に乘けるが、此騷動により、生る心地なく、車を棄、徒跣にて走り、辛ふじて逃のび、夜に入りて旅館へ歸りけるよし也。

——增訂武江年表

同〇慶應二年丙寅〇紀元二五二六年。五月、米價騰貴、江戸市中貧民群集シ、紙旗ヲ揭ケ、富豪ノ家ニ迫リ、米金ヲ出サシム。其肯セサル者ハ暴行ヲ加フ。九月〇慶應二年(紀元二五二六年)。幕府假屋ヲ神田佐久間町〇市内。ニ設ケ、窮民ヲ救恤シ、又府下五寺本所回向院。中天王寺。音羽護國寺。三田功運寺。澁谷長谷寺。ヲ以テ救助所ニ充テ、米粥ヲ給與ス。

——東京通志

參照シテ以テ當日ノ狀況ヲ想像ス可シ。增訂武江年表ニ據レハ、慶應三年〇紀元二

明治二年飢饉

『明治二年飢饉事蹟』

五二）正月ノ條亦、去年（慶應二年（紀元二五二六年））。冬より、諸物價彌ましに貴し。」ト有リ。

第二節　本記

帝都時代ノ飢饉

明治天皇明治二年己巳（紀元二五二九年。）年稔セズ、物價騰貴シ、東京亦窮乏スル者多シ。八月廿五日甲子（明治二年（紀元二五二九年）八月。）詔シテ救恤スル所有ラシム。（太政官日誌。布令留。芝會社寄民取扱綴込。日本災異誌。）

明治二年飢饉　帝都時代東京ニ飢饉ト稱ス可キ者殆ト有ル無シ、僅ニ明治二年（紀元二五二九年。）度ノ稍飢饉ニ近カリシノミ。是年（明治二年（紀元二五二九年））。奥羽地方ハ飢饉甚シク、仙臺（陸前國。）ノ如キ、餓死者亦寡カラサリシト云フ。

二十五日甲子（明治二年（紀元二五二九年）八月。）

詔書寫

朕登祚以降、海内多難、億兆未タ綏寧セス。加之今歳（明治二年（紀元二五二九年））。淫雨農ヲ害シ、民將ニ生ヲ遂ル所ナカラントス。朕深ク憫惕ス。依而躬節儉スル所有テ、以テ救恤ニ充ントス。主者施行セヨ。

御布告書寫

詔書被仰出候通、兵馬之後、庶民未タ安堵ニ至ラサル折柄、當年（明治二年（紀元二五二九年））。諸道不作、物價日增ニ騰貴、無告之窮民ハ勿論、一同之難澁差迫リ、殊更東京ハ、近來衰微之砌、人口ハ從前之通莫大ニテ、遊民最多ク、漸次產業ニ基クヘキ御施法モ未タ行屆カセラレサル中、今日ノ姿ニ相成、且又京都（山城國。）ニ於テハ即今御留守ト相成、自然職業ヲ失シ、困窮ニ立至リ候者モ不少、全ク時勢之變遷無據次第トハ申ナガラ、必至難澁、彼是以テ深被爲惱宸襟、格別之御節儉被遊、既ニ餔饌供給ヲモ御減少被爲在、窮民御扶助被遊候。就而ハ於諸官モ、官祿之內ヲ以テ、救恤ニ被充候樣願出候段、神妙之儀ニ被思食、當年（明治二年（紀元二五二九年））。之所、夫々減少返上之儀、御許容相成、兩京救荒ニ可宛行旨、御沙汰ニ候事。

但救荒ハ一時之變ニ處スル爲急務事。

八月二十八日丁卯（明治二年（紀元二五二九年））中略。

帝都時代ノ飢饉

米三千石　東京府
米七百石　京都府
右窮民救助トシテ、月々大藏省ヨリ相渡ハ條、施行可ㇾ致事。

——太政官日誌

〔參考〕太政官日誌ニ據レハ、明治元年(〇紀元二五二八年)七月十二日飢饉ノ恐レ有ルコトニ關シ諸府縣ヘノ布告有リ、中「今春(〇明治元年紀元二五二八年)ヨリ霖雨滂沱、水災農民ノ患ヲナシ、氣候不順、現ニ苗蝗ノ害有リ。」ト見ユ。

二年〇明治〇紀元二五二九年。五月三日
府下三田壹丁目ニ救育所ヲ設ケ、窮民ヲ撫育ス。

東京府町觸

今般三田壹丁目ヘ救育所御取建、鰥(ツマナキトシヨリ)寡(ヲツトナキトシヨリ)孤(オヤナキコドモ)獨(トシヨリノヒトリモノ)ノモノハ勿論、其他厄介多ニシテ活計難ニ相立一、飢渴ニ可ㇾ及族ハ、御撫育被ㇾ成候深仁ノ御趣旨ヲ奉戴シ、自今前書之通、無告ノ窮民有ㇾ之ハ、取調ノ上、市中ハ世話掛ノ中年寄、在中ハ大年寄添書ヲ以、救育所ヘ可ニ訴出一事。
右ノ趣、東京市在不ㇾ洩樣、可ニ觸知一モノ也。

二年〇明治〇紀元二五二九年。十月十七日

高輪救育所人員

東京府日誌

一、七百五拾九人。内、男七百三拾四人、女貳拾五人。

二年〇明治〇紀元二五二九年。十月廿二日

麴町救育所人員

東京府日誌

一、千百九拾壹人。内、男六百四人、女五百八拾七人。

二年〇明治〇紀元二五二九年。十月廿五日

三田救育所人員

一、千八百十三人。内、男八百八十二人。女九百六十一人。

——太政類典

申渡

中年寄添年寄共

市中之もの共暮方、人數ニ應し飯米貯置ハ儀者格別、其業體ニ無ㇾ之もの共、米穀多分之俵數竊ニ所持いたしハものも有ㇾ之哉ニ相聞、以之外之事ニハ。乍ㇾ併是迄之心得違相辨、所持之米穀早々穀屋共ハ賣捌ハハヽ、別段吟味之沙汰不ㇾ及ハ間、右之趣支配限身元之ものともハ、不ㇾ洩樣可ニ申通一ハ事。

六月〇明治二年(紀元二五二九年)。

右之通、被仰渡奉畏ル、仍如件。

巳〇明治二年(紀元二五二九年)。六月十七日

島田又左衛門印
組々世話掛
中年寄共

明後廿七日〇明治二年(紀元二五二九年)。ヲ高輪〇市内芝區。御救小屋相開ル間、市中野非人乞食共之内、老幼癈疾不便之もの共取調之儀、非人共計ニ而者調落も可レ有レ之ニ付、右體之もの見當次第、町年寄ヲ最寄非人小屋頭ヲ引渡可レ申、尤非人小屋頭共、持場々々有レ之趣ニハ得共、持場ニ不レ拘、最寄町々ヲ申越次第取調、請取之、御救小屋ヲ指入ル樣、兼而非人小屋頭共ヲ可ニ申聞一旨、彈内記ヲ相達置ル間、其旨可ニ相心得一候。右之趣組々ヲ可ニ申通一。

九月廿五日〇明治二年(紀元二五二九年)。

右之通、被仰渡奉畏ル、仍如件。

九月廿五日〇明治二年(紀元二五二九年)。

村田又夢印
世話掛
中年寄共

當府下之儀者、人煙稠密ニ過キ、銘々之活計も自然と不ニ相付一樣成行、此儘打過ル而も可レ果之期無レ之、隨而窮民御所置ニ付而者、深キ御主意も有レ之ル間、元他築地〇市内。其外ヘ協救社養豚場取建、窮民救育之仕法相試ル儀、差許ル間、有志之者共、協心同力致シ、無產無職之窮民、生產ニ有付、府内富殖之一端ニモ相成ル樣、町役人ニ於テモ倶ニ盡力可レ致候。

一、市中腐敗物タリ共取集、養豚飼料ニ致ル儀ニ付、町裏店住居之者ニ至まて、日々取捨ル腐敗物、又ハ米麥之洗水等取集置ル得ハ、相當之價ヲ遣シ、爲ニ取集一掛之者より談可レ及候。

右之趣、市中不レ洩樣可ニ觸達一もの也。

十二月廿六日〇明治二年(紀元二五二九年)。

東京府

右之通被ニ仰渡一奉畏候。以上。

十二月廿六日〇明治二年(紀元二五二九年)。

村田又夢印
矢部與助印
地方
山口彌右衛門印
世話掛
中年寄共

國之者ニ而、當府下ゟ來住致し居、昨今窮迫之餘り御救育等願出ル類者、成丈ケ其生國ゟ當人幷妻子とも引渡ル儀之處、中ニも右窮民共、復籍を嫌ひ引取人を相願、藩々ゟ引取願出ル向も有レ之趣、右者猥に引取人ゟ相渡ル而者、矢張窮民生産之道不レ相レ立儀ニ付、於レ中添年寄共、篤与此邊勘辨いたすべし。最難レ默止レ情合有レ之、親類身寄之者ニ而引取、向後事實活計可レ相レ立者も、其旨左之通中添年寄共篤与取調、奥書ヲ以、戸籍調所ゟ可レ申レ立事。

巳〇明治二年(紀元二五二九年)。十二月

引取願書奥書案

前書何町誰店誰儀、今般何藩ゟ復籍被レ仰付レ候處、何町誰店誰より、引取度旨申出候間、取調候處、向後活計之道相立可レ申と奉レ存候間、願之通御引渡相成候樣仕度奉レ存候。以上。

月　日

右町中添年寄何之誰

右之通被レ仰渡レ奉レ畏ル。仍如レ件。

巳〇明治二年(紀元二五二九年)。十二月廿七日

星野又右衛門印　長澤次郎太郎印

地方　片岡二左衛門印　丸澤喜三次

——布令留

當區内困窮人扶育方仕樣、見込之通被レ仰付レ奉レ畏、拾五番組同樣、夫々手運罷在ル内、右仕樣不納得之もの有レ之、種々説諭仕ル得共、合點仕兼ル町々六七ヶ町ニ及ひ、何分差向難レ被レ行御座ル故、精々談判可レ仕ル得共、隙取ル而者窮民之迷惑とも相成ル二付、當分之内別紙之通、仕樣相立、一時人心動搖不レ仕樣手配仕、當十二月朔日〇明治二年(紀元二五二九年)。ゟ施行仕ル。就レ夫兼而拜借之御金之儀も、窮民之人數ニ割合受用可レ仕之處、右之仕合ニ付示談之上、拾五番組元〆共八人ゟ爲レ相任レ置申ル。尤仕樣申上ル通相基施行仕ル節者、無レ差支請取ル積ニ御座ル。且又寄持集金高幷出納之譯、追々取調可レ奉レ申上ル間、御聞濟奉レ願上レ度、此段申上ル。已上。

明治二巳年〇紀元二五二九年。十二月廿七日

拾六番組元〆　萬屋長八印　天滿屋吉兵衛印

四方屋伊之助印　山形屋治平印

近江屋藤兵衛印　鈴木屋喜兵衛印

町年寄總代　新七印　同善八印

右組中年寄　浦口清一郎印

右之通、私共區内談判之上、當會社〇芝會社。仕樣通被行ゐ節者、御金相渡ゐ積、示談仕ゐ。仍如ゐ件。

拾五番組元〆總代
大坂屋專助印　肝煎總代
伊勢屋茂兵衛印
右組中年寄
内田勘左衛門印

東京御府

貧民救方組合限町々有志之もの持寄ゐ仕樣、左之通。

一、貧民之内、御救育所入、又者當暮〇明治二年(紀元二五二九年)。こもおよひ候ハヽ、悴兼ゐ程之もの、相糺ゐ上、稼方之目的ニ應じ、錢五貫文ゟ拾貫文を限り、無利足ニ而貸渡、店受人、店差配人、町年寄奥印之證書を取置、右借用中者、他借不〻爲〻致樣世話致し、當人共は勿論、家族之もの迄も、徒ニ其日を不〻打過〻樣、年寄共敎諭を加ゑ、賑給仕法ニ基、手業等爲〻致、無油斷爲〻相稼、家族之稼ニ而返濟相成ゐ樣、厚世話致ゐ得者、返濟も心易、取立之儀者、日々町年寄方ゑ取集、毎月六度ニ持寄、三十日限返濟相成ゐ得者、猶繰返し貸渡ゐ積、此集殘改之上、元〆方ニ而帳合致、別段會社者相建不〻申、當組扱所ニ而兼用仕、此肝煎ゐもの者、區内町年寄一同之掛ニ仕、貧民共在來之借財ゐ、店受人、店差配人ゟ猶豫懸合置、是又妻子之稼ニ而、

追々辨金相成ゐ樣、仕法を相立、區外ゟ越來ゐ共、一ヶ月も打過ゐ而、商ひ仕入ニ差支、願出ゐものゑ者、同樣貸遣、總而取扱日者、一六と極、朝四ツ時ゟ晝九ツ時を限り、當番町年寄兩人つゝ相詰、世話致、出納元〆之儀者、先般被仰付ゐもの、月番を立、金錢取扱、毎月廿六日元〆幷家持共之内、兩三人、立會、出納之口を改め、帳面ゑ相記、右貸渡に證文、其外入費之儀者、町内限ニ取賄、區内扱所入用ゑ者決而相掛ヶ不〻申、當區窮民之内、病者之もの有〻之、活計相立兼、町會所ゑ御救相願ゐ程之もの者、見分之上、相當之手當遣、可〻成丈爲〻取續ゐ積、貸渡置ゐもの之内、欠落其外損失之分者、區内一ヶ町ニ付、一ヶ月金壹歩ツゝ月々積立ゐ得者、二十ヶ町ニ而壹ヶ年金六拾兩ニ相成、此金子を以、前書之損費を補ひ可〻申ゐ。但、積立ゐ金子之儀者、損失も少ク、自然金高ニもおよひゐに付、元〆方ゑ相預ケ、相當之利分爲〻相加ゐ樣、連々打續ゐハヽ、町々ゟ取集ゐ儀者、相止ゐ積ニ打合仕ゐ。

右者有志之輩、赤心之助金を取集、無利息ニ而貸遣ゐ樣仕ゐハヽ、貧民共商ひ元手金ニ無差支も、袖乞ニ出ゐ樣之零落者有〻之間敷、自然永續之道相立、一廉之救助筋ニも、可〻相成義と奉〻存ゐ。

一、金四百四拾貳兩三分貳朱
巳(〇明治二年紀元二五二九年)十二月六日
一、銀百七拾九貫九百七十二文
同(〇明治二年紀元二五二九年十二月)十一日
一、銀四百貳拾六貫八百六十四文
同(〇明治二年紀元二五二九年十二月)十六日
一、銀三百七拾六貫七百八十八文
同(〇明治二年紀元二五二九年十二月)廿一日
一、銭五百八拾三貫三百四十四文

一、金五兩
　金四百四拾七兩三分貳朱。
　銀千五百六拾六貫九百七十六文、
一、銭貳千貳百五貫文
　但、十貫文　五十五人ゟ。　五貫文　三百三十一人。
一、銭千三百貫文
　但、十貫文　九十壹人ゟ。　五貫文　三百三十一人。
　同(〇明治二年紀元二五二九年十二月)六日同斷。
一、銭貳百三拾五貫文
　但、十貫文　三人。　五貫文　四十一人。
　同(明治二年紀元二五二九年十二月)十一日同斷。
一、銭百六拾七貫五百文
　但、七貫五百文　三人。　五貫文　廿九人。
　同(〇明治二年紀元二五二九年十二月)十六日同斷。

　區内寄持之もの共、赤心ニ而差出候分。
　右集金之内ゟ、貧民ゟ貸渡、無利息返濟日掛受取候分。
　右同斷。
　右同斷。
　右同斷。
　區内町々ゟ積立候分。

一、銭四拾七貫五百文
　但、十貫文　壹人。　七貫五百文　壹人。
一、銭百貳拾六貫文
　但、三貫文　四十二人ゟ。
　銭四千八拾壹貫文
　差引　金百九拾五兩。銭拾四貫七百廿八文。

右者、區内貧民ゟ爲基銭、當月(〇明治二年紀元二五二九年)十二月。朔日ゟ無利息貸渡、日掛返濟、并手當ニ遣ゟ分共、出納差引、前書之通、元〆共方ニ而相預り、皆濟之ものゟ者、來ル廿六日(〇明治二年紀元二五二九年)十二月。ゟ猶又無利息貸渡ゟ義ニ御座ゟ。依之此段申上ゟ。已上。

　巳(〇明治二年紀元二五二九年)十二月廿四日　　拾六番組
　　中添年寄共

當區内芝新網町(〇芝新網町。)之義、古來者漁場ニ而、同町(〇芝新網町。)之内、幅拾間長百間之入堀、船繋場所ニ御座ゟ處、中古以來、沿革仕、當時幅七八尺位之下水形而已相殘、兩岸共押埋、左右四五間宛之ナダレ草生地ニ而、土人之物置場等ニ相用來、見苦敷有之ゟニ付、昨辰年(〇明治元年紀元二五二八年。)中、不殘取拂被仰付ゟ後、無用之明地

ニ相成居ㇾ候。然ル處、今般當區內入社人之內、日雇稼其外商內筋不勝手ニ而、商棚ニ鰹兼ㇾ候も數多御座ㇾ候ニ付、紙漉水引炭團職等爲ニ相稼一ㇾ候處、此もの其物干場爲ニ便利一、右明地之場所拜借仕度旨申出ㇾ候。不レ苦義ニ御座ㇾ候ハヽ、右下水左右別紙繪圖面〇略。之場所一圓、當會社〇芝會社。附拜借地ニ被仰付被ニ下置一度、左ㇾ候得者、右地內ニ紙種晒場納屋其外物干等取建、一同之便利、至極宜敷難レ有仕合ニ奉レ存ㇾ候。尤盛隆仕ㇾ候ハヽ、追年相當之御冥加地稅可レ奉ニ上納一奉レ存ㇾ候旨、肝煎共一同奉ニ願上一ㇾ候間、願之通被仰付被ニ下置一度、別紙麁繪圖〇略。相添、此段奉レ伺ㇾ候。以上。

拾五番組中年寄
內田勘左衛門

明治二巳年〇紀元二五二九年。十二月廿二日

私區內芝新網町〇內。〇市內。之內、長百間餘幅拾間之入堀御座ㇾ候處、左右ゟ押埋メ、ナタレ艸生地相成居候ニ付、當會社〇芝會社。附拜借地奉レ願、窮民共紙漉水引炭團等之製所ニ仕、納屋物置等取建申度段、奉ニ願上一ㇾ候處御糺之上、右願之通被仰付、且地稅之義者、當時窮民御救之爲メ、御沙汰無レ之ㇾ候得共、追々成功之上ニ者、相當之上納可レ被仰付旨、被仰渡、難レ有奉レ畏ㇾ候。仍而御請書如レ件。

拾五番組會社肝煎惣代
芝新網町北側町年寄 七兵衛 印

明治二巳年〇紀元二五二九年。十二月廿三日

同所濱松町三丁目同
茂兵衛 印

同所中門前三丁目同
熊右衛門 印

同組中年寄
內田勘左衛門 印

芝會社窮民取扱綴込

亦以テ府內全體ノ窮乏ノ狀態ヲ推スルニ足ル可キ乎。

〔參考〕東京ノ飢饉

天正十八年〇紀元二五〇年。德川氏入國後、明治四十年〇紀元二五六七年。ニ至ル間、東京ノ地ニ起リタル飢饉ノ重ナル者ヲ左ニ示ス。

慶長四年(紀元二二五九年)
元和五年(紀元二二七九年)
寬永十九年(紀元二三〇二年)
延寶三年(紀元二三三五年)
延寶九年(紀元二三四〇年)
天和三年(紀元二三四三年)
元祿十四年(紀元二三六一年)
享保十八年(紀元二三九三年)
天明四年(紀元二四四四年)
天保四年(紀元二四九三年)
慶應二年(紀元二五二六年)
慶長十一年(紀元二二六六年)
寬永十八年(紀元二三〇一年)
寬永二十年(紀元二三〇三年)
天和三年(紀元二三四三年)
正德四年(紀元二三七四年)
寶曆五年(紀元二四一五年)
天明七年(紀元二四四七年)
天保七年(紀元二四九六年)
明治二年(紀元二五二九年)

此内寛永十八年十九年廿年〇紀元二三〇一年—二三〇三年。ハ三年連續シ、延寶八年九年〇紀元二三四〇年—二三四一年。天和二年〇紀元二三四二年。モ之ニ同ジク、元祿十四年〇紀元二三六一年。前ニモ三兩年ノ不作斷續シ、天明四年〇紀元二四四四年。及七年〇天明〇紀元二四四七年。天保四年〇紀元二四九三年。及七年〇天保〇紀元二四九六年。ハ、三年ヲ隔テ、斷續ス。

而シテ此等東京ノ地ノ飢饉ハ、其實地方飢饉ノ結果ニ出デ、自ラ兩樣ノ飢民ヲ見出ス者ノ如シ。東京ノ地ニ米穀ヲ輸入スル各地方ノ凶荒ニ由リ、米穀ノ匱乏、米價ノ騰昂ヲ來シ、以テ市内細民ノ飢餓ヲ致ス者其一也。凶荒地方ヨリ入リ來ル流民ノ飢餓スル者其二也。内前者ガ、遠國ノ凶荒ト雖、延テ市内ノ飢饉ヲ致ス可キハ、言フマデモ無シ。後者ニ在リテモ、流民ノ食ヲ乞フ者、生國傍近ニ於テスルヲ耻ヂ、存外ニ遠キ地方ヨリ到ル可キハ、推察スルニ難カラズ。」

若夫地方凶荒ノ原因ニ至リテハ、曰ク風災、曰ク水災、曰ク旱災、曰ク蝗災、曰ク陰雨災等、其重ナル者ニシテ、就中陰雨ノ爲メ、暑中ノ氣溫ヲ低下シ、日照時ヲ少クシ、比較的緯度高キ東北地方ヨリ關東地方ニ掛ケ、凶荒ヲ來サシムル場合尠シトセズ。農事試驗場特別報告所載農學士安藤廣太郎ノ調査ニ據レバ太陽黑點數ノ最多若クハ之ニ近キ年次ハ、八月ニ於ケル日本海通過ノ低氣壓ヲ頻繁ニシ、太陽黑點數ノ最小若クハ之ニ近キ年次ハ、七八月頃ノ千島列島及北海道沿岸ニ於ケル寒流上ニ局部的高氣壓ヲ發達セシメ、北乃至東風ノ卓越ヲ致シ、涼冷ノ氣流ヲ送リ、以テ東北地方ノ氣溫ヲ低下セシメ、斯ニ稻禾凶作ノ原因ヲ爲スガ如シ。同學士〇安藤廣太郎。ノ調査ニ云フ。

太陽黑點數最少ノ年次若クハ其前後

凶作　五（寶曆五年、天明三年、天保四年、明治三十五年、大正二年）
著シキ不作　四（安永二年、同五年、文化五年、慶應二年）

太陽黑點數最多ノ年次若クハ其前後

凶作　三（天保七年、明治二年、同三十八年）
著シキ不作　五（寛延二年、天保九年、安永七年、文政十年、明治十七年）

太陽ノ黑點ト凶荒ノ關係ニ就キテハ、尚他ニモ各種ノ説有レトモ、煩ハシクレバ略ス。

第四章　疫癘史

第一節　前記

一　關東首府時代ノ疫癘

後陽成天皇天正十八年庚寅〇紀元二五九〇年。德川家康江戸ニ入リ、城池ヲ修營ス。偶眼疾流行シテ、役夫多ク之ヲ患フ。〇參考落穗集。落穗集云フ、

入國最初ノ流行眼疾

入國最初ノ流行眼疾事蹟

入國最初ノ流行眼疾　參考落穗集云フ、本町四丁目南側〇市内日本橋區。三軒相並ひて、同苗益田氏を稱して、五靈膏といふ眼藥を賣る者有り。〇中略。此益田氏、元來相州小田原の驛に今も存在する益田氏が分流にして、共ニ眼科也。天正十八年〇紀元二五九〇年。北條家沒落以來、その分流の者、今の本町四丁目〇市内日本橋區。の地に來りて、纔の小屋をしつらひ、根來矢の打敷壹枚に、彼の五靈膏をならべて賣りゐ。その頃御城最初御普請の人夫、近鄉より集りゐが、時花眼病頻りにはやりて、其人夫悉く眼をわつらひゐによ り、此五靈膏を各もとめ用ひゐ處、何れも忽平癒致しゐにより、萬人不思議の

眼藥とて、買はやらかしゐ。

所謂御城最初御普請ナル者ハ、天正十八年〇紀元二五九〇年。度ノ普請ヲ指ス乎、或ハ文祿〇紀元二二五二年―二二五五年。ノ普請ヲ指ス乎明カナラズ。姑ク記シテ後考ヲ俟ツト云フ。

〔附記〕　古代ノ疫癘

東京ノ地ニ於ケル古代ノ疫癘ハ、今日ヨリシテ之ヲ知ルコト能ハズ。慶雲二年乙巳〇紀元三〇四年。二十國飢疫シ〇續日本紀。三年丙午〇慶雲一三六六年。四年丁未〇紀元一三六七年。天下諸國疫疾シテ百姓多ク死シタル時〇續日本紀。東京ノ地亦疫疾シタルヤ否ヤヲ知ラズ。若夫。

戊寅〇和銅二年〔紀元一三六九年〕正月。下總國疫、給藥療之。――續日本紀

ト傳ヘ、若クハ神龜三年丙寅〇紀元一三八六年。諸國疫疾シ〇類聚國史。天平五年癸酉〇紀元一三九三年。亦同ジク、〇續日本紀。七年乙亥〇天平〇紀元一三九五年。天下豌豆瘡ヲ患ヒテ多ク夭死シ、〇續日本紀。九年丁丑〇天平〇紀元一三九七年。疫瘡大ニ發シテ、天下百姓相繼テ疫死シ、〇續日本紀。天平寶字七年癸卯〇紀元一四二三年。飢疫シテ五畿七道今年ノ田租ヲ免シ、〇續日本紀。寶龜五年甲寅〇紀元一四三四年。天下諸國疫疾シ、〇續日本紀。延曆十年辛未〇紀元一四五一年。天下諸國頻ニ旱疫ニ苦ミ、〇續日本紀。大同三年戊子〇紀元一四六八年。疫癘方ニ熾ニシテ、諸大

關東首府時代ノ疫癘

寺及畿內七道諸國ヲシテ大般若經ヲ奉讀セシメ、〇日本紀。弘仁十四年癸卯〇紀元一四八三年。天下大ニ疫シ、海道尤モ甚シク、〇類聚國史。天長元年甲辰〇紀元一四八四年。五畿七道諸國ノ諸神ニ奉幣シテ疫氣ヲ謝シ、〇類聚國史。九年壬子〇天長〇紀元一四九二年。諸國飢疫シ、〇類聚國史。十年癸丑〇天長〇紀元一四九三年。京師五畿七道諸國並ニ飢疫シ、〇續日本後紀。昌泰元年戊午〇紀元一五五八年。天下疾疫シ、略〇扶桑記。延喜四年甲子〇紀元一五六四年。天下疾疫ノ難ヲ攘フカ爲メ諸社ニ奉幣シ、〇日本紀略。廿年庚辰〇延喜〇紀元一五八〇年。諸國疾疫シ、〇政事要略。天德四年庚申〇紀元一六二〇年。天下疾疫シ、〇日本紀略。應和元年辛酉〇紀元一六二一年。天下疾疫ヲ患フル者多ク、〇應和〇紀元略記。三年癸亥〇紀元一六二三年。天下疱瘡疫有リ、〇扶桑略記。五年甲午〇正曆〇紀元一六五四年。正月ヨリ十二月ニ至リ、天下疫癘最盛ニ、鎭西ヨリ起リテ遍ク七道ニ滿チ、〇日本紀略。長德元年乙未〇紀元一六五五年。天下疫病ニ依リ、大赦、調庸ヲ免シ、〇日本紀略。四年戊戌〇長德〇紀元一六五八年。夏ヨリ冬ニ至リ、天下疫瘡遍ク發シ、〇日本紀略。長保三年辛丑〇紀元一六六一年。去冬二〇長保元年〇紀元一六六〇年。ヨリ此年〇長保三年(紀元一六六一年)。七月ニ至ルマデ、天下疫死大ニ盛ニシテ、道路ノ死骸其數ヲ知ラズ、〇日本紀略。本長和四年乙卯〇紀元一六七五年。天下咳病又疫癘シ、〇日本紀略。治安元年辛酉〇紀元一六八一年。天下疫疾シ、〇日本紀略。萬壽二年乙丑〇紀元一六八五年。夏ヨリ秋ニ及ヒ、天下皰瘡ヲ患ヒ、〇日本紀略。永承七年壬辰〇紀元一七一二年。疫病天下ニ流行シ、〇百練抄。嘉承元年丙戌〇紀元一七六六年。天下疾疫シ、〇永昌記。永久元年癸巳〇紀元一七七三年。赤斑瘡流行シ、〇中右記。長承三年甲寅〇紀元一七九四年。天下萬人咳病、大死ノ輩有リ、〇中右記。保延元年乙卯〇紀元一七九五年。天下疾疫飢餓ノ者、死シテ道路ニ滿チ、〇中右記。康治二年癸亥〇紀元一八〇三年。天下痘瘡シ、〇台記。養和元年辛丑〇紀元一八〇四年。天下飢饉旱魃餓死疫癘シ、〇皇年代記。建久八年丁巳〇紀元一八九七年。天下病惱、一心房病ト號シ、〇一代要記。元仁元年甲申〇紀元一八八四年。天下小兒赤斑瘡多ク、〇百練抄。正元元年己未〇紀元一八九一年。天下疫癘流行シ、家トシテ患ヘサルナク、川原ノ如キハ、死屍路ヲ塞テ、復タ往返ス可カラズ、加フルニ飢饉ヲ以テシテ、諸國民庶多ク死亡シ、〇五代帝王物語。文應元年庚申〇紀元一二六〇年。天下大飢饉疫疾シ、〇武家年代記。建治三年丁丑〇紀元一二七七年。天下病患流布シテ、死人道路ニ滿チ、〇園太曆。弘安六年癸未〇紀元一二八三年。及正應元年戊子〇紀元一二八八年。天下病事ノ爲ニ御祈有リタルコトヲ傳フト雖、〇園太曆、東京ノ地ガ果シテ此中ニ含マルヽヤ否ヤハ同ク明カニセズ。

神田山日輪寺○中略。往古ハ天台宗ニテ、了圓法師といへる僧、今の御城内神田橋御門内芝崎村○市ヵ内。といへる所に草創す。然してより百餘年の後承平○紀元一五九一年―一五九七年。の乱後、所縁の者の所爲にや、平將門か墳墓を築置しを、星移り物換り、墳墓漸荒廢し、一花を供するものなし。因て亡靈祟りをなし、大に村民を惱し、病災夭死枚擧に遑あらず。村民懼るゝと雖、のかるゝに術なく、徃苒として年序を經たり。嘉元年中○紀元一九六三年―一九六五年。遊行二代他阿眞教上人、東國化益の時、村民等亡靈を宥めん事を乞ふ。上人即連阿彌陀佛と法號を授與し、供養回向有しかば、靈魂のたゝり退き、死に向たる者悉く快復す。ト記スニ據レハ東京ノ地ニモ疫疾行ハレタルコト有ルハ勿論也。然リ而シテ應長元年辛亥○紀元一九七一年。京畿諸道疫病流行シ、俗ニ三日病ト稱シ、○圜太暦。正平六年辛卯○紀元二〇一一年。宣旨ヲ五畿七道諸國ニ下シテ、疾疫ノ災ヲ攘ハシメ○圜太暦。十六年辛丑○正平○紀元二〇二一年。天下大疫病シ、○年代記。殘篇。廿年乙巳○正平○紀元二〇二五年。天下大咳病シ、○武家年代記。應永十二年乙酉○紀元二〇六五年。天下一同ハシカ病ニ罹リ、○年代記。殘篇。十五年戊子○應永○紀元二〇〇八年。天下一同三日病シ、○年代記。殘篇。十七年庚寅○應永○紀元二〇〇七年。天下大疫病シテ、人民死亡計數ス可カラス、○武家年代記。卅一年甲辰○應永○紀元二〇八四年。ニモ大疫病大飢饉シ、○年代記。殘篇。正長元年戊申○紀元二〇八八年。飢饉疫病シ、餓死スル者數千万ト云フ數ヲ知ラズ、○神鏡。寬正元年庚辰○紀元二〇〇年。天下飢饉疾病シ、餓死病死人數ヲ知ラズ、人種三分二ヲ失ヒ○立川寺年代記。二年辛巳○寬正○紀元二一〇一年。春夏ノ交、天下飢饉疫癘シ、民間ノ死者道路ニ充チ、寒流ヲ塞ギ、明應元年壬子○紀元二一〇二年。一天疫病以テノ外ナル丁寬正○紀元二一二〇年―二一二三年。度ニ同ジク、○和長記。九年庚申○明應○紀元二一六〇〇年。天下疫癘シ、○和長記。天文九年庚子○紀元二二〇〇年。天下悉ク疾疫シテ、人民多ク死シタル際ノ如キ、○長享年後譏内兵亂記。日本疾病史。亦東京ノ地ニ疾癘ヲ見タルコト無シ。シク明傳有ルコト無シ。

慶長六年辛丑○紀元二二六一年。春、關東疫病流行シ、死者甚ダ多シ。○當代記。德編年集成。

慶長六年疫病

慶長六年疫病事蹟

慶長六年疫病　慶長六年○紀元二二六一年。疫病大ニ關東ニ行ハレ、死者甚タ多カリシコト、當代記ニ見ユ。武德編年集成其他諸書記ス所、亦大略相同シケレハ略ス。逸史「是歲○慶長六年(紀元二二六一年)。山東大疫」下記スモ亦之ヲ指ス也。

此春○慶長六年(紀元二二六一年)。疫病關東ニ流布シテ、人多死ケル。在所ニ依テ、八人九人住ム家ニハ、一人二人殘リケル所モ有トカヤ。信濃國モ同前。――當代記

慶長十二年痘瘡

慶長十二年痘瘡事蹟

此疫恐ラクハ江戸ニモ及ヒタルナラム歟。而シテ其何等ノ病疫ナリシ乎ハ之ヲ傳ヘズト雖、麻疹啓廸「慶長六年(一六〇一)麻疹醫學天正記。」ト記スヲ見レバ、或ハ麻疹ナリシヤモ知ル可カラズ。

二　覇都時代ノ疫癘

後陽成天皇慶長十二年丁未(一六〇七)諸國痘瘡流行ス、江戸亦其中也。(○當代記。清正行狀。)

慶長十二年痘瘡　慶長十二年(一六〇七)。痘瘡諸國ニ流行シタルコトハ、諸書前(慶長十一年(紀元二二六六年)。)ヨリ是歳(慶長十二年(紀元二二六七年)。)正月ニ掛ケ、德川長福丸(○賴宣。)之ヲ駿府(○駿河國。)ニ患ヒ、是歳(慶長十二年(紀元二二六七年)。)十月小笠原秀政夫人德川氏之ヲ飯田(○信濃國。)ニ患ヒテ卒シタルヲ記スヲ見テモ、略之ヲ推ス可シ。相良年代記(○編年史料所收。)慶長十二年(紀元二二六七年)。ホウサウハヤル、惣テ諸病ニ人多死ス。」ト有ルニ據レハ、西國亦同樣ナリシ者ノ如シ。當代記(○慶長日記同。)「當年(慶長十二年(紀元二二六七年)。)京田舍ニ人多病死ス。」ト云フモ、或ハ多ク痘瘡ニ非サル歟。若夫當代記清正行狀ノ類、

正月廿日(○慶長十二年(紀元二二六七年)。)肥後國主加藤主計頭(○清正。)息男(○忠正。)九歳、於江戸死去、疱瘡煩也。此二三ケ年、爲人質在江戸。——當代記

慶長十二年丁未(○紀元二二六七年。)於江府、嫡子主計頭忠正(幼名之助。熊本。)患痘瘡。秀忠君(○德川。)懇惠渥ク、賜諱字、病中醫ヲ賜ル。同月(○慶長十二年(紀元二二六七年)正月。)廿七日忠正(○加藤。)卒ス、時九歳。——清正行狀

ト記スヲ觀レバ、江戸亦之カ流行ヲ見タルヲ知ル可シ。

〔參考〕痘瘡ノ起原ニ關スル日本疾病史ノ說ニ云フ、

我邦ニアリテ、痘瘡ノ始メテ流行セシコトノ史籍ニ見エタルハ(○中略)奈良朝時代、聖武天皇ノ天平年間(○紀元一三八九年—一四〇八年)ナリ。續日本紀ニ記ストコロニ據ルニ、天平七年(○紀元一三九五年)太宰府管內諸國ニ疫瘡大ニ起リ、百姓悉ク臥シタルガ、ソノ夏(○天平七年紀元一三九五年)ヨリ冬(○天平七年紀元一三九五年)ニ及ヒテハ、廣ク天下ニ蔓延シタリ。(○中略)ソノ起原ニツキテハ、本朝世紀ニ『從二蕃船一、疱瘡到二天下一、自是患二其疑者多一』ト云ヒ、大同類聚方(醫療頭配劑ニ引クトコロニ據ルニ)『痘瘡初發、起二自聖武天皇御宇一、鈞者遇二蕃人一、繼二此病一』ト云ヒ、共ニ外邦ノ人ヨリコレヲ我邦ニ傳ヘタリトセルモ、ソノ外邦ノ人ノ何國ノ人ナルヤヲ明記セス。然ルニ續古事談ニハ、『隨ト云フ病、新羅國ヨリ起リタリ。筑紫ノ人、鷁艧ヲ飼ケル船離レテ彼國ニ著テ、其人ウツリヤミ來リケルトソ』ト云ヒ、又蓋嚢鈔ニモ、『此病、新

羅國ヨリ來タレリ。其始チ云ハヾ、筑紫ノ人、魚賣ケル船、難風ニ會テ、彼國ニ著キケリ、其人ウツリ病ミテ來タレリ」トアリテ、共ニ新羅ヨリ筑紫ニコノ病症チウツシ來タリタリトセリ。當時、我カ西陲ノ地方ト朝鮮トノ交通ノ太タ盛ナリシコトヨリ推測スレハ、續古事談等ノ說ハ、事實ニ近キモノニシテ、痘瘡ハ我カ奈良朝時代、朝鮮及ヒ朝鮮チ介シテ、支那トノ交通太タ盛ナリシ時代ニ彼邦ヨリ傳ハレルモノナルベシ。

天平年間（〇紀元一三八九年―一四〇八年）ノ痘瘡ノ流行チモツテ、ソノ第一次トスルハ、明カニ史上ニ記載セラレタルモノニシテ、コノ以前ニ斷シテ痘瘡ノ流行ナシトハ言フベカラズ。（〇中略）欽明天皇ノ十三年（〇紀元一二一二年）ニ疫病ノ流行アリ、コノ時佛教初メテ渡來シ、蘇我稻目等、寺チ立テヽ之チ禮拜セシカバ、時ノ人、疫病ノ起ルハ、稻目（〇蘇我）カ蕃神チ奉スルニ因リテ、國神ノ怒チ致セシモノナリトセリ。後ニ至リテハ日本紀略一條天皇ノ長德四年（〇紀元一六五八年）ノ紀事ニ『天下衆庶、煩ニ疱瘡（世號ニ之稻目瘡、又號ニ赤疱瘡（アカモガサ）、無ク免ニ此病ニ之者ト云々』トアルニヨリ、池田霧溪ハ、稻目瘡ハ疱瘡ナルヘシトナシ、從テ欽明天皇十三年（〇紀元一二一二年）ノ疫病ハ、痘瘡ナルヘシト推定セリ。シカレトモ、本居宣長屋代弘賢ハ、ソノ赤疱瘡トアルニ依リテ、痘瘡ニハアラズ、麻疹ナルヘシトセリ。敏達天皇十四年（〇紀元一二四五年）ノ疫病ハ、身體ニ瘡チ發シ、且ツ熱チ伴ナヘルモノナリシガ、コノ疫瘡ハ、痘瘡ナリシナラントノ說アリ。（〇下略）。

慶長十五年疫瘟

十五年庚戌（〇慶長一五年。紀元二二七〇年。）夏、疫行ハレ死者多シ。（〇續談海後記。台德院殿御實紀。）

慶長十五年疫瘟事蹟

慶長十五年疫瘟　ハ、

六月（〇慶長十五年。紀元二二七〇年。）大、朔日己戌、二日、土用ニ入。去春ヨリ今疫癘不レ絕、人多死。（續談海後記）

台德院殿御實紀當代記ヲ引テ記ス所之ニ同シ。亦江戸ニ於ケル出來事歟。

元和二年麻疹

元和二年麻疹　ハ、

十月（〇元和二年。紀元二二七六年。）麻疹流行。（武江年表）

元和二丙辰（〇紀元二二七六年。）流行。天正十五年（〇紀元二四七年。）ヨリ三十年目也。（麻疹年代記）

元和五年痘瘡

元和五年痘瘡事蹟

五年己未（〇元和〇紀元二二七九年。）痘瘡流行シ、死者夥シ。（〇元和日記。元寛日記。）

元和五年痘瘡　ハ、左ノ如シ。

五月三日（〇元和五年（紀元二二七九年）。）ヨリ至ニ七月一（〇元和五年（紀元二二七九年）。）大旱魃而不レ降ニ一滴一。（〇中略。）又不時雜花流於（〇「花流於」元寛日記、「尊卑」ニ作ル。）疱瘡疫疾、人民牛馬死事夥シ。

――元和日記（〇元寛日記同。）

寛永八年痘瘡疥癬

寛永八年痘瘡疥癬事蹟

明正天皇寛永八年辛未（二〇紀元二九一年）。二亘リ、疥癬流行シ、痘瘡亦行ハル。（〇上杉年譜。細川家記。續史愚抄。武江年表。）ヨリ是歳（〇寛永八年（紀元二九一年）。）前年（〇寛永七年（紀元二九〇年）。）

寛永八年痘瘡疥癬　寛永八年（〇紀元二九一年。）江戸ニ痘疹ノ流行シタルコトハ、上杉年譜細川家記左ノ如ク記スヲ見テ、之ヲ推ス可シ。

同（〇寛永八年（紀元二九一年）十一月。）二十九日、今般德姫君（〇上杉定勝女。）疱瘡ニ罹ラセ玉フニ依テ、米府（〇羽前國。）ノ諸士、飛札ヲ以テ御容體ヲ伺フ。

同（〇寛永八年（紀元二九一年）十二月。）六日、德姫君（〇上杉定勝女。）疱瘡御收靨、今日（〇寛永八年（紀元二九一年）十二月六日。）酒湯ヲ浴シ玉フニ付、御賀儀ノ享燕アリ。

同（〇寛永八年（紀元二九一年）十二月。）二十一日、公（〇上杉定勝。）ノ御内政（〇鍋島氏。）疱瘡ニ罹リ玉フニ付、鍋島御一統、其外醫師中、訪尋アリ。——上杉年譜

十二月六日（〇寛永八年（紀元二九一年）。）大坂（〇攝津國。）御著岸、（〇中略。）廿日廿二日（〇寛永八年（紀元二九一年）十二月。）之御書、

一、御姫疱瘡めされ候由聞及候て、先日以書狀申候事。

——細川家記（〇愚興譜。）

附記　寛永十九年疫癘

疥癬ノ流行ハ、

去（〇寛永七年（紀元二九〇年）。）今年（〇寛永八年（紀元二九一年）。）天下病痒瘡名曰肥前瘡。（〇享年記。）——續史愚抄

去年（〇寛永七年（紀元二九〇年）。）より今年（〇寛永八年（紀元二九一年）。）に至、六十州、皮癬瘡を病む者多し。——武江年表

〔參考〕談海云フ、

寛永年中（〇紀元二八四年―二三〇三年。）に人の身に小瘡出けるを、其瘡の名を誰付るとはなけれ共、肥前瘡と云けり。其後其瘡之平癒して又再發するをは、瘡と云事を略して、後には世人肥前か起りたりと計云ひければ、其比寛永十四年（〇紀元二二九七年。）九月肥前國天草島原に邪宗一揆を起しけり。又其後はころせんよこさんせうといへは、毎年飢饉也。

〔附記〕分類本朝年代記寛永十九年（〇紀元二三〇二年。）「諸國疫疾流行、人多死」ト爲ス。恰モ大飢饉ノ歳ニシテ、飢饉ハ概シテ疾疫ヲ伴フヲ常トス。江戸亦疾疫シタルヤ否ヤハ、明傳ヲ得ズ。

慶安二年痲疹

後光明天皇慶安二年己丑（〇紀元二三〇九年。）三月、江戸痲疹流行ス。（〇武江年表。痲疹年

代記。

慶安二年麻疹事蹟

慶安二年麻疹　ハ、

三月〇慶安二年(紀元二三〇九年)。麻疹流行。

慶安二己丑〇紀元二三〇九年。流行。元和二年〇紀元二七六年。ヨリ三十四年也。

——麻疹年代記

——武江年表

承應二年瘟疫水痘

承應二年瘟疫　ハ、藤堂家譜ニ、

七月〇承應二年(紀元二三一三年)。瘟疫大行、我〇藤堂。邸中、病者四百二十八人。高次〇藤堂。命二眞光寺一祈レ禱之。又發二內儲金一、命二醫員一、買レ藥療二貧者一。以レ故死者不レ過二十六人一。

承應二年瘟疫事蹟

承應二年水痘　ハ、曾我日記ニ、

八月晦日〇承應二年(紀元二三一三年)。やぶいも仕いの、自今以後、無二遠慮一、本服次第可二罷出一いと、松平和泉守〇乘壽。被二仰出一い。

承應二年水痘事蹟

三年甲午〇承應〇紀元二三一四年。十一月、痘瘡行ハレ、四年乙未〇承應〇四月二十九日改元、明曆元年(紀元

承應三四年痘瘡水痘事蹟

二三一五年)。春ニ及ブ。同時ニ水痘ヲ患フル者有リ。〇天享吾妻鑑。

承應三四年痘瘡水痘　天享吾妻鑑ヲ左ニ抄ス。

廿一日〇承應三年(紀元二三一四年)十一月。二尾張中納言殿〇光友。十八日〇承應三年(紀元二三一四年)十一月。ヨリ熱指、疱瘡ニ相極由。

廿九日〇承應三年(紀元二三一四年)十一月。二增山彈正〇正利。室、廿七日〇承應三年(紀元二三一四年)十一月。ヨリ疱瘡相煩。

十五日〇承應三年(紀元二三一四年)十二月。二小倉忠右衛門娘、疱瘡相煩。

十四日〇承應四年(紀元二三一五年)正月。酒井修理大夫〇忠直。息千熊、〇忠隆。疱瘡之由。

十七日〇承應四年(紀元二三一五年)正月。藤堂和泉守〇高久。松平伊豫守阿部播磨守〇正能。三人疱瘡、立花左近〇忠茂。娘於熊モ疱瘡ノ由。

廿四日〇承應四年(紀元二三一五年)正月。阿部播磨守〇正能。內室、疱瘡ノ內ニ平產。松平伊豆守〇信綱。息女疱瘡。

天和元年痘瘡

天和元年辛酉〇延寶九年九月廿九日改元〇紀元二三四一年。江戶痘瘡流行ス。〇常憲院殿御實紀。大成令。

十二日〇承應四年(紀元二三一五年)三月。土屋兵部〇元直。娘、疱瘡ニテ死。

十八日〇承應四年(紀元二三一五年)三月。日光御門跡〇守澄法親王。ヤブイモ被レ成、ウミニ掛りい由。

天和元年痘瘡　常憲院殿御實紀ニ據レバ、

四日〇(天和元年(紀元二三四一年)二月〇中略。)西城勤仕の輩に令せらるゝは、痘疹やめるもの、七十五日過ば出でつとむべし、水痘は三十五日たるへし、同居の親戚になやむものありて看侍せば第三番湯の後出べし、棟へだてたるかたに住居するか、看侍せざるは、遠慮に及はず、出仕せば、見參を憚るに及ばずとなり。

ト有リ。前年〇(延寶八年(紀元二三四〇年)。)十一月晦日ノ令ヲ申明シタル者ナレバ、是時痘瘡ノ流行ヲ見タルカ爲メ、此事有リタルヲ推ス可シ。前年〇(延寶八年(紀元二三四〇年)。)ノ令ハ、

延寶八申年〇(紀元二三四〇年。)十一月晦日

疱瘡痲疹水痘遠慮ノ事

疱瘡

一、病人者見ゐ日より三十五日過ゐ而、罷出、御目見仕ゐ。

一、看病人者、三番湯掛罷出、御目見仕ゐ。病人果ゐ共、看病人忌明ゐ而罷出、御目見仕ゐ。

疹

一、病人者、三番湯掛罷出、御目見仕ゐ。

一、看病人同斷。

一、病人果ゐ時者、疱瘡同斷。

水痘

一、疹ト同斷。

右者御側之面々計、外樣ノ輩者、御構無之ゐ。以上。

十一月晦日〇(延寶八年(紀元二三四〇年)。)

大成令

ト傳フル者是也。三貨圖彙、昨申年〇(延寶八年(紀元二三四〇年)。)凶作ニシテ、今年〇(天和元年(紀元二三四一年)。)米穀乏シ。〇中略。右不熟ニ付テハ、當年〇(天和元年(紀元二三四一年)。)諸人疫死多シ。」ト記ス者、痘瘡ヲ指ス乎、他ノ疫疾ヲ指ス乎明カナラズ。基熙公記是年〇(天和元年(紀元二三四一年)。)十二月卅日ノ記事中「凡當年〇(天和元年(紀元二三四一年)。)饑饉疫癘流行、冬暖如春」ト見エ、分類本朝年代記天和元年〇(天和元年(紀元二三四一年)。)疫癘發、諸國人多死、踰年不止」ト有ル者、同ク不明也。續皇年代略記ハ、天和二年〇(紀元二三四二年。)ノ條、「痘瘡流行。」ト記ス。

靈元天皇貞享元年甲子　〇(紀元二三四四年。)四五月頃、疫疾長崎〇(肥前國。)ニ初マリ、九州・中國・堺〇(和泉國。)・大坂〇(攝津國。)・京都〇(山城國。)・近江・美濃・伊勢・名古屋〇(尾

貞享元年疫疾事蹟

張○國。三河等ニ蔓延シ、江戸ニ及ビ、殆ト染マサル者稀也。○鹽尻。

貞享元年疫疾　鹽尻云フ、

貞享元甲子○紀元二三四四年。の六月、霾蒙して、日月光なかりしが、四五月○貞享元年（紀元二三四四年）。の比、長崎港疫疾大に流行して、比屋病牀に臥し、死に至るもの七千餘に及びし。六月（○貞享元年紀元二三四四年）官に請て、救金を賜はりし。九州中國の方も、亦疫氣一時に行はれ、彼是に死するもの甚多しと聞ゆ。六七月○貞享元年（紀元二三四四年）。難波○攝津國。京師○山城國。にて、及び、染疫の家々、苦しみ愁ふ。泉南尤も甚しく、堺○和泉國。の商家、死亡數千人なりし。京○山城國。にては、組を定め人形を作り、夜に入り、數十人金鼓を鳴らし、疫を送る喧ひすしく、前代未聞のすかたなりし。關東も同じさまにて、我府下○尾張國名古屋。中元の前後、病に臥し、醫師藥匙をさしをく時なかりしされとも五三日にて頓て本服し、死する者は聞え侍らず。勢江濃三の諸州、東都も同じ疫に染まさるはなし。古に云ふ三日疫病とは、かゝる類ひにや。

元禄四年麻疹

東山天皇元禄四年辛未○紀元二三五一年。**四月、江戸麻疹流行ス。**○歴年代記。國字醫叢。

元禄四年麻疹事蹟

元禄四年麻疹　ハ、

四月○元禄四年（紀元二三五一年）。麻疹流行。

元禄三庚午○紀元二三五〇年。流行。慶安二○紀元二三〇九年。ヨリ四十二年目ナリ。——武年江表○歴年雑志同。

元禄四辛未○紀元二三五一年。二年相續流行ス。——麻疹年代記

五月廿三日○元禄四年（紀元二三五一年）。ノ永貞卿記、六月十三日七月八日○元禄四年（紀元二三五一年）。ノ基熙公記、六月廿九日、閏八月廿一日、十二月九日○元禄四年（紀元二三五一年）。ノ北小路俊光日記等、皆麻疹ノ記事ヲ見レバ、流行京師○山城國。ニモ及ビタルヲ知ル可シ。而シテ國字醫叢ニハ「元禄庚午ノ歳○三年（紀元二三五〇年）。麻疹流行シテ男女老少此病ニ染スト云事ナシ。麻疹ノ餘熱ニテ、眼ヲ患ル者多シ。沖和養胃助陽和血湯ニテ、血熱ヲ解シ愈ス。」ト有リ。

元禄十二年古呂利

十二年己卯○元禄○紀元二三五九年。**江戸古呂利病流行ス。**○元正間記。古呂利考。

元禄十二年古呂利事蹟

元禄十二年古呂利病　ハ、左ノ如シ。

元正間記云、元禄十二年○紀元二三五九年。の頃、江戸にて古呂利と云病はやり、今月流行す、早く南天の實と梅干を煎して呑は、其病を受けず、左もなければ、そろりと煩ひて、古呂利と死すとて、江戸中南天の實と梅干を煎して飲しと云。此事

覇都時代ノ疫癘

元祿十三年風邪
元祿十三年風邪事蹟

申出せしは、神田須田町〇市内。の八百屋惣左衛門と云者、去年〇元祿十一年(紀元二三五八年)。大坂津國。より、多く梅干を仕込置し處、今年〇元祿十二年(紀元二三五九年)。上方の梅干きれて、一向に下らず。これに依て、我梅干を高直にして賣らんとて、かゝることを言出しけるに、遂に官に聞へて八丈島へ流されしと云。

——古呂利考

寶永四年咳嗽
寶永四年咳嗽事蹟

其果シテ虎列剌病ナリシヤ否ヤハ、今明カナラサル也。

十三年庚辰〇元祿二三六〇紀元。**風邪流行ス。**〇續談海。

元祿十三年風邪　續談海云フ、

一、三月〇元祿十三年(紀元二三六〇年)。の比、風邪病殊之外時行し、上下諸人相煩ふに付、

水戸中納言〇光圀。御詠

風いかん本來空に吹もらせ、人にあたりて何のゑきれい。

私に曰、右之詠、不ㇾ聽事なるべし。

寶永四年丁亥〇紀元二三六七年。**十二月、江戸咳嗽流行ス。**〇折焚柴の記。元祿寶永珍話。

寶永四年咳嗽　折焚柴の記其他ニ、左ノ如ク見ユ。

十二月〇寶永四年(紀元二三六七年)。此程世の人咳嗽うれへずと云ふことあらず。

寶永五六年麻疹痘瘡
寶永五六年麻疹痘瘡事蹟

世人此頃〇寶永四年(紀元二三六七年)十二月。ニ咳嗽を憂ふ。

——折焚柴の記

——元祿寶永珍話

寶永五年戊子〇紀元二三六八年。**冬、江戸麻疹痘流行シ、六年己丑**〇寶永二三六九年。**晩春ニ至ル**〇寶永遺錄。大成令。折焚柴の記。文露叢。牛山活套。政鄰記。中村雜記。續談海。八朝記聞。年代略記。武江年表。麻疹年代記。

寶永五六年麻疹痘瘡　寶永遺錄文露叢其他ニ見ユ。左ニ其中ノ二三ヲ抄ス。

寶永五子年〇紀元二三六八年。十二月九日大納言樣〇德川家宣。御疹被ㇾ遊ㇾ付、

一、西丸ゟ御機嫌伺明十日　三〇寶永五年(紀元二三六八年)十二月。御三家始惣出仕之事。

一、御本丸ゟ者不ㇾ及ㇾ登城、御樣體御輕恐悦之旨ニ而、御本丸老中月番へ可ㇾ被ㇾ相越ㇾ事。

一、病氣幼少之面々、御本丸西丸老中月番ゟ、使者可ㇾ被ㇾ差越ㇾ事。

一、在國在所之面々ゟハ、使者可ㇾ被ㇾ差越ㇾ事。

一、在江戸隱居之面々ゟハ、御本丸西丸老中月番ゟ、使者可ㇾ被ㇾ差越ㇾ事。

一、父子在所之面々、隱居よりハ家督よりの使者可ㇾ被ㇾ申越ㇾ隱居斗在所之面々ハ、拾萬石以上之隱居より使者、其以下ハ飛札可ㇾ被ㇾ差越ㇾ事。

一、明十日　三〇寶永五年(紀元二三六八年)十二月。より御酒湯被ㇾ爲ㇾ召ㇾ迄ハ、毎日西丸老中月番ま

て、使者可差越ハ。

一、詰衆斗西丸仕廻、御本丸ハ可罷出事。

右之通可被相觸ハ。以上。　十二月九日（○寶永五年（紀元二三六八年））。　——大成令

六日（○寶永六年（紀元二三六九年）正月。○中略。）

尾張中納言殿使者　石川靱負
水戸中納言殿使者　山野邊主水正
紀伊中納言殿使者　水野安房守
水戸中將殿使者　小野覺右衛門

右者御疹（○德川綱吉。）被遊ハニ付、爲伺御機嫌、被差上之、於躑躅之間、謁加賀守。（○前田綱紀。）○七日・九日（○寶永六年紀元二三六九年正月）亦同樣ノ使者ヲ出ス。

九日（○寶永六年（紀元二三六九年）正月。○中略。）

三種。
二荷。
同斷。
同斷。
二種。
壹荷。

尾張中納言殿ゟ　阿部縫殿
水戸中納言殿ゟ　山野邊主水正
紀伊中納言殿ゟ　水野安房守
水戸中將殿ゟ　中山民部

右者、今日（○寶永六年（紀元二三六九年）正月九日。）御酒湯被爲召ハニ付、爲御祝義、被差上之、使者於躑躅之間、謁加賀守。（○前田綱紀。）

御檜重。
是者御疹窺御機嫌。
二種貳千疋。
二種貳千疋

松平加賀守使者　澤田源太夫
同人使者　菊地甚十郎
同（○松平）若狹守使者　脇田又八

右者、御酒湯之御祝義被差上之、於躑躅之間、三宅備前守（○康雄。）謁之。　——寶永遺錄

九日（○寶永六年（紀元二三六九年）正月。）

公方樣（○德川綱吉。）痘疹之酒湯召候爲御祝、出仕有之、例式之御誕生御祝之上ニ、酒湯爲御祝、赤强飯吸物御酒被下之。

十日（○寶永六年（紀元二三六九年）正月。）

今朝五ツ時前、公方樣（○德川綱吉。）御氣分重りハニ付、大納言樣（○德川家宣。）被爲入、即刻還御、此節薨去被遊ハ由。同日（○寶永六年（紀元二三六九年）正月十日。）八ツ時、於御黑書院老中被申渡。　——寶永日記

正月廿一日（○寶永六年（紀元二三六九年）。）御臺樣（○鷹司氏。）御不例之處、昨日（○寶永六年（○紀元二三六九年）正月廿日。）ヨリ御麻疹御見被成ハ由。　——御日記

去年（○寶永五年（紀元二三六八年）。）の冬より、痘瘡此所彼所に行はれて、大喪の御事共、此事によりしほどなれは、小兒の事はいふに及ばず、老たるも、わかきも、此の事のために、死をまぬかるゝものすくなし。されは此年（○寶永六年（紀元二三六九年）。）の五月高き所に上りて、家々の菖蒲旗を見るに、二三町の間に、わづかに並へたてし所は一二所ならではなかりし事なりき。しかるに我（○新井白石。）一男二女、此病をうれへて、おの〳〵險症あらはれて、治すべくもあらず、とかくせしほどに、みな〳〵つゝがなくして事たひらぎぬ。此事天より祐け給ひしに似たる事ありきと、ある醫師のいひき。大赦行はるゝ由、告來りし事は、長女此事をわづらひ出せし時にあたりたりき。しかしながら、これ雷雨解散の應によれるにやさらばありがたき國恩によれるなるべし。

——折焚柴の記

寶永戊子（○五年（紀元二三六八年）。）ノ秋ヨリ冬ニ至リ、明ル己丑（○寶永六年（紀元二三六九年）。）ノ春マデ、日本六十餘州ヲシナメテ痲疹流行シ、男女老少ヲ不問、一般ノ疫痲也。貴トナク賤トナク、此患ニテ死スル者多シ。

——牛山活套

一、今年（○寶永五年（紀元二三六八年）。）初秋以來、諸州痲疹流行、別而東都病人夥し。疱瘡病人も多し。

——政鄰記

當年（○寶永五年（紀元二三六八年）。）江戸痲疹發行、西國モ然リ。前方病タル人モ今度ハ不逃云々。

——中村雜記

此外續談海ハ「公方樣（○綱吉。）御痲疹」「御臺樣（○綱吉夫人鷹司氏。）御疱瘡」ト記シ、八朝記聞ハ、「五月（○寶永五年（紀元二三六八年）五月。）疹大行、至レ冬（○寶永五年（紀元二三六八年）。）自二是月一（○寶永五年（紀元二三六八年）。）年代記ハ「寶永五戊子（○紀元三六八年。）流行。元祿四（○紀元二三五一年。）ヨリ十八年目也。自レ秋至レ冬。」ト云ヒ、年代略記ハ、八月（○寶永五年（紀元二三六八年）。）ノ條「頃日、世間疫病疱瘡及痢流布、所々送二疫神一。」ト爲シ、武江年表（○寶永五年（紀元二三六八年）。）ヨリ痲疹流行。」ト有リ。

〔參考〕江戸塵拾ニ、

駒込（○市内本郷區）富士權現の祭禮、六月朔日、參藁にて蛇を作て商ふ事、寶永（○紀元二三六四年―二三七〇年）の頃百性喜八と云者、不計思ひ付、是を作りて祭禮の日市に賣るに、珍敷細工なりとて、諸人求レ之。于レ時其年七月頃、江戸中に疫癘流行する事家々也。然るに、此富士の蛇を持ちたる家には、一軒も疫癘なし。是よりして富士祭の參藁蛇はやり出て、今此所の名物となれり。

〔附記〕續皇年代略記寶永七年（○紀元二三七〇年。）ノ條、記シテ「痘瘡流行、小兒死者十八九。」ト有リ。文昭院殿御實紀寶永七年（○紀元二三七〇年。）二月十八日ノ條、「左大將痘瘡結痂を賀して、綿百把、二種一荷、相國幷に攝政へ二種一荷づゝつかはさる。」ト云

覇都時代ノ疫癘

フニ據レハ、京都〇山城國。ニ痘瘡流行ヲ見ツヽ、有ルハ明カナリト雖、江戸亦然ルヤ否ヤハ不明也、大成令左ノ如ク載スル者、或ハ痘瘡流行ノ爲メ乎、或ハ將軍代替ノ初ニ於ケルノ令乎、亦明カナラズ。

寶永七寅年〇紀元二三七〇年。正月十七日

疱瘡麻疹

右相煩ハ者、御側向幷奥向、其外御廣敷向ゟ相詰ハ面々、七十五日過、罷出可ニ相勤一ハ。右看病人者、病人三番湯掛ハ後、罷出可ニ相勤一ハ。

水痘

右相煩ハ者、御側向幷奥向、其外御廣敷向ゟ相詰ハ面々、三番湯掛ハ後罷出、可ニ相勤一ハ。

一、疱瘡麻疹水痘病人有之ハ同屋敷之内ニ而、相煩ハ共、居處を隔ハ而、病人一切見不ニ申ハヽヽ、差控ニ不一及ハ事。

一、右相煩ハ面々ゟ、献上物仕ハ義、三番湯懸ハ以後者、不ニ苦ハ一事。

一、若君樣〇徳川家繼。方ゟ相勤ハ御醫師、疱瘡麻疹水痘相煩ハ者方へ見廻ハ義、可レ爲ニ無用一ハ事。

右之外、表向者、子〇寶永五年(紀元二三六八年)。八月極りハ書付之通、可レ被ニ相心得一ハ。已上。

寶永七寅年〇紀元二三七〇年。正月十八日

疱瘡麻疹

右相煩ハもの、三番湯掛りハヽヽ、罷出御目見仕、相勤不ニ苦ハ一。看病人ハ行水ニも不ニ及ハ一。

水痘

右煩ハ者、一番湯懸ハヽヽ、罷出御目見仕、相勤不ニ苦ハ一。尤看病人ハ、行水ニ不ニ及ハ一。

一、疱瘡麻疹水痘相煩ハ面々ゟ献上物仕ハ義、三番湯掛ハ以後ハ、不ニ苦ハ一。

右表向此通可ニ相心得一ハ。以上。

正月〇寶永七年(紀元二三七〇年)。

中御門天皇正德四年甲午〇紀元二三七四年。風邪長崎〇肥前國。ニ起リ、流行シテ大坂〇攝津國。京都〇山城國。ヨリ江戸ニ及ブ。〇月堂見聞集。

正德四年風邪　月堂見聞集ニ左ノ如ク見ユ。

六月上旬〇正德四年(紀元二三七四年)。の頃ゟ、長崎〇肥前國。殊外風邪はやり、凡そ一國に男女七八萬餘有之ハ内ニ萬人餘病死。此の邪氣後に江戸・大坂〇攝津國。京都〇山城國。近在

夥敷病付、家々此の風邪に惱ざる者なし。然共四五日程づゝ藥を復し本復す。病死に至る程の事なし。

正德五年痘瘡

正德五年痘瘡事蹟

五年乙未〇正德〇紀元二三七五年。江戸痘瘡流行ス。〇鹽尻。

正德五年痘瘡　鹽尻ニ、

今歲〇正德五年(紀元二三七五年)。春より夏に至り、疱瘡大に流行し、貴き賤しき男女のかぎり、多く亡ひ失ぬるを、なにくれと數ふるも盡せず。凡そ府下〇尾張國名護屋。及熱田〇尾張國。なんと近境の民にいたりて、千を以て指を折侍るとなん。京師〇山城國。難波〇攝津國。東都も、亦同じさまに聞え侍る。東へ文やるとて申贈りし。

風さそふけぶりよ露よかそふれば、ちゝにくたくる衣手のしらたま。

正德六年疫病

正德六年疫病事蹟

六年丙申〇六月廿二日改元、享保元年(紀元二三七六年)。疫病大流行、死者八萬ヲ出シ、棺槨給セス、火葬亦及フ能ハズ、幕府命シテ之ヲ築地〇市內京橋區。品川〇武藏國荏原郡。海中ニ水葬セシムト云フ。〇兼山麗澤秘策。閑窓瑣談。古呂利考。

正德六年疫病　劇烈ナル流行ナリシ者ノ如ク、相傳ヘテ、

一、御當地〇江戸。町方疫病被行いて、凡八萬人程死人御座い由申い。頃日に到りいては、棺もきれ申い故、輕き者は、大方樽に入いて葬申い由申い。火葬に仕い處も殊の外せき申いに付、俄に可遣と申いても不罷成、帳に付置、何れの釜にても十九番廿番過不申いへば成不申抔と申由に御座い。やき仕廻いても、骨を拾ひ仕廻いて、又葬申い故、はかどり不申い。依之身代も宜いものは、新釜を爲拵いへば、殊外過分の金子費用懸り申い。土葬可仕と致いへば、寺々寺內すきとふさがり、古き墓は不殘切崩い樣に仕いへ共、夫とても尺地も無之樣罷成い故、火葬にも土葬にも俄には難成、其分に難指置御座いニ付、頃日は輕き者は、大方薦に包いて、築地、品川の海へ水葬に仕い由。箇樣の事は何とぞ上より被仰付い樣可有之と奉存い。當主御賢明の沙汰は御座いへども、中々箇樣の御仕置には決て及申間敷奉存い。歎敷儀に奉存い。以上。(小谷兄與小寺兄書)

七月廿二日〇正德六年(紀元二三七六年)。

——兼山麗澤秘策

ト爲ス。閑窓瑣談ノ傳フル所全ク之ニ同シク、亦「何物語とやらいふ書正德(〇紀元二三七一年—二三七五年)享保(〇紀元二三七六年—二三九五年)年間の實錄にて、其時にしるせし寫本なり。に、正德六年〇紀元二三七六年。の夏、熱を煩ふ病人多く、一ケ月の中に、江武の町々にて死する者八萬餘人に及び、棺をこしらゆる家にても間に合す、酒の空樽を求めて亡骸を寺院へ葬するに、墓地に埋む

所なければ、宗體に拘らず火葬ならでゝ不レ納といふ。依レ之茶毘所に送り火葬せんとすれば、棺桶の數限りもなく積かさねて、十日二十日の中には火をかけること事ならず、其到來の順々に茶毘すれば、日數をはるかに經といふ。是におゐて貧しき者の亡骸ゝ如何ともすべきやうなく、町所の長たる人々も世話行屆かで公廳へ訴へまうせしかば、夫々の御慈悲を賜り、寺院に仰せつけられて、葬がたき亡骸をば、回向の後孤に包みて舟に乘せ、こと〳〵く品川沖へ流し、水葬になされしといふ。按するに、正德六年（紀元二一七一年。）の火災に十万八千人の燒亡ゝ、當時猶言傳へて怖るれど、享保元年（紀元二六六年。）の天行病に數万人の一時に死亡せしを、後に傳へて言ものなきゝ、火難と違ひて書留しものゝ鮮き故なるべし。」ト記シ、古呂利考ニハ、「此疾正德年間（紀元二七一三年。）鎭西に起りて、小兒の感冒最も多く、漸次流傳して、尾州の地に及ひ、大人も適感する者あり。人呼て早手と云。之を颶風の猝然として至るに比する也。爾後筑の前後、年々行ると云こと、今時醫談及筑人應取遜葬の小兒暴痢新考に詳に見たり。」ト有リ。果シテ然ラハ今ノ所謂疫痢ナル者歟非歟。

享保十三年戊申（紀元二三八八年。）一二月、江戸痘瘡流行ス。（御徒方萬年記。大成令。）

享保十三年痘瘡　左ノ如シ。

享保十三申年（紀元二三八八年。）三月朔日

大納言樣（德川家重。）御疱瘡被レ遊レ付、

一、西丸ゟ爲レ伺二御機嫌一、明二日一（享保十三年（紀元二三八八年）三月。）御三家始惣出仕之事。

一、御本丸ゟも御樣躰御輕恐悅之旨ニ而、西丸仕廻、登城可レ有レ之事。

一、病氣幼少之面々ゟ、御本丸月番之老中、且對馬守（安藤信友。）ゟ、使者可二差越一レ事。

一、在國在邑之面々、十万石以上ゟ使札可二差越一レ事。

一、在江戸隱居の面々よりは、御本丸月番之老中、且對馬守（安藤信友。）へ、使者可レ被二差越一事。

一、在國在邑之隱居よりも、飛札可レ被二差越一事。

一、從二明二日一、（享保十三年（紀元二三八八年）三月。）御酒湯被二爲召一レ迄ゟ、每日對馬守（安藤信友。）まで、使者可レ被二相觸一レ。

右之通可レ被二差越一事。

享保十三申年（紀元二三八八年。）三月

大納言樣〇德川家重。御疱瘡被遊ハ。御快然之爲御祝義、赦被仰付ハ。當時牢舍之者之內、赦ニ可成もの有之者、遂吟味、早々可書出ハ。

享保十三申年〇紀元二三八八年。三月八日

大納言樣〇德川家重。被遊御疱瘡、御酒湯被爲召ハ御祝義、公方樣〇德川吉宗。大納言樣〇德川家重。ハ、

二種一荷宛。　拾万石以上。

壹種一荷宛。　五万石より九万九千石迄。

壹種宛。　壹万石より四万九千石迄。

右之通、御酒湯被爲召ハ翌日、朝六半時ゟ四時迄之內、以使者可有献上ハ。

大納言樣〇德川家重。ハ之献上物は、西丸ハ可差上ハ。在國在邑之面々ハ、以當地之者、差上之、其以後以使札、御歡可被申上ハ。以上。

三月〇享保十三年(紀元二三八八年)。

享保十三申年〇紀元二三八八年。三月十一日

大納言樣〇德川家重。御酒湯被爲召ハ爲御祝義、明十二日〇享保十三年(紀元二三八八年)三月。御本丸ハ惣出仕、夫より西丸ハ可有登城ハ。尤熨斗目半袴可有着用ハ。

但、病氣幼少隱居之面々ハ、月番之老中對馬守ハ以使者、御祝儀可被申上ハ。

右之趣、可被相觸ハ。

——大成令

一、二月朔日〇享保十三年(紀元二三八八年)。

疱瘡流行ハニ付、二血丸御調合、一役ハ一包宛可被下旨、御藥今日〇享保十三年(紀元二三八八年)二月朔日。出來合不申ハニ付、出來次第御渡可被成由、於山吹之間、本多伊豫守殿〇忠統。被仰渡之。

一、二月二日〇享保十三年(紀元二三八八年)。

於山吹之間、二血丸壹包宛、有合之詰番へ本多伊豫守殿〇忠統。御渡。

但、右御禮之儀者、伊豫守殿〇本多忠統。御宅ハ計諸向參、衣服麻上下ニ而參ハ由。

一、同日〇享保十三年(紀元二三八八年)二月廿一日。

二血丸被下ハ。

奧醫師井關玄悅。栗本瑞見、河野松庵。橘隆庵。岡道滄、村上養純。西丸奧醫師小森西倫。井關玄周。長尾文哲。內田玄勝。小次郎(〇德川宗武)樣御附醫師高木玄齋。寄合醫師半井驢庵。今大道道三。澁江通玄院。小島昌怡。

右醫師衆ハ、此間二血丸被下置ハ。布衣以下之御直參ニ而望之者も、右之衆中ハ申達ハ樣可仕旨、水野壹岐守殿〇忠定。被仰ハ由、御目付石野八太夫本番石河

庄九郎に被申聞し。

右御藥頂戴仕度面々者、御徒方ニ而ハ頭々に相達、頭々差圖之上、右醫師衆に相越頂戴致し可然旨、組々に無急度相觸し樣、庄九郎組頭三宅彌兵衛に申渡之、

○朱書。右二血丸、御徒方ニ而ハ相願致頂戴し組々有之、七番組抔ハ八人頂戴いたし。

——御徒方萬年記

享保十五年麻疹及鍋冠

十五年庚戌○享保○紀元二三九○年。冬江戸麻疹流行シ、翌春○享保十六年○紀元二三九一年。ニ至ル。貴人ノ之ニ侵サル、者多シ。○柳營日次記。是時又鍋冠ト云フ病流行ス。○正寶錄。御徒方萬年記。月堂見聞集。麻疹年代記。

享保十五年麻疹及鍋冠事蹟

享保十五年麻疹及鍋冠　鍋冠ハ、日本疾病史丹毒ナリト云フ、麻疹ノ貴人間ニ入リタルコトハ、

享保十五戌年○紀元二三九○年。十一月廿二日

大納言樣○德川家重。御麻疹被遊し付而、

一、西丸に爲伺御機嫌、明廿三日○享保十五年(紀元二三九○年)十一月。惣出仕之事。

一、御本丸に茂、御樣體御輕恐悅之旨ニ而、西丸仕廻、可有登城事。

一、病氣幼少之面々ハ、御本丸月番之老中、且對馬守○安藤信友。に、使者可差越事。

一、在國在邑之面々ハ飛札可差越事。

一、在江戸隱居之面々より、御本丸月番之老中、且對馬守に、使者可差越事。

一、明廿三日○享保十五年(紀元二三九○年)十一月。より、御酒湯被爲召し迄ハ、毎日對馬守○安藤信友。まで、使者可被差越事。

右之趣、可被相觸し。

西丸に麻疹病人并看病人差控し得共、向後不及其義し間、寄々可被通し。

十一月廿二日○享保十五年(紀元二三九○年)。

享保十五戌年○紀元二三九○年。十一月廿三日

大納言樣○德川家重。御麻疹被遊し付而、爲伺御機嫌出仕之刻、

十一月(○享保十五年紀元二三九○年)

廿四日　月次朔日出仕之分

廿五日　月次十五日出

廿六日

右之通、西丸に可有登城し。詰衆御奏者番者、西丸より御本丸にも可被罷出し。

享保十五戌年○紀元二三九○年。十二月五日

覺

大納言樣（德川家重。）御酒湯被レ爲レ召レ候爲二御祝義一、明六日（享保十五年（紀元二三九〇年）十二月。）御本丸江御惣出仕、夫より西丸江も可レ有二登城一候。尤服紗小袖麻上下可レ爲二着用一事。

但、病氣幼少隱居之面々ハ、月番之老中、對馬守宅江以二使者一、御祝義可二申上一事。

一、在國在邑之面々ハ、飛札可二差越一候事。

一、在國在邑之隱居よりも、飛札可二差越一事。

右之趣、可レ被二相觸一候。以上。

十九日（享保十五年、紀元二三九〇年、十一月。）小五郎君（德川宗尹。）麻疹酒湯の式行はるゝにより御側戸田肥前守政峰して紗綾十卷一種一荷をつかはさる。

廿一日（享保十五年（紀元二三九〇年）十一月。）尾張中納言繼友卿（德川）麻疹により、御側加納遠江守久通して御尋あり。

廿三日（享保十五年（紀元二三九〇年）十一月。）大納言殿（德川家重。）麻疹わづらひ給ふをもて、群臣西城に出仕して御けしき伺ひ奉る。臥病幼弱致仕のやからは、直月の宿老に使し、在封ハ飛札さゝげ奉り御けしき伺ふ。西城出仕はてゝのち、本城にのぼり御わつらひかろくましますさまを賀し奉る。また高家前田信濃守長泰して、日光門跡に銀百枚をつかはされ、大納言殿（德川家重。）御祈の事を仰せまいらせられ、山王權現氷川明神にも、おのゝ〳〵銀廿枚を進薦せられ、同しく御祈あり。又鶴千代方もおなし病にかゝらるゝにより、御側戸田肥前守政峰して御尋あり。

廿六日（享保十五年（紀元二三九〇年）十一月。）尾張中納言繼友卿（德川）病危篤に及ばるゝにより、松平伊豆守信祝して御尋あり。げふ令せらるゝハ、この程麻疹流行するにより、その藥を製せらる、此病にかゝりぬれば、其毒重く表發せず、下痢する病者あらば、乞奉るまゝに御藥くだされんとなり。廿七日（享保十五年（紀元二三九〇年）十一月。）尾張中納言繼友卿（德川）今朝つゐに逝去せらる。

——有德院殿御實紀

ト見ユ。

一、十一月七日（享保十五年（紀元二三九〇年）。）中略。

（朱書左之趣、御番所日帳にハ無レ之、外記錄ゟ記置。）

十月中ゟ十一月（享保十五年（紀元二三九〇年）。）迄、江戸中一統、痲疹流行、諸向共煩所、看病所等引込多、御徒方抔茂一組貳拾人程ッゝ、引込組茂有レ之。

——御徒方萬年記

十月下旬（享保十五年(紀元二三九〇年)）の頃より、麻疹の病東國海道へ移り、江戸中殊外に流行、一人にても病ざるものなし。其外北國表、惣而日本國中、大概病床に臥す。廿四年以前子の年（寶永五年(紀元二三六八年)）。麻疹はやりしは、實は麻疹にあらず。其臭氣にて、實の麻疹なり。今度のはやり病は、麻疹に似て甚し。二三日以後、出没不定して其形不見、内伏せんにやと疑ふ事なり。今度の麻疹は廿日程も湯にて洗ふ事を忌む。或説に、其病を逃る方は、麩を味噌に一夜漬て、翌日味噌汁にて食す、又金柑を味噌に漬て汁に入れ服す、此病に不染と云々。然ども其驗なし。其病愈て後、咳嗽以の外不治。或説に地黄煎六七匁程の代にて買ひ、椀の四つ目のかさに、酒一盃、生姜自然汁一盃、右三味鍋に入、火にて煎じ服す。又一説に、柚の肉のなかごを去り、白砂糖一盃こめて温灰に煨して食す、よろしと云ふ。如此の妙藥あれども、極めてこれにて好きと云ふ事なし。

——月堂見聞集

庚戌（享保十五年(紀元二三九〇年)）之秋、瘟疫頻行、深秋之交、麻疹復流行、沿門闔境、傳染甚多焉。時醫好清涼者、猶十餘其七八、偏温補者、固不得其治也。

——麻疹精義序

冬（享保十五年(紀元二三九〇年)）より翌年（享保十六年(紀元二三九一年)）冬にいたり、麻疹流行。（身うちへ白牛洞なぬる。）

——武江年表

享保十五庚戌（紀元二三九〇年。）流行。寶永五（紀元二三六八年。）ヨリ二十三年目也。自秋至冬。

——麻疹年代記

鍋冠ハ、

同月（享保十五年(紀元二三九〇年)）十一月。廿九日

奈良屋ニ而年番名主ハ被申渡一

一、頃日鍋かふりヲ申煩有之由、左樣之病人有之者、御藥可被下ハ間、早速町御奉行所ハ可申上ハ。

但、此煩者鼻ヵ上黒くなり、襟ハ廻りハ得者難治由。

一、麻疹出兼ハ者有之者、白牛洞可被下ハ間、町御奉行所ハ可申上ハ。

右之通、組合可申達旨、被申渡ハ。

——正寶錄

十一月（享保十五年(紀元二三九〇年)）。鍋かぶりといふ疾はやる。鼻から上黒くなる。

——武江年表

月堂見聞集享保十五年（紀元二三九〇年。）ノ麻疹流行記ニ附錄シテ云フ「麻疹の病漸減

少する時は、紀州地より又異病生す。俗に云、くろん坊と。是は腰より下一身黒く
なる。一種の鍋かづきと云ふあり。これは頭より黒くなると云へり。或説に黒疱
の病と云へり。紀州の者に尋ぬれば、紀州より東北一里餘の新田あり、田井村〇紀
伊國。と云て、三四十軒程の在所あり。此里に初て病む。大概一村皆死すといへり。委
く其病症を尋れば、黒疱にはあらず、黒班也。京都〇山城國。の麻疹の類の悪病なり。」ト。

附記
享保十七年疫癘

〔附記〕享保十七年〇紀元二三九二年。大飢饉ニ伴ヒ疫癘流行シタル者ノ如ク、成形圖説ニ、西海道ニ於テ疫餓死多カリシコト見ユ。武江年表三月〇享保十七年紀元二三九二年。ノ條、亦「天下飢饉疫病行る。」ト有リ。江戸亦疫癘ノ流行ヲ見タル者歟。

享保十七子年〇紀元二三九二年〇四月

岩手藤左衛門御代官所武州多摩郡押立村　平右衛門
日野小左衛門御代官所同國同郡中野村　源　助
麟性院御領同國同郡〇武州多摩郡〇柏木村　彌　兵衛

右三人之者、江戸内藤宿〇武藏國豊多摩郡〇之末淀橋〇武藏國豊多摩郡〇と申所ニ而、象洞井白牛洞實始メ候之儀、願之通申付候。試候處、功能者有レ之、疱瘡麻疹雞疔、其外雜腫之藥ニ候間、望之者ハ、名主所ニ參調可レ申候。右之通、町中可二觸知一者也。

四月〇享保十七年紀元二三九二年〇

——大成令

十八年癸丑〇享保〇紀元二三九三年。七月ヨリ九月ニ至リ、江戸風病流行ス。〇柳營日次記。萬年記。御徒方萬年記。享保攬要類集。慶寛私記。月堂見聞集。森山孝盛日記。續談海。牧民金鑑。武江年表。

享保十八年風病　傳フラク、

十四日〇享保十八年〇紀元二三九三年〇七月。一昨十二日〇享保十八年〇紀元二三九三年〇七月。頃ろ、世上一統風病流行、家一軒ニ不レ煩者一人も無レ之、勤番諸士漸々三四人勤番ス。四五日ニハ快氣す。江戸中、路途往來人、今明日は漸々一兩人ニ不レ過也。

十六日〇享保十八年〇紀元二三九三年〇七月。大岡右近申聞レ、若年寄三人なから病氣ニ付、登城無レ之レ間、差掛りレ御用者、左近將監〇松平乘邑。伊豆守〇信祝。へ可レ申達一レ、若年寄衆宅ニ而相濟レ御用者、宅ニ可二罷參一レ。

十七日〇享保十八年〇紀元二三九三年〇七月。松平伊豆守〇信祝。相渡御書付、鈴木飛彈守相觸。御番衆助立之儀ニハ、常々より助立不レ申レ而者難レ叶レ間、少宛頭中用捨有レ之、助立不レ申難レ叶分者格別、隨分助立不レ申樣ニ可レ被二申談一レ。以上。

十八日〇享保十八年〇紀元二三九三年〇七月。松平伊豆守〇信祝。相渡ス書付。

此節病人多ニ付、御番衆其外ニ而も、例与違詰切、自分辨當之面々者、此砌者御

霸部時代ノ疫癘